

# 山形西高敷地内遺跡

## 第4次発掘調査報告書

1992

山形県教育委員会

# 山形西高敷地内遺跡

## 第4次発掘調査報告書

平成4年3月

山形県教育委員会

## 序

本書は、平成1年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した山形西高敷地内遺跡第4次発掘調査の成果をまとめたものです。

山形西高敷地内遺跡は山形県の中央部に位置する山形市にあります。山形市は、南西に蔵王山を望み、馬見ヶ崎川扇状地を舞台とする県都として、豊かな自然環境とともに価値ある歴史環境をかたちづくってまいりました。

調査では、地下1.5mから縄文時代の遺物や住居跡が数多く発見され、しかも縄文時代中期末葉から奈良・平安時代まで約3,000年間にわたる大複合遺跡であることが明らかになりました。各時代の生活面を覆う砂や粘土の跡から、数度の自然災害を克服し生活を営んできた、祖先のたくましい息吹きがうかがえます。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた貴重な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

山形県教育委員会教育長 木 場 清 耕

## 例　　言

- 1 本書は、山形県教育委員会が平成1年度に実施した県立高等学校校舎改築事業に伴う山形西高敷地内遺跡の第4次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成1年7月3日から同年10月15日まで、実質79日間に亘って行った。整理・報告書作成作業は平成2・3年の兩年度に亘って実施している。
- 3 遺跡は、山形県山形市鉄砲町二丁目15の64の山形県立山形西高等学校敷地内に所在する。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

主任調査員 佐々木洋治（平成2・3年事務局長補佐）

佐藤 庄一

調査員 佐藤 正俊（現場主任）

名和 達朗

輕部 文雄

水戸 弘美

事務局 事務局長 土門 紹徳

事務局長補佐 斎藤 久子（平成1年）

田苗健太郎（平成2・3年）

事務局員 新間 紘子・長谷川 浩（平成1年）・高橋 春雄（平成1年）

永井 健郎・賣間 秀男（平成2・3年）・渋江 正義（平成2・3年）

- 5 発掘調査にあたっては、山形県教育府総務課・山形県土木部建築課・山形県東南村山教育事務所・山形県立山形西高等学校・山形市教育委員会などの関係機関の協力を得た。

- 6 本報告書の作成は佐藤正俊・佐藤庄一・水戸弘美、本文執筆は佐藤庄一が担当した。編集は佐藤正俊があたり、全体の統括を佐々木洋治が行った。

- 7 調査記録および出土遺物については、山形教育委員会が一括保管している。

- 8 遺構の写真測量および遺物実測図のうちの縄文土器と石器の一部については、シン航空写真株式会社に委託した。

- 9 現地調査と報告書の作成にあたって、次の方々からご指導とご助言を賜わった。記して感謝申し上げる。

柏倉亮吉・坂詰秀一・加藤 稔・阿子島功・手塚 孝・秦 昭繁（敬称略）

## 凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S D ……溝跡	S G ……河川跡	S K ……土壠	S T ……竪穴住居跡
S X ……性格不明遺構	E L ……カマド	E P ……柱穴	E U ……埋設土器
R P ……登録土器	R Q ……登録石器		
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1) 遺跡全体図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
  - (2) グリッドの南北軸は、N- $15^{\circ} 00'$  - Eを測る。
  - (3) 遺構実測図は1/40・1/200縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
  - (4) 遺構観察表中の( )内の数値は、検出部分の計測値を示している。
  - (5) 遺物実測図・拓影図は1/2～1/4で採録し、各々スケールを付した。ただし、大形の土器については一部1/8縮尺のものもあり、その場合は遺物の脇に縮尺率を表示している。
  - (6) 土器拓影図で、外側部分は左側、内側部分は右側に表示している。
  - (7) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
  - (8) 遺物観察表中の( )内の数値は、図上復元による推定値または残存値を示している。
  - (9) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に従った。

## 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	2
II 遺跡の概観	
1 遺跡の立地と環境	4
2 遺跡の層序	4
3 遺構と遺物の分布	11
III 上層の遺構と遺物	
1 上層の遺構	12
2 上層の遺物	12
IV 下層の遺構と遺物	
1 下層の遺構	31
2 下層の遺物	48
(1) 縄文中期末葉の土器の分類基準	48
(2) 住居跡出土の遺物	49
(3) 住居跡以外の出土遺物	64
(4) 土偶・土製品	68
(5) 石器・石製品	69
V 調査のまとめ	
1 縄文時代中期末葉の土器変遷	74
2 縄文時代中期末葉の遺構変遷	77
3 古墳～平安時代の遺構変遷	78
参考文献	78

## 表

表1 上層遺構一覧(1)	14	表8 下層住居跡一覧(3)	36
表2 上層遺構一覧(2)	16	表9 下層住居跡一覧(4)	38
表3 上層遺構一覧(3)	20	表10 下層土壤一覧	42
表4 上層遺構一覧(4)	25	表11 縄文土器観察表(1)	66
表5 上層出土遺物観察表	30	表12 縄文土器観察表(2)	67
表6 下層住居跡一覧(1)	32	表13 打製石器計測表	73
表7 下層住居跡一覧(2)	34	表14 磨製石器・石製品計測表	73

## 挿 図

第1図 調査区全体図	3	第26図 ST46・82・84・85・95住居跡	44
第2図 位置・周辺遺跡図	5	第27図 ST47・103・116・117住居跡	45
第3図 第4次調査区土層図	6	第28図 ST73・75・76・81・89住居跡	46
第4図 上層の遺構全体図	7	第29図 ST127～129・151住居跡	47
第5図 下層の遺構全体図	9	第30図 繩文土器器種分類図	48
第6図 ST1・3住居跡	15	第31図 繩文土器実測図(1)	50
第7図 ST7～9住居跡	17	第32図 繩文土器実測図(2)	51
第8図 ST11・12住居跡	18	第33図 繩文土器実測図(3)	53
第9図 ST13・14・27・172住居跡	19	第34図 繩文土器実測図(4)	54
第10図 ST15・16住居跡	20	第35図 繩文土器実測図(5)	55
第11図 ST10・17住居跡・56・57号土壤	21	第36図 繩文土器実測図(6)	57
第12図 ST19・25・28住居跡	22	第37図 繩文土器実測図(7)	58
第13図 ST20・23・24住居跡	23	第38図 繩文土器実測図(8)	60
第14図 ST21・26住居跡	24	第39図 繩文土器実測図(9)	61
第15図 ST80住居跡	25	第40図 繩文土器実測図(10)	62
第16図 上層出土土器実測図(1)	27	第41図 繩文土器実測図(11)	63
第17図 上層出土土器実測図(2)	28	第42図 繩文土器実測図(12)	65
第18図 上層出土土器実測図(3)	29	第43図 土偶・土製品実測図	68
第19図 ST2・41・45・101住居跡	33	第44図 石器実測図(1)	70
第20図 ST31～34・38住居跡	35	第45図 石器実測図(2)	71
第21図 ST35・36・156住居跡	37	第46図 石器実測図(3)	72
第22図 ST39・74・93・50・72住居跡	39	第47図 繩文時代中期末葉の土器変遷図	75
第23図 ST42・43・77・105住居跡	40	第48図 繩文時代遺構配置図	79
第24図 ST86・87・125・126住居跡	41	第49図 弥生～平安時代遺構配置図	81
第25図 ST44・98・104・110 165住居跡	43		

## 図 版

- |                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| 図版1 調査開始前状況            | 図版26 ST104・110検出状況      |
| 図版2 上層面整理状況            | 図版27 ST104・110全景        |
| 図版3 各壁土層断面             | 図版28 ST45・49ほか全景        |
| 図版4 上層の遺構検出状況          | 図版29 ST46・85・95全景       |
| 図版5 ST1全景              | 図版30 ST47・106・116ほか全景   |
| 図版6 ST3全景              | 図版31 ST50・72全景          |
| 図版7 ST7全景              | 図版32 ST73・75・76・81全景    |
| 図版8 ST10・11全景          | 図版33 ST73・75・81全景       |
| 図版9 ST12全景             | 図版34 ST75・76・89全景       |
| 図版10 ST13、SD18完掘状況     | 図版35 ST82・84・93ほか全景     |
| 図版11 ST13・14・27、SD18全景 | 図版36 ST127～129、SK40ほか全景 |
| 図版12 ST15～17・19、SD18全景 | 図版37 SK130～132検出状況      |
| 図版13 ST20・23～25・28全景   | 図版38 SK140～144ほか全景      |
| 図版14 ST26全景            | 図版39 SK149～155ほか全景      |
| 図版15 ST25・28～30・80全景   | 図版40 EU89～91ほか出土状況      |
| SK56・57、SD22全景         | 図版41 上層出土土器(1)          |
| 図版16 下層重機掘削状況          | 図版42 上層出土土器(2)          |
| 下層遺構検出状況               | 図版43 下層出土縄文土器(1)        |
| 図版17 下層遺構群全景           | 図版44 下層出土縄文土器(2)        |
| 図版18 下層各調査区全景          | 図版45 下層出土縄文土器(3)        |
| 図版19 ST2・12・41・101全景   | 図版46 下層出土縄文土器(4)        |
| 図版20 ST31～33検出状況       | 図版47 下層出土縄文土器(5)        |
| 図版21 ST31～33全景         | 図版48 下層出土縄文土器(6)        |
| 図版22 ST35・36ほか全景       | 図版49 下層出土縄文土器(7)        |
| 図版23 ST38全景            | 図版50 土偶・土製品             |
| 図版24 ST42・43・77全景      | 図版51 打製石器               |
| 図版25 ST43・105全景        | 図版52 磨製石器・礫石器・石製品       |

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

遺跡は、山形県山形市鉄砲町1丁目15番64号、山形県立山形西高等学校の敷地付近一帯に所在する。馬見ヶ崎川扇状地の扇央の微高地に立地し、地目は学校敷地・宅地・道路・畠地等になっている。この地域から土器や石器が出土することはごく最近までわからず、昭和51年1月に山形西高校舎を改築するための基礎工事を行ったところ、地下1.5mから縄文時代の土器が発見され、その後の確認調査で正式に埋蔵文化財包蔵地として登録されたものである。

この時は改築校舎の基礎掘り下げ工事はほぼ終わっていたものの、遺跡の中心部はその北側にあると考えられたため、庭園等の付属工事に関連して二次の発掘調査を実施している。調査は両次とも山形県教育委員会が主体となり、山形西高等学校の協力を得て行った。

第1次調査は、地下タンク・浄化槽・同窓会館の工事地域を対象に、昭和51年4月5日から同年4月28日までの期間で実施している。また第2次調査は、改築校舎北側の庭園および水道・電気配管の工事地域を対象に、同年7月1日から同年7月29日まで行っている。調査の結果、山形西高敷地内遺跡は縄文時代中期末葉から同晩期末葉、弥生時代中期、古墳時代前期、奈良時代、平安時代の五時代に亘る複合遺跡であることが判明した。また各時代の地層の間に2枚の遺物を含まない砂砾や粘土の層が堆積しているため、各時期の遺構が面的に把握できたことも注目される（文献3）。

第1・2次調査で検出された主な遺構は、部分的な検出も含め、縄文時代の竪穴住居跡10棟・土壙9基、弥生時代の土壙・ピット群2ヶ所、古墳時代の住居跡4棟・土壙1基、奈良から平安時代の竪穴住居跡7棟・土壙1基等である。

第3次調査は、遺跡東部の校舎改築工事地域を対象に、同じく山形県教育委員会が調査主体となり、昭和59年6月20日から同年7月25日までの実質26日間の期間で実施している。第3次調査で検出された主な遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟・落ち込み遺構1基、奈良から平安時代の竪穴住居跡9棟・土壙2基・溝状遺構1条等である。

第1・2次調査の遺物包含層は、2枚の無遺物層を挟んで3層に大別されたが、第3次調査地区では、調査区南側においては奈良から平安時代の遺構しか検出されず、調査区北西部の第1層とした縄文時代中期末葉以前の湯茶褐色砂質土層が落ち込んだ場所にのみ、縄文時代中期末葉から古墳時代前期の遺物包含層が確認されている（文献9）。

昭和63年になって、遺跡の北側にさらに山形西高等学校第3校舎の改築の計画がなされるようになった。山形県教育委員会がこれまでの調査成果をもとに関係機関と協議をした結果、工事に先立って同教育委員会が調査主体となって第4次の発掘調査を実施することになったものである。調査期間は、平成1年7月3日から同年10月15日までの実質79日間である。今次の調査でも、県立山形西高等学校からは工事日程の調整や調査事務所・土置場の確保等について多大な協力を得ている。

## 2 調査の経過（第1図・図版1・2）

発掘調査は平成1年7月3日から開始した。はじめに約1,612m<sup>2</sup>の調査範囲に、東西・南北方向に幅1.5m、長さ10~20mのトレンチ（試掘溝）を設定し、遺構や遺物の状況を確認するため手掘りによって表土から掘り下げた。次にその結果をもとに重機械を用いて、上層から遺構確認面までの土を除去した。また第3校舎改築予定地と渡り廊下を対象とした調査区全体に2m四方を1単位とするグリッドの基準杭を設けた。グリッドの基準は、X軸を東西にY軸を南北にとり、第1象限で座標を表示した。各グリッドの名称はX軸の数字を先にY軸の数字を後にして、例えば20-30グリッド（G）というように呼ぶ。南北基準線（Y軸）の方位は、調査区に合わせたため、第1~3次調査とはやや異なり、磁北に対して15度東へ傾いている。

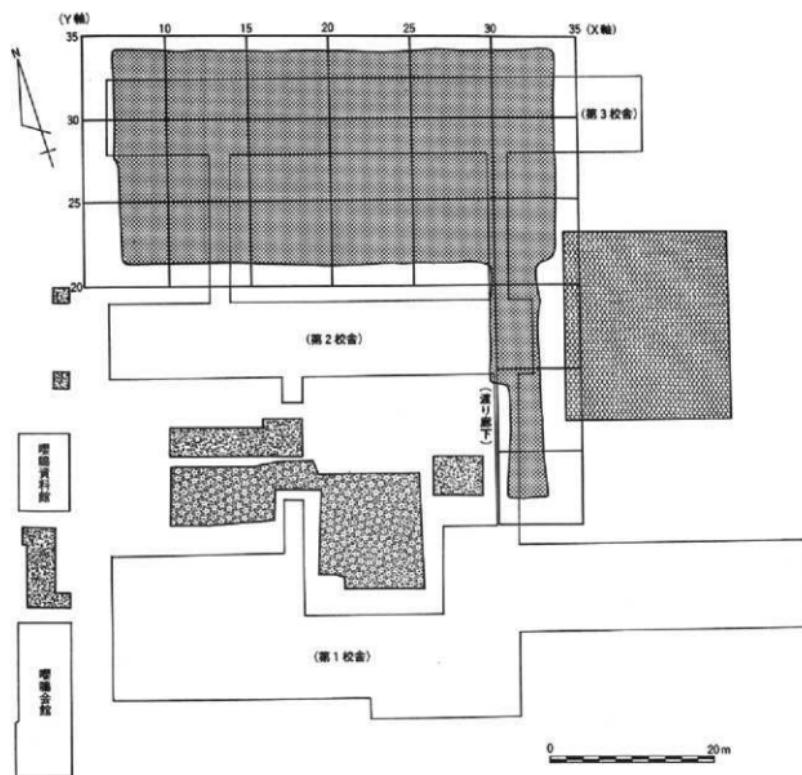
7月12日から重機械による掘削と並行して、上層の面整理および遺構検出作業を開始した。上層の重機械による掘削作業は7月15日まで、面整理および遺構検出作業は7月24日までを要している。この段階で奈良から平安時代の堅穴住居と思われる遺構のプランは約30棟を数え、7月24日から上層の遺構精査に入った。遺構は帯状に土を残し、土層を観察しながら掘り下げ、隨時写真や図面等による記録を行った。出土した遺物は、遺構内のものは遺構の層位毎に、一括のものや復元可能なものは遺物番号を付して記録、取り上げを行っている。上層の遺構の平面図は、8月9日から造り方測量により20分の1縮尺で手取りで行っている。調査の過程で奈良時代から平安時代にかけての焼失家屋が4棟検出され注目された。上層の遺構の調査は8月18日で終了し、同日に第1回の調査説明会を実施し、約80名の方々の参加を得ている。

下層の調査は8月19日から始め、上層と同じようにまず重機械を用いて黄褐色の砂および砂疊層の無遺物層を除去し、縄文時代の遺構確認面まで掘り下げた。地表面からの深さは1.5~2.0mとなる。8月21日で重機械による掘削作業が終了し、同日から下層の面整理および遺構検出作業を開始した。下層の面整理および遺構検出作業は、炎天下に悩まされながらの作業であったが8月31日まで終了している。この段階で縄文時代中期の堅穴住居と思われる遺構のプランは約56棟を数え、9月1日から下層の遺構精査に入った。調査の方法は上層と同様な手順で掘り進めた。

下層の遺構の調査は、住居跡の複雑な切り合いや複式炉の精査等で難航したため、当初の9月30日までの調査期間を半月間延長し、10月15日までかかっている。遺構の密集度と良好な遺存状況は、山形県内でも屈指のものである。9月28~30日には、山形大学教育学部の阿子島功助教授から「遺跡の層序と旧地形」について、現地での指導を得ている。調査の終盤の10月9~10日には、下層の遺構全体について平面図の図化を目的とした写真測量を委託業務によって行った。

なお、下層の遺構の調査成果について9月28日に第2回の調査説明会を実施し、約100名の方々の参加を得た。

発掘した面積は、上層で1,612m<sup>2</sup>、下層で1,416m<sup>2</sup>で合計3,028m<sup>2</sup>となる（文献13）。



: 第1次調査区 (1979年)

: 第2次調査区 (1979年)

: 第3次調査区 (1984年)

: 第4次調査区 (1989年)

第1図 調査区全体図

## II 遺跡の概観

### 1 遺跡の立地と環境（第2図）

山形西高敷地内遺跡は、馬見ヶ崎川扇状地の旧河道のひとつに沿って形成された遺跡で、標高は134m前後をはかる。市街化が進む前の明治37年の地図をみると、遺跡付近が両側の水田より一段高くなっていること、桑畠として土地利用されていたことがわかる。自然地形の詳しい分析は後日に譲ることにして、ここでは歴史的環境を主に述べる。

馬見ヶ崎川扇状地周辺でもっとも古い遺跡は、沼ノ辺貯水池の西方にあるにひやく寺遺跡で、縄文時代早期中葉から前期の土器が出土している。縄文時代中期になると、熊ノ前遺跡（文献4）や駿遊堂裏遺跡・松見町遺跡など扇状地の扇頭や扇尖部に遺跡がみられる。縄文時代後・晚期の遺跡は、向山遺跡・千葉屋敷遺跡・松留遺跡など扇側から山麓にかけてみられる。

古墳時代にかけては、扇状地の扇端および扇辺部に遺跡が多くみられるようになる。江俣遺跡・宮町桧塚ノ木遺跡などがその例で、低地部への進出がうかがえる。古墳時代後期には鳴遺跡のような大規模な集落跡が出現し、山麓部にはお花山古墳群・高原古墳なども造営される。奈良時代から平安時代にかけては、扇状地扇端部に篠田遺跡・五日町遺跡・二位田遺跡など多くの集落跡がみられ、長苗代条里遺跡のような律令体制下の条里制も施行される。

### 2 遺跡の層序（第3図・図版3）

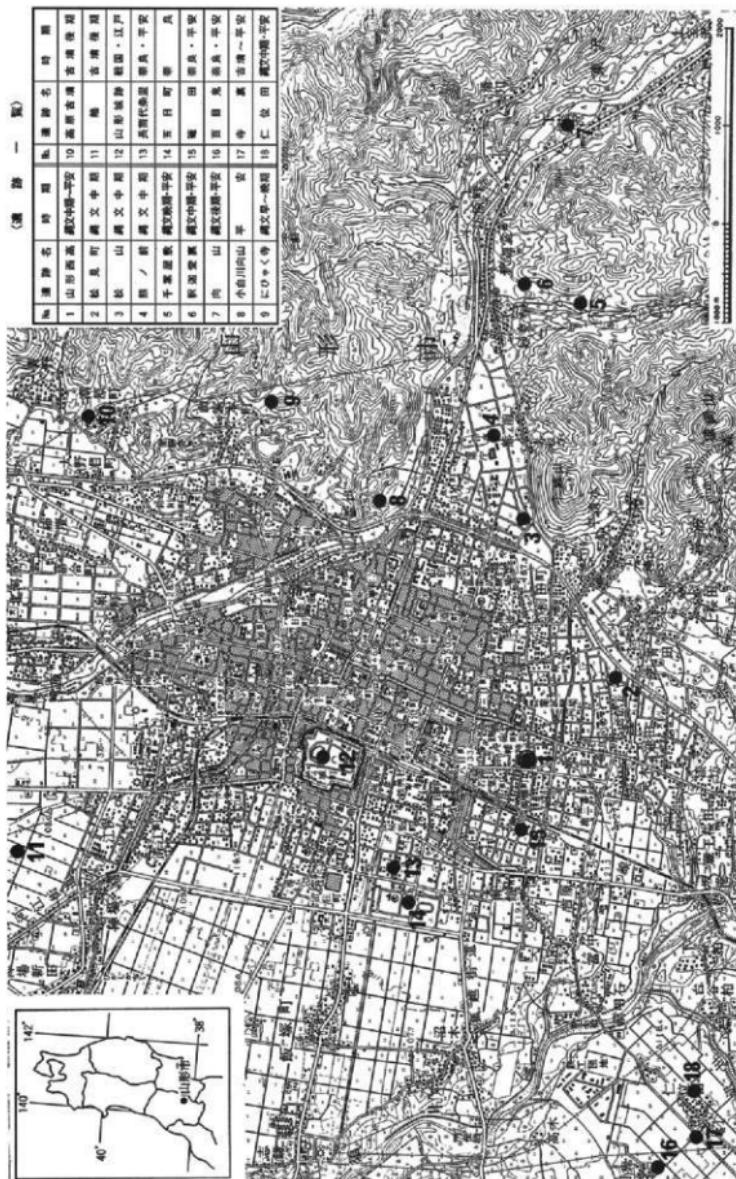
遺跡の基本層序は、上から大きく8層に分けられる。第3図の土層図のうち、上・中段は調査区南壁、下段は調査区南東隅東壁のものである。土層の堆積状況は基本的に第1・2次調査と同様であるが、阿子島功助教授による現地での指導を加味して、各層の名称と内容をかなり修正している。

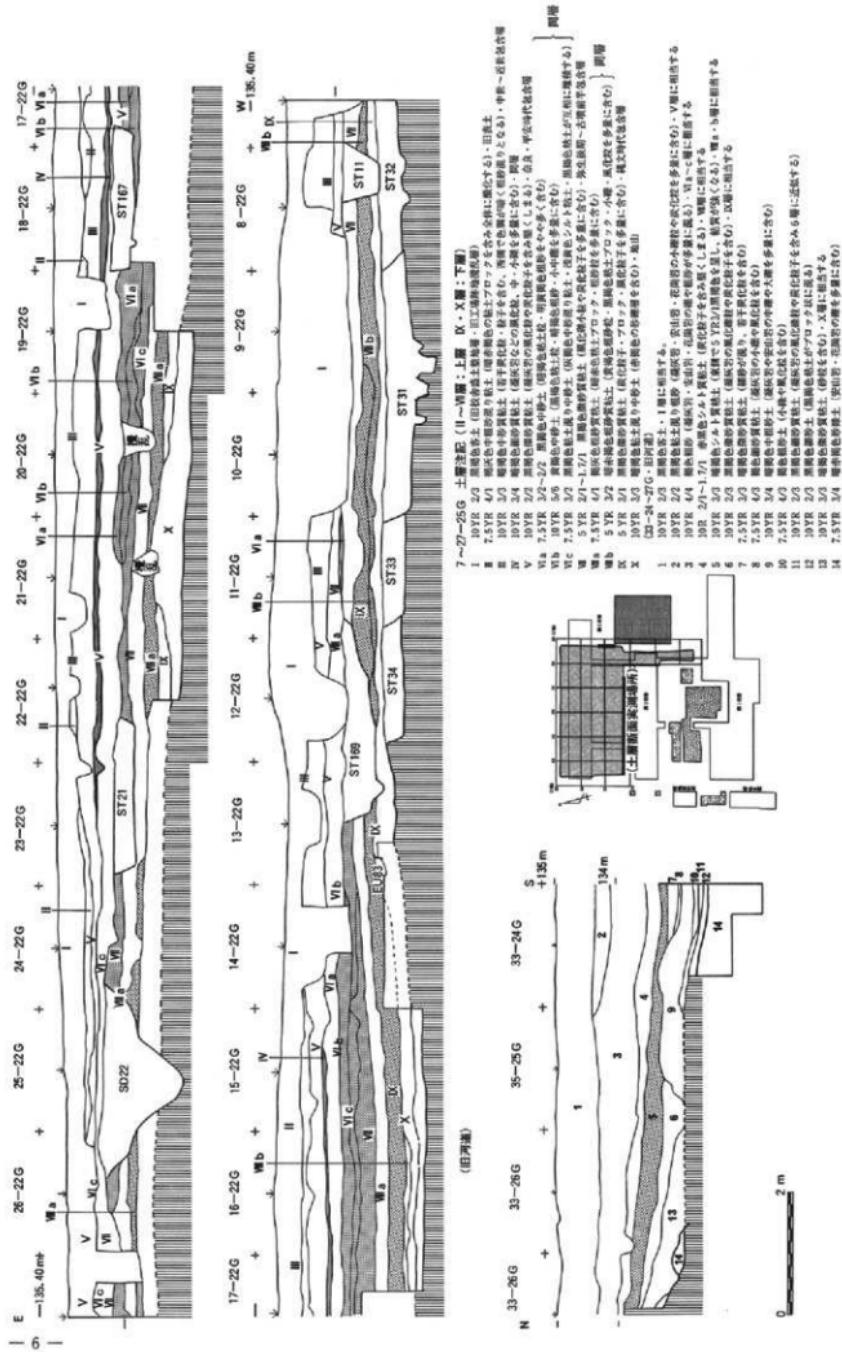
第I層は桑畠などの旧耕作土の上に日飛産業株式会社や山形西高等学校校舎建設の際に客土した整地層、第II層は桑畠などの旧耕作土層である。第III層は今回新たに設定した暗褐色中砂質粘土で、中世から近世の遺物包含層である。第IV層も今回新たに設定した暗褐色細砂質粘土で、凝灰岩の礫を少量含む無遺物層である。土層の厚さが5~10cmと薄く、現地表面から第IV層上面までの深さは60~80cmを測る。

第V層は黒褐色微砂質粘土で、奈良・平安時代の遺物包含層である。土層の厚さが平均30cmを測り、旧第III層に当る。第VI層は黄褐色~黒褐色の砂土で、無遺物層である。3層に細分され、南壁の中央付近が約60cmと厚く堆積している。第VII層は黒褐色微砂質粘土で、弥生時代中期末葉から古墳時代の遺物包含層である。土層の厚さが20~30cmとほぼ一定している。第VIII層は褐灰色~暗赤褐色の砂質粘土で、無遺物層である。3層に細分される。

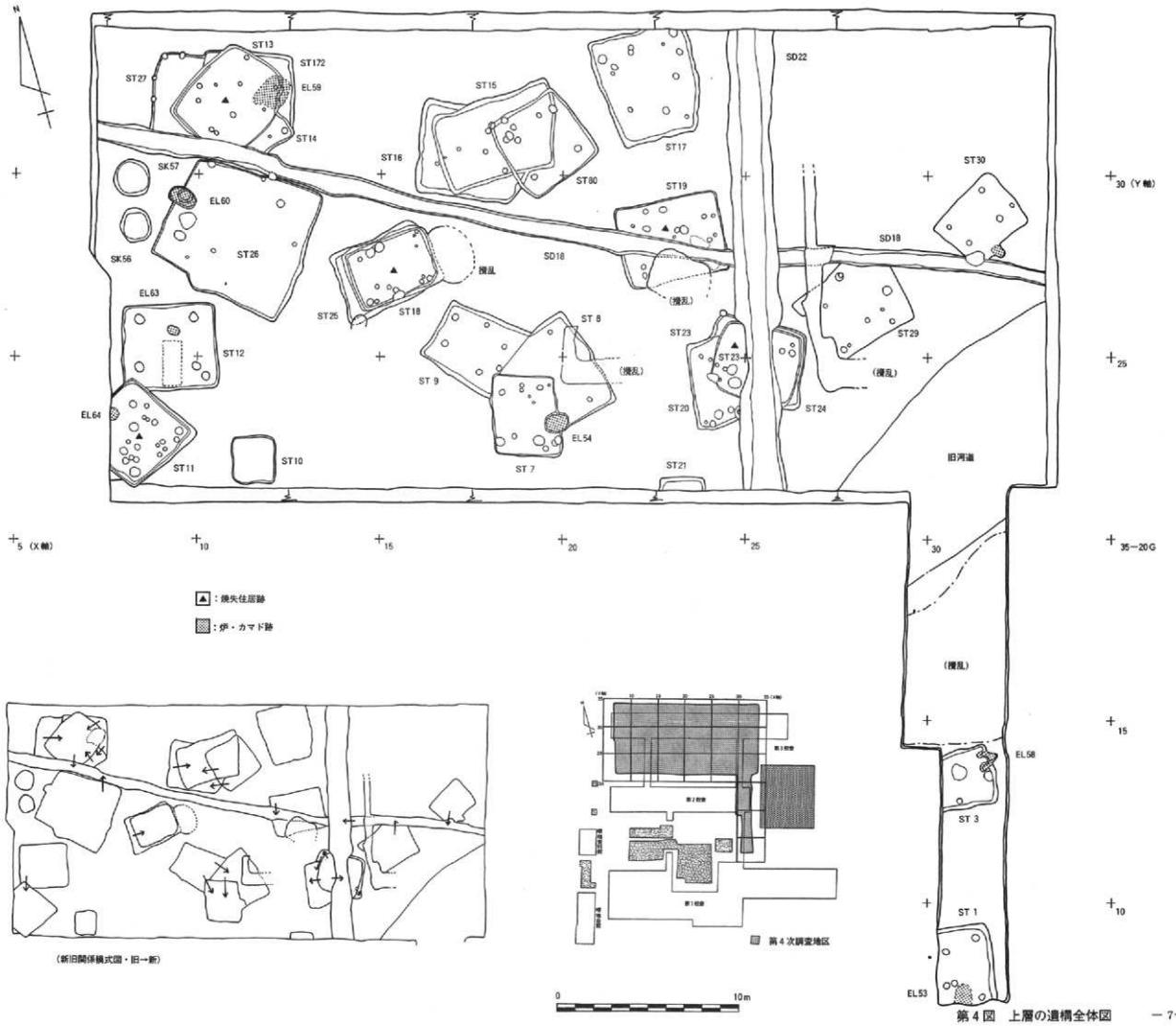
第IX層は黒褐色微砂質粘土で、縄文時代中期末葉の遺物包含層である。土層の厚さが10~30cmを測る。第X層は暗褐色粘土混り中砂土で、縄文時代中期の遺構面を形成する。

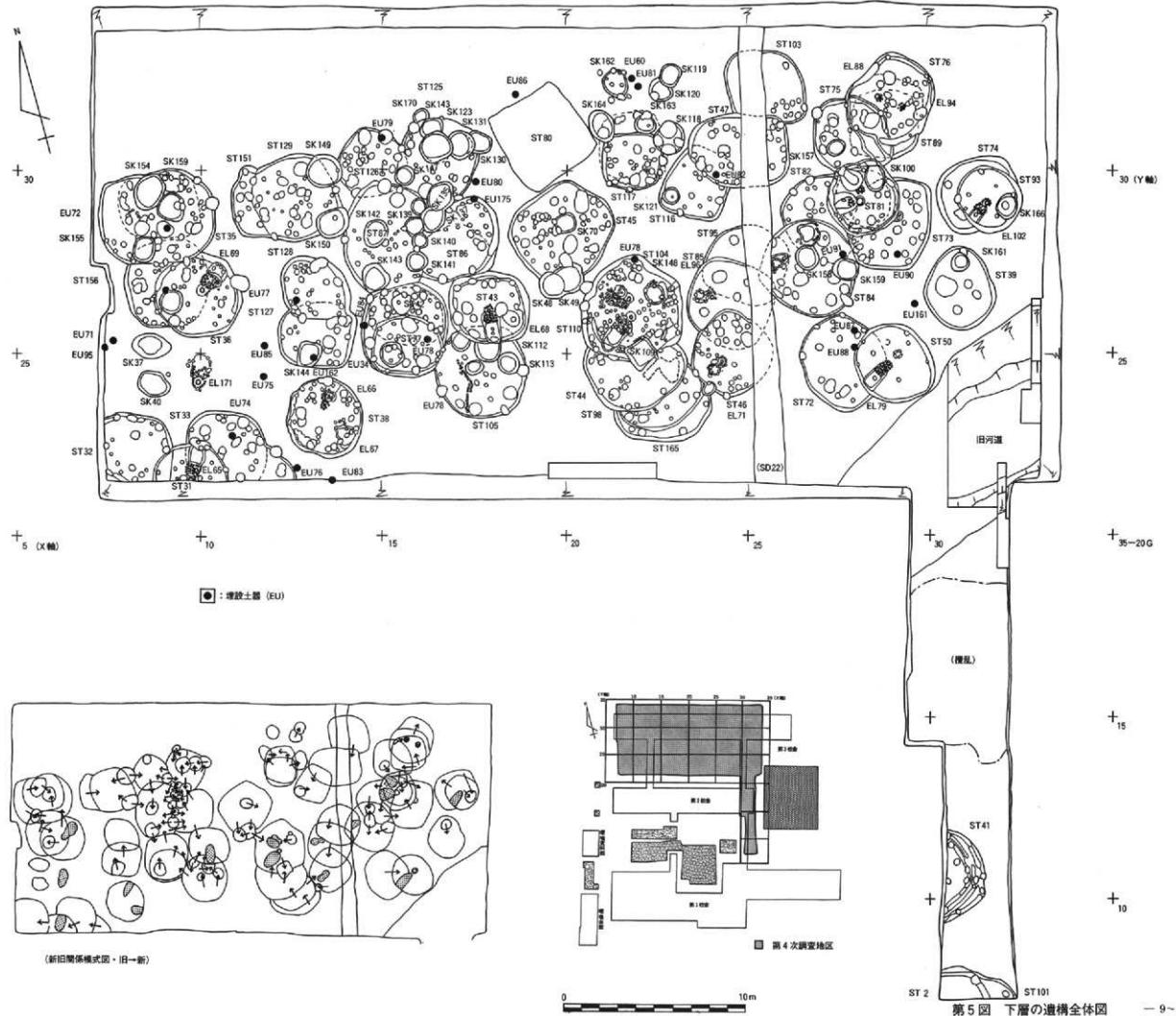
第2図 位置・断刀遺跡図





第3圖 第4次調查用圖





### 3 遺構と遺物の分布（第4・5図、図版4・17・18）

山形西高敷地内遺跡の遺物包含層は、2枚の無遺物層を挟んで3層に大別される。さらに上面の第Ⅲ層にも中世から近世の遺物が認められるが、遺構はほとんど検出されていない。第4次調査では、第V層とした奈良・平安時代の遺構が第VI層を突き抜けて第VII層ないし第VIII層まで掘り下げられていることから、遺構検出面として把握出来たのは第VII層の褐灰色～暗赤褐色の砂質粘土直上面と第X層の暗褐色粘土混り中砂土直上面の二面だけである。この二面を便宜的に各々「上層面」、「下層面」と呼び、この二面から検出された遺構や遺物を「上層の遺構・遺物」、「下層の遺構・遺物」として以後の記述を行う。

上層からは、遺構として古墳時代および奈良・平安時代の堅穴住居跡28棟と土塹3基、溝跡2条などが検出されている。調査区の南東隅と渡り廊下部分との間を旧河道が流れおり、遺構はこれに沿う形で分布する。ただし、第4次調査区は大半が旧河道の北側に当たるため、旧河道の南側は渡り廊下部分から平安時代の堅穴住居跡2棟しか検出されていない。このうち奈良・平安時代の遺構は北東隅を除く旧河道の北側ほぼ全域に分布する。堅穴住居跡の重複が6ヶ所で認められる。また奈良・平安時代の堅穴住居跡のうち、焼失家屋と思われるものが5棟検出されたことも注目される。古墳時代の遺構として堅穴住居跡3棟が検出されており、すべて古墳時代前期に属するものと思われる。古墳時代の遺構は調査区の北西部に集中して分布する。

上層からは、遺物が古墳時代および奈良・平安時代を主に整理箱にして約10箱分出土している。中・近世の遺物は第Ⅲ層から微量出土しただけである。奈良・平安時代の遺物は調査区のほぼ全域から出土するが、当該時期の遺構覆土から多く出土する。古墳時代前期の遺物は大半が堅穴住居跡内出土のもので、第VII層の遺物包含層から出土したものは少ない。このほか上層には弥生時代中期末葉や縄文時代中期末葉の遺物がしばしば混在する。

下層からは、遺構として縄文時代中期末葉の堅穴住居跡48棟と土塹51基、単独の石組複式炉1基、単独の埋設土器21基などが検出されている。調査区の南東隅と渡り廊下部分との間を旧河道が流れおり、縄文時代中期末葉の遺構もこれに沿う形で分布する。ただし、第4次調査区は大半が旧河道の北側に当たるため、旧河道の南側は渡り廊下部分から堅穴住居跡3棟しか検出されていない。縄文時代中期末葉の遺構は北東隅を除く旧河道の北側ほぼ全域に列状に分布する。堅穴住居跡の重複が著しく、調査区全域に遺構が密集して分布する感じであるが、いくつかのブロック毎にまとまりも想定される。

下層からは、縄文時代中期末葉の遺物が縄文土器を主に整理箱にして約100箱分出土している。縄文時代中期末葉の遺物は調査区のほぼ全域の第IX層から出土するが、当該時期の遺構覆土から多く出土する。後述する縄文土器の分析からは、この時期の遺物が縄文土器編年の一型式内に収まることがわかつており、極めて短期間に営まれた集落であったことが知られる。また縄文土器に比較して石器の出土量が少ないと本遺跡の特徴である。

旧河道の覆土からは、縄文時代から奈良・平安時代まで各時期の遺物が微量出土するだけで、各時期の遺物捨て場に使われたような形跡はない。

### III 上層の遺構と遺物

#### 1 上層の遺構（第6～15図、図版5～15、表1・2）

山形西高敷地内遺跡の上層V・VI層からは、遺構として、古墳時代および奈良・平安時代の豊穴住居跡28棟と土壙3基、溝跡2条などが検出されている。このうち古墳時代の豊穴住居跡は3棟検出されており、すべて古墳時代前期に属するものと思われる。残りの遺構は奈良・平安時代に属するものである。遺構の分布など概略的なことは、第II章で述べているので省略する。遺構の記述については簡明を図るために、表によって原則として遺構番号順に説明する（表1～4参照）。

#### 2 上層の遺物（第16～18図、表5）

山形西高敷地内遺跡の上層からは、古墳時代および奈良・平安時代の遺物が整理箱にして約10箱分出土している。大半が豊穴住居跡や土壙および溝跡の遺構内出土のものであるが、遺構以外の包含層からも奈良・平安時代に属する遺物が発見されている。次に遺構順にその内容を述べる。

ST 1住居跡の床面およびEL53からは、須恵器の蓋（第16図1～3）、坏（同4）、壺（同5）、土師器坏、壺などが出土している。須恵器蓋のつまみ部は凝宝珠形とやや扁平なもの二種がある。1は小壺等の蓋と思われる。他に天井部が手持ちヘラ削り調整されている蓋小片も床面から1点出土している。坏は底径がやや広く器高が高いもので、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。土師器のうち壺は口縁が外反し頸部に一条の沈線を有するロクロ整形のもので、内面が黒色化処理されている坏片も1点出土している。床面の土器の特徴から、住居跡の時期は9世紀中葉頃と推定される。

ST 3住居跡からは、須恵器の坏（第16図6・7）と壺が少量出土している。EL58出土の須恵器坏は底径がやや小さく器高が高いもので、底部の切り離しは回転糸切り無調整の別個体がある。6は底部がヘラ切りであるが、覆土1層出土のものであり、カマドの土器の特徴から、住居跡の時期は9世紀末葉頃と推定される。

ST 7住居跡からはEL54付近を主に、須恵器の蓋（第16図8）、坏（同9）、土師器鉢（同11・12）、同壺（同10）が出土している。須恵器蓋のつまみ部はやや扁平で、平坦な天井部をもつ。坏は底径が大きく、底部の切り離しはヘラ切り無調整である。土師器鉢は器高が高く、頸部に沈線ないし無文帯をもつ。同壺はST 3住居跡と同様である。これらの土器の特徴から、住居跡の時期は9世紀初め頃と推定される。ST 8・9住居跡からは、土師器壺片が小量出土しているだけで、時期を決定する遺物は出土していない。ただし遺構の重複から古い順にST 9→ST 8→ST 7の新旧関係が考えられる。ST 10住居跡からはF 2層を主に、土師器坏・高坏・壺・壺・鉢の破片が少量出土している。調整技法や器形等から古墳時代前期に属するものと思われる。

ST 11住居跡からはF 3層・床面を主に、土師器坏・鉢（第16図15）・壺（同16）・壺（同13）、

須恵器の蓋・鉢（同14）などが出土している。15・16は口唇部に平坦な稜、頸部に一条の沈線、外面に縱方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目をもつ点で調整手法に共通性を示す。このほか床面から底部外面にヘラ削り、同内面に刷毛目をもつ土師器壺、丸い天井部とカエシの無い口唇部をもつ須恵器蓋片も出土している。資料が少ないが、時期は奈良時代8世紀前半頃と推定される。

ST12住居跡からは南東隅の床面を主に、土師器壺（第16図17・18）・壺（19）・壺（第17図21・23）・壺が出土している。壺は口縁部が外反し、丸底で中央がくぼむものである。壺は丸底のもので器台との対応がうかがえる。壺は口縁部が外反し、体部が球形を呈するもので、外面および口縁部内面に刷毛目調整が施されている。調整技法や器形等から古墳時代前期4世紀前半頃に属するものと思われる。

ST13住居跡からはEL59付近を主に、須恵器の蓋（第17図26）・壺・壺・土師器壺（同20・25・28）が出土している。須恵器蓋のつまみ部はやや扁平で、平坦な天井部をもつ。壺は底径がやや小さく、底部の切り離しはヘラ切り無調整である。土師器壺は口縁が外反し頸部に一条の沈線を有するロクロ整形のものである。これらの土器の特徴から、住居跡の時期は9世紀初め頃と推定される。本住居跡の覆土から土師器器台（同24）と高壺（同27）が出土しているが、これらは古墳時代に属するものである。ST14住居跡からは東壁付近の床面から、須恵器の壺（第18図31）・高台壺（同32・33）、土師器壺（同29・30）が出土している。須恵器壺は底径がやや大きく、底部は全面に手持ちのヘラ削り調整がなされている。高台壺は底径が大きく、底部の切り離しはヘラ切りである。土師器壺は口縁が外反し、外面に刷毛目を有するロクロ整形のものである。これらの土器の特徴から、住居跡の時期は奈良時代8世紀中葉頃と推定される。ST172住居跡は遺物が出土していないが、遺構の重複関係からST13・14住居跡より古く、ST27住居跡より新しい時期と考えられるものである。ST27住居跡からは北西隅の床面を主に、土師器器台（第18図35）・壺（第同42）・壺・壺が少量出土している。器台は口縁部がS字状に外反し、脚部に三個の穿孔が付くものである。壺は頸部がややくびれる丸底のもので、器台との対応がうかがえる。壺は口縁部が外反し、体部が球形を呈するものである。調整技法や器形等から古墳時代前期4世紀前半頃に属するものと思われる。

ST15住居跡のF1からは、内黒の土師器壺と外面に刷毛目調整をもつ壺が微量出土しているだけで、詳しい時期は不明である。ST16住居跡は、遺構の重複関係からST15住居跡より古い時期と考えられるものであるが、内黒の土師器壺と刷毛目調整をもつ土師器壺が微量出土しただけで詳しい時期は不明である。ST17住居跡も、内黒の壺と土師器壺が微量出土しているだけで、詳しい時期は不明である。ST19住居跡は覆土上層から須恵器壺、土師器壺が少量出土している。須恵器壺は底径がやや小さく、底部の切り離しはヘラ切りと糸切りの二種がある。土師器壺は口縁が外反し内外面に刷毛目を有するロクロ整形のものである。資料が少ないが、住居跡の時期は9世紀中葉頃と推定される。

ST20住居跡からは西壁付近を主に、須恵器壺・壺・赤焼土器壺、土師器壺・壺が少量出

### 表一 上層遺構一覧(1)

ST 1 住居跡（第6図、図版5）

概 要	30・32・5～10G。施設の下部にあり上部埋れ
形 状	狹丸形? 斜傾、長袖4.7m×幅袖3.8m。深さ（V層中から）31～42cm
壁	はげ土面に覆り込み。出土口等跡不明
周 溝	はげ土全面。幅22～43cm・深さ（W層より）10～16cm両面U字形
柱	5個。主柱穴EP 1・2（直径約6cm・深さ18～48cm）。支柱穴EP 3～5（直径約4.1cm・深さ11～31cm）
カマド	住居跡東寄り。底板、嵌入板のみ経cm。方向N=16°～E。覆土は黒色土に他土混り。東・西側に他土ブロックを多量に含む（EL53）
覆 土	全体にシングルで堆積し、上部は複数しているため不明
遺 物	住居跡中央部で下部よりEP 1～3（16層3～5）が出土。いずれも瓦片の状態
時 期	平安時代中期～後半頃

ST 3 住居跡（第6図、図版5・6）

概 要	30・31・8～10G。西側未検出。校舎の下部にあり上部埋れ。
形 状	狹丸形? 斜傾、南北延長3.00×東西3.34m。深さ（V層中から）52～63cm
壁	方向南北軸N=86°～E
柱	全体にはげ土から立ち上りが見ゆ。周溝は突出せず
柱 六	1個。EP 1支柱穴あるいは敷柱穴（直径約33cm・深さ13cm）
貯 藏 室	EP 2。覆土は黒色土に灰化粘土が多量に混り既土と若干分離する（EL56）
カマド	住居跡西寄りの底板。規格・長さ1.09m・幅1.12m。方向N=84°～E。
遺 物	両袖部に自然の石礫石を配し白色粘土で塗り固める。底部部が若干使用している感。底部部は焼成していない
時 期	EL58と覆土上層より土器片が出土。下層ではあまり出土せず
時 期	平安時代9世紀末頃

ST 7 住居跡（第7図、図版7）

概 要	18～20・23～25G。ST 8・9・10重複。複数部屋はほぼ良好
形 状	不安定な方形形。底板・南北2.36×東西3.38m。深さ（V層下部から）28～33cm。方向南北軸N=14°～E
壁	北・南端はほぼ直角。東・西端で傾斜やか。全体に剥落がある
床	住居跡の中央部が暗く緑る。底板はやや剥落である
周 溝	突出させず
柱 六	4個（EP 1～8）。いずれも南寄（EP 1～4）と北寄（EP 5～8）に片寄り約1mの傾斜がある東西方向に沿る。径15～53cm・厚さ31～26cm
カマド	EL54（住居跡東側部の中央南北寄り）。規格・長さ1.27m・幅1.12m
遺 物	方向N=75°～W。全体に落ちており縦横軸・袖跡・椎道跡を明確に検出できず。橢円状は不明。黒土は黒色土に黄褐色粘土・白色粘土が混在する鉛色質
時 期	北側の底部部に白い塊（EP 1～8）を充填状態で支柱する
覆 土	水平な表面を有し土壌から出土する
遺 物	カスミ硝洞跡で東側部跡（RP 4～6）等少量に検出。南寄で一部で壺が出土。平安時代9世紀初め頃。新田開拓ST 9→ST 8→ST 7
時 期	平安時代9世紀初め頃。新田開拓ST 9→ST 8→ST 7

ST 8 住居跡（第7図、図版7）

概 要	18～20・24～27G。ST 7・9・10重複。東側部が焼失。造作状態は良くない
形 状	不安定な方形形。底板・南北2.03m×東西25.00m。深さ（V層下部から）16cm。上部は不明であるが縦斜めに傾いており底板跡・袖跡・椎道跡を明確に検出できず。橢円状は不明。黒土は黒色土に黄褐色粘土・白色粘土が混在する鉛色質
壁	2個（EP 9～10）。北寄部と南寄部で検出。径23～26cm・深さ24～25cm
カマド	不明
覆 土	下層のみ検出され全体は不明確
遺 物	全体に黒土層は少ないと
時 期	奈良末～平安時代初め。新田開拓ST 9→ST 8→ST 7
時 期	平安時代9世紀初め頃。新田開拓ST 9→ST 8→ST 7

ST 9 住居跡（第7図、図版7）

概 要	16～19・24～27G。ST 7・8・9重複
形 状	不安定な方形形。底板・南北2.00m×東西24.03m。深さ（V層下部から）14cm
壁	上部は不明であるが縦斜めに傾いており底板跡。方向N=41°～W（長袖）
床	ほぼ平滑で敷詰
周 溝	突出させず
柱 六	4個（EP 11～14）。住居跡の隅部に在る主柱穴。径23～28cm・深さ18～27cm
カマド	不明
覆 土	下層のみ検出され全体は不明確
遺 物	全体に黒土層は少ないと
時 期	奈良末～平安時代初め。新田開拓ST 9→ST 8→ST 7
時 期	平安時代9世紀初め頃。新田開拓ST 9→ST 8→ST 7

ST 10 住居跡（第11図、図版6）

概 要	11・12・23～24G。南側でST 11と重複。V層中で確認。一部推測あり
形 状	狹丸形? 斜傾、長袖4.7m×幅袖4.3m。深さ（V層下部から）31～35cm
壁	北寄から西寄にかけては直面か直面近くで底板は底板か。全体に秋萩
床	住居跡中央に東西があるが外は平面で敷詰
周 溝	3層に区分され11層は水平に堆積。覆土はF 2から多量出土
柱	古墳時代初期。南寄・柱穴・カマド・窓跡は焼出されず

ST 11 住居跡（第8図、図版6）

概 要	7～9・22～25G。北側でST 12と重複。焼失家屋。上部は全体に焼失を受ける
形 状	狹丸形? 斜傾、長袖4.7m×幅袖4.7m。深さ（V層下部から）48～54cm
壁	方向N=48°～E（長袖）
床	東から西にかけては底板やかに掘り込みはかは直面である
周 溝	住居跡中央部付近や御跡附近は硬く固められ。ほかはや平底や斜底である。南寄の御跡附近に土壌が焼失している
柱 六	11個焼出。主柱穴3（1個焼出）。底板～42cm・深さ31～35cm。方向N=84°～E
柱 六	出入り柱跡EP 4～5 同じ移柱EP 6～9付近に位置。支柱穴EP 10～11（EL64）住居跡西寄の中央御跡より。半分を掘出。底板。長径63cm・短径不明、掘り込みを有しない
覆 土	全体に東寄から西寄にかけては底板やや直面である
遺 物	RP 8・9（16層15・16）が複数の床面から出土。F 3の東寄から遺物が多く出土
時 期	平安時代9世紀後半頃。新田開拓ST 12より新しい

ST 12 住居跡（第8図、図版9）

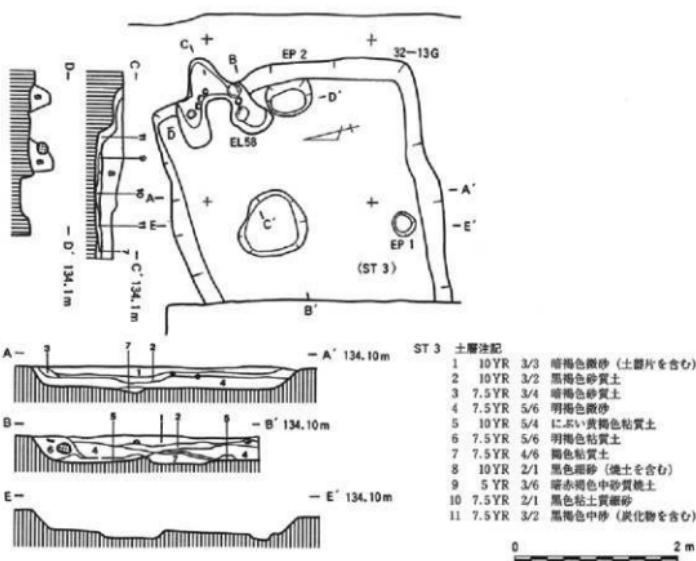
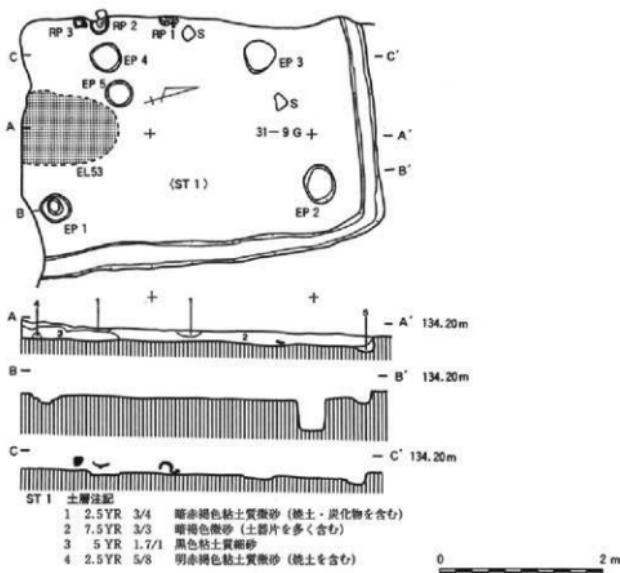
概 要	7～10・25～27G。南側でST 11と重複。上部および底面まで焼失を受ける
形 状	狹丸形? 斜傾、底板・東西5.20×南北4.67m。深さ（V層下部から）29～34cm
壁	方向N=85°～W（西寄輪）
床	全体には底板面に掘り込みされる。南寄から東寄にかけてやや凸凹がみられる。全体には底板が焼失である。
周 溝	西寄の面寄りから西寄にかけては起伏がありやや堅く踏みしめられる。その外は概ね平底で柔らかいが、伊勢国邊はやや堅い
柱	突出させない
柱 六	5個焼出。主柱穴4個（EP 12～15）。いずれも住居跡の隅部に在り全体に北側に寄っている。径49～58cm・深さ28～51cm。支柱穴EP 16
柱 六	EL63（住居跡の北寄の中央部に在る御跡）。床面を掘り込んだない
底 土	底土埋土の厚さ2～3cm。長径63cm（東寄）・短径45cm（南北）
方 向	方向N=64°～W（西寄輪方面）
覆 土	上部は直面しているため全体は不明確である
遺 物	古墳時代前半から後半にかけての御跡跡
時 期	古墳時代前半から後半にかけての御跡跡

ST 13 住居跡（第9図、図版10・11）

概 要	9～12～21～24G。南側でSD18それぞれST 14・27・172と重複する。隣接街はV層下部。
形 状	狹丸形? 斜傾、底板・東西5.55×南北3.90m。深さ（V層下部から）32～56cm
壁	方向N=54°～E（東寄輪方面）
床	東寄から東寄にかけては底板やや直面である。全体に秋萩
周 溝	北寄から東寄にかけては底板やや直面である。
柱	底板から中央部に在る主柱跡。底板に焼落である
柱 六	5個焼出。主柱穴4個（EP 12～15）。いずれも住居跡の隅部に在り全体に北側に寄っている。径49～58cm・深さ28～51cm。支柱穴EP 16
柱 六	EL63（住居跡の北寄の中央部に在る御跡）。底板を掘り込んだない
底 土	底土埋土の厚さ2～3cm。長径63cm（東寄）・短径45cm（南北）
方 向	方向N=64°～W（西寄輪方面）
覆 土	上部は直面しているため全体は不明確である
遺 物	古墳時代前半から後半にかけての御跡跡
時 期	古墳時代前半から後半にかけての御跡跡

ST 14 住居跡（第9図、図版10・11）

概 要	11・12・21・32・35G。ST 13・ST 12・SD18と重複。ST 13の耕作跡由時に確認
形 状	狹丸形? 略傾。方向不明。柱穴EP 11・12
壁	底板は底板やかに掘り込み。底板は平底で敷詰。周溝は被出されず
床	底板の底板付近でRP 19（18BII2）・RP 20（31）が底面に接して出土。
遺 物	全員時代9世紀中葉頃。新田開拓ST 14・27・172より新しくSD18より古い
時 期	全員時代9世紀中葉頃。新田開拓ST 14・27・172より新しくSD18より古い

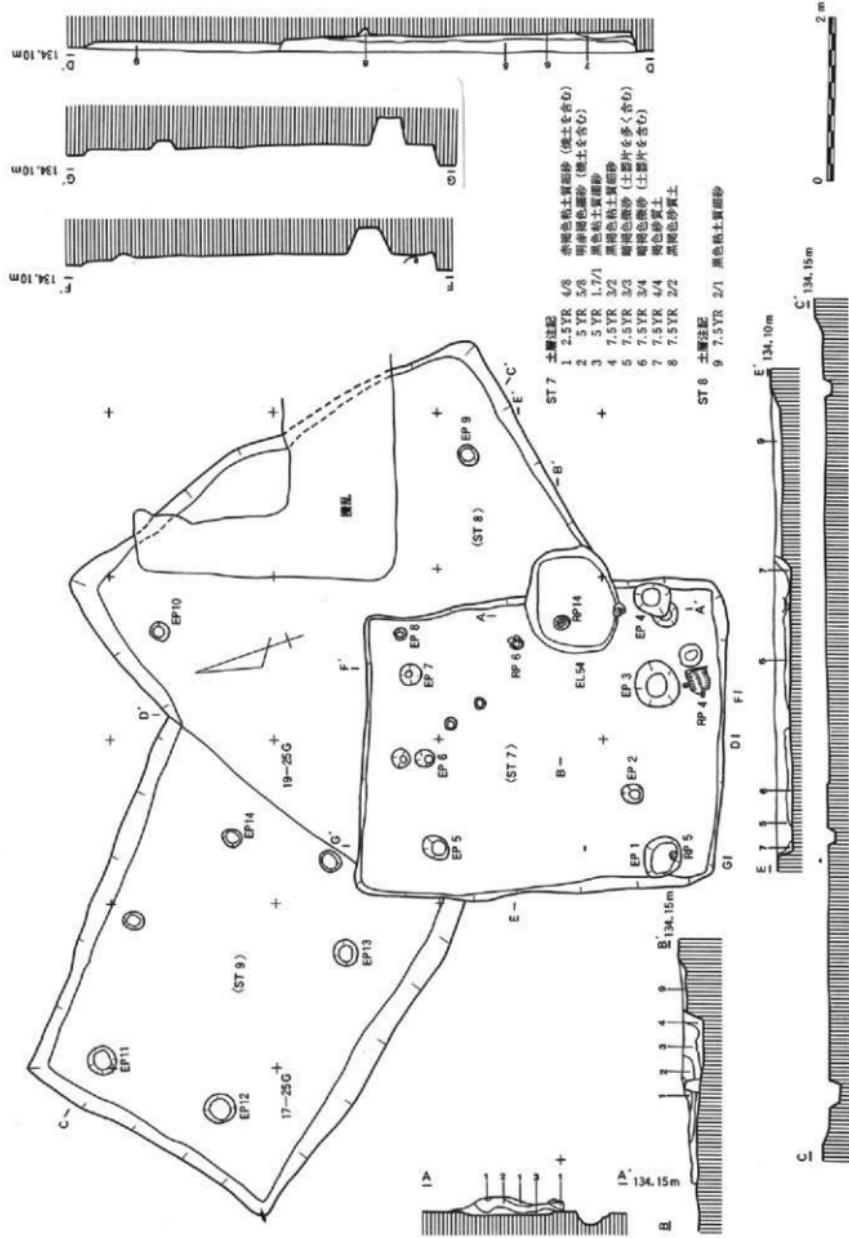


第6図 ST 1・3住居跡

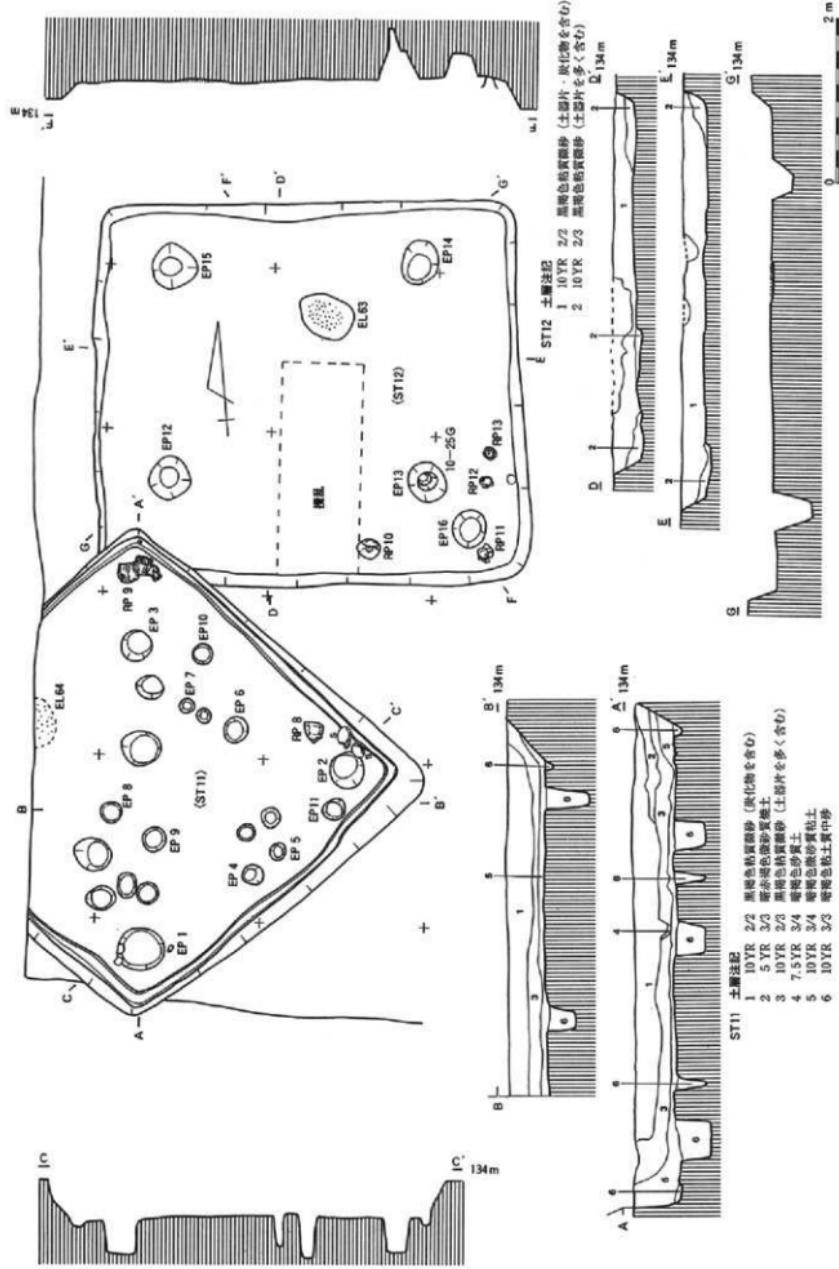
表-2 上層遺構一覧(2)

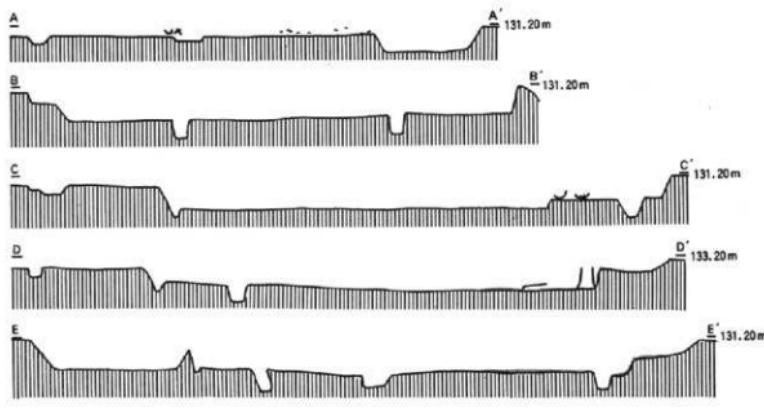
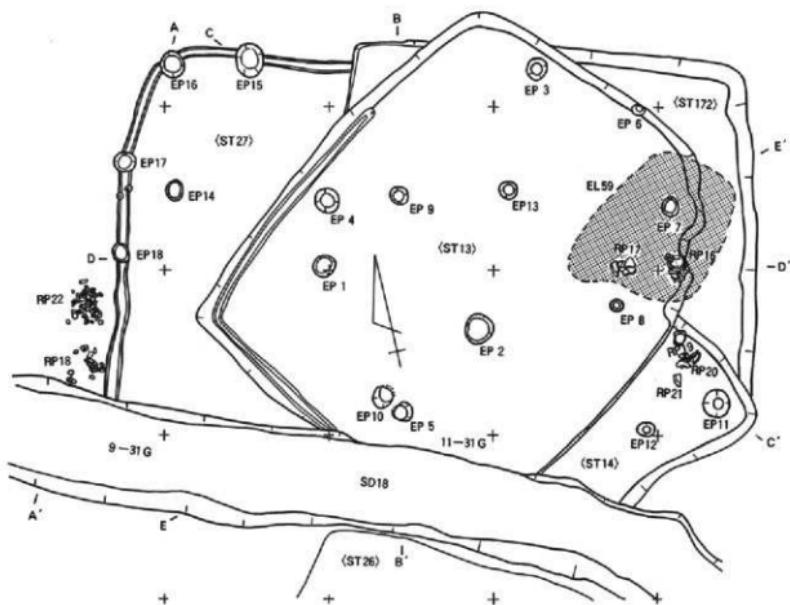
ST2住居跡(第9回、図版10・11)						
概 要	8～10・31～34G。ST13・172・SD18と重複。上部は埋没するため下部のみ					
形 状	横丸形? 方形? 墓底不明。方帆式不明					
壁・床	壁は不明。床は平坦で敷詰である。雨溝は北辺から西辺にかけて設置					
柱穴	5個検出 (EP15～16)。遺物はRP23 (18BB35)・25 (18BB42) が出土					
時 期	古墳時代前4世紀前半。新田開拓ST13・172・SD18より旧い。					
ST172住居跡(第9回、図版11)						
概 要	8～10・31～34G。ST13・14・27と重複。ST13検査時に確認					
形 状	楕丸形? 横丸・東西6.90m×南北4.50m。方位不明。深さ8.21～28cm					
壁・床	壁は緩やかに埋り込む。床は平坦で敷詰である。					
柱穴	ST13Cより切られていたため検出されず					
時 期	平安時代前? 平成時代前? 新田開拓ST13・14より旧くST26より新しい。					
ST15住居跡(第10回、図版12)						
概 要	16～19・30～33G。ST15と重複。上部は埋没を受けて下部のみの検出					
形 状	不整の楕丸形? 方形? 雨溝・東面6.90m×南北4.50m。深さ (V層下部から) 18～26cm。方位N～86°～E (東西方)					
壁	全体に緩やかに埋り込む敷詰である					
床	検出されず					
柱	雨溝から西側に傾斜し住居跡中央部でやや落ち込む					
柱穴	4個検出 (EP1 1～4)。いずれも住居跡中央部で東西方向に一直線に並ぶ。 往：~32cm 深さ：5～38cm。RP23 (カマフ) は提出品等により不明					
壁・土	下層のみ確認。全体で8層に区分され概ね雨溝から流入する					
遺 物	遺物量は極めて少ない					
時 期	時期不明。新田開拓ST16より新しい。					
ST16住居跡(第10回、図版12)						
概 要	15～19・30～33G。ST15と重複。上部は埋没を受ける					
形 状	不整の楕丸形? 方形? 雨溝・南北10.1m×東西5.00m。深さ (V層下部から) 11cm					
壁・床	壁は緩やかに埋り込む。床は平坦で敷詰である。					
柱穴	3個検出 (EP5 5～7)。往12～38cm 深さ14～21cm					
時 期	時期不明。新田開拓ST15より旧い。					
ST17住居跡(第11回、図版12)						
概 要	20～24・31～32G。上部は埋没しているため下部のみ検出					
形 状	不整の楕丸形? 方形? 雨溝・南北10.1m×東西5.00m。深さ (V層下部から) 18～23cm。方位N～4°～W (西北北方)					
壁	全体に緩やかに埋り込む。壁体は敷詰である					
床	検出されず					
柱	中央部がやや枕状に富むのは平底である。全体に敷詰である					
柱穴	5個検出 (EP1 1～5)。東側附近にEP1・4・5の3箇が一直線上に西辺ではEP2・3・2箇が配列する。往27～48cm 深さ40～52cm					
カマフ	未記載					
遺 物	埴土下部の2層より少量出土					
時 期	時期不明					
ST19住居跡(第12回、図版12)						
概 要	22～24・27～30G。住居跡中央部を東西に横走するSD18と重複する。埴土表面は埴土等により埋没を受ける					
形 状	横丸長方形。埴土・東西5.77m×南北1.56m。深さ (V層下部から) 32～43cm 方位N～87°～W (西北方)					
壁	西辺壁の南側は緩やかに立ち上がる。北辺壁から東辺壁ではほぼ直線に埋り込む。					
床	東辺壁の中央から南側にかけては壁体が焼けている。壁体は全体に敷詰である が東側壁の頂が無い。					
柱穴	検出されない。					
遺 物	全般的に敷詰平底である。南面壁が火災のため表面が灰く焼けている。住居跡の東側壁中付近では焼く跡みられぬ凹面がある					
時 期	9個検出 (EP1 1～9)。柱穴大柱1・2・3・8・9・深さ28～41cm 柱穴大柱3・5～7西辺壁に集中してある。EP 6～9は入口附近の柱穴 住居跡の南側が直立しないので不明。恐らく南側面に在ると考えられる					
カマフ	未記載					
壁・土	遺物量は極めて少ないため全体は不明 遺物量はない。					
時 期	平安時代より後世の新田開拓。SD18より古い。					
ST20住居跡(第13回、図版13)						
概 要	22～24・23～26G。ST23・24・SD22と重複する。V層下部で確認する					
形 状	不整の楕丸形? 方形? 壁面・東西5.82m×南北4.85m。深さ (V層下部から) 21～26cm 方位N～85°～W (東西方)					
壁	壁ややかに埋り込む。全体に敷詰である					
床	検出されない					
柱	西側は平底で敷詰である。東側は黒褐色土に黄褐色粘土が混じて埋めしまるる 跡となる					
柱穴	6個検出 (EP1 1～6)。往15～45cm 深さ26～34cm					
カマフ	(E) 東側中央部に位置。大半はSD18に切れて不明					
遺 物	全体に少ないと					
時 期	平安時代より後世の新田開拓。SD22より旧くST23・24より新しい。					
ST23住居跡(第13回、図版13)						
概 要	23～26・24～26G。ST20・24・SD22と重複する。ST20の検査時に確認する					
形 状	壁は不整である。壁全体が倒壊される					
壁	壁は緩やかに埋り込む。床は全体に不明である					
柱	検出されない					
柱穴	全体にV層で黒褐色土に灰化材・紋および粘土ブロックが多量に混じて埋まっている					
カマフ	西側壁と東側に土器の小破片が集中して出土する。一部・完窓土器などの縁は検出されない					
遺 物	西側壁と東側に土器の小破片が集中して出土する。一部・完窓土器などの縁は検出されない					
時 期	平安時代より後世の新田開拓。新田開拓ST20・24・SD22より旧い。					
ST24住居跡(第13回、図版13)						
概 要	24～26・24～26G。ST20・23・SD22と重複する。ST20の検査時に確認する					
形 状	不整の楕丸形? 方形? 壁面・東西4.75m×南北4.00m。深さ (V層下部から) 8～17cm 方位N～58°～W (東西方)					
壁	全体に緩やかに埋り込む。床は全体で敷詰である					
柱	検出されない					
柱穴	全体にV層で黒褐色土に灰化材・紋および粘土ブロックが多量に混じて埋まっている					
カマフ	西側壁と東側に土器の小破片が集中して出土する。一部・完窓土器などの縁は検出されない					
遺 物	西側壁と東側に土器の小破片が集中して出土する。一部・完窓土器などの縁は検出されない					
時 期	平安時代より後世の新田開拓。新田開拓ST20・24・SD22より旧い。					
ST25住居跡(第14回)						
概 要	22～26・24～22G。南面壁中央部に位置する。V層下部で確認される					
形 状	横丸長方形? 壁面・東西2.50m×南北2.30m。方位N～55°～W					
壁	壁は緩やかに埋り込む。床は全体に不明である					
柱	5箇 (EP11・12)					
柱穴	平安時代より後世の新田開拓。新田開拓ST20・SD22より旧くST23より新しい。					
ST26住居跡(第14回)						
概 要	22～24・22～22G。南面壁中央部に位置する。V層下部で確認する					
形 状	不整の楕丸形? 方形? 壁面・東西2.50m×南北2.30m。方位N～55°～W					
壁	壁は緩やかに埋り込む。床面は南面付近のみで全体は不明である					
柱	4箇 (EP11)					
柱穴	検出されず (不明)					
時 期	時期不明					
ST25住居跡(第12回)						
概 要	13～16・25～29G。ST25と重複する。V層下部で確認する。更埴捲瓦受ける					
形 状	不整の楕丸形? 方形? 壁面・東西2.50m×南北2.30m。深さ (V層下部から) 42～48cm 方位N～84°～E (東西方) 内。続矢室家					
壁	北辺と南辺はST25の壁と重複するため不明確。東西と東辺で直立に埋り込む。					
柱	壁体は埴土で埋め込まれた跡となる					
柱穴	5箇 (EP1 1～5)。柱穴大柱1・2・3・8・9・深さ28～41cm 柱穴大柱3・5～7西辺壁に集中してある。EP 6～9は入口附近の柱穴					
カマフ	住居跡が焼いた跡であるため不明確。恐らく南側面に在ると考えられる					
遺 物	遺物量は少ない					
時 期	奈良時代より後世の新田開拓。SD18より古い。					
ST26住居跡(第12回)						
概 要	13～16・25～29G。ST26と重複する。V層下部で確認する。更埴捲瓦受ける					
形 状	不整の楕丸形? 方形? 壁面・東西2.50m×南北2.30m。深さ (V層下部から) 42～48cm 方位N～84°～E (東西方) 内。続矢室家					
壁	壁は緩やかに埋り込む。床面は南面付近のみで全体は不明である					
柱	5箇 (EP1 1～5)。EP14・15は出入口付近の施設とみられる					
柱穴	不明 (東西方に位置すると考えられる)					
カマフ	壁土4層には粘土粒が多量に含み、5層には灰化材が多量に混入する					
遺 物	古墳時代より後世の新田開拓。SD18より新しい。					
時 期	古墳時代より後世の新田開拓。新田開拓ST25より新しい。					

第7図 ST 7～9住居跡

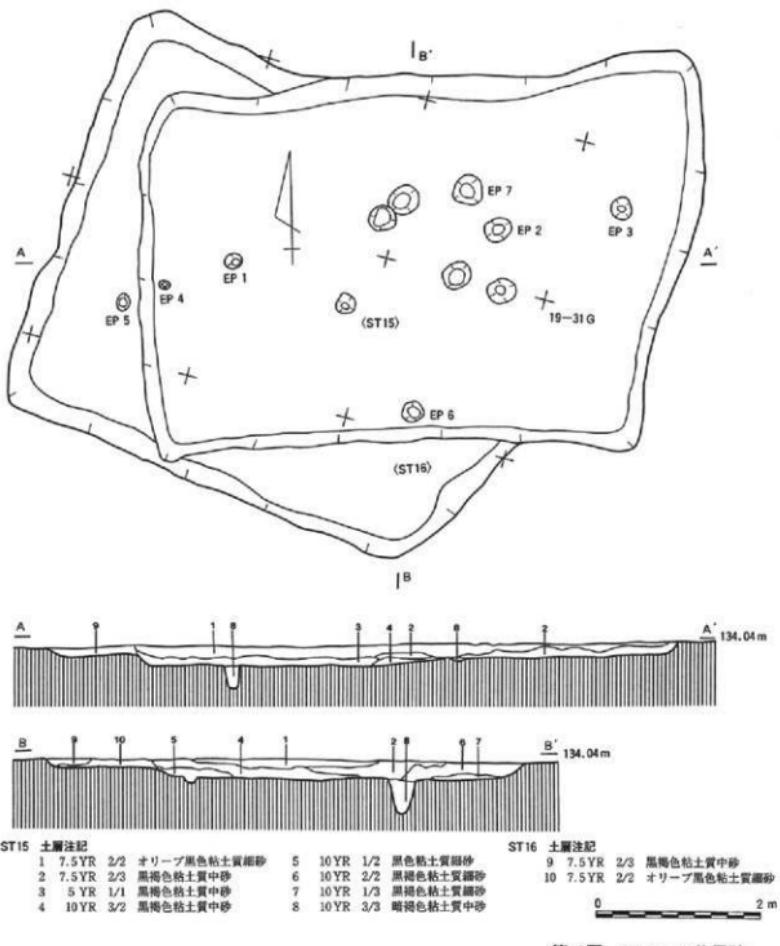


第8図 ST11・12柱間縫隙





第9図 ST13・14・27・172住居跡



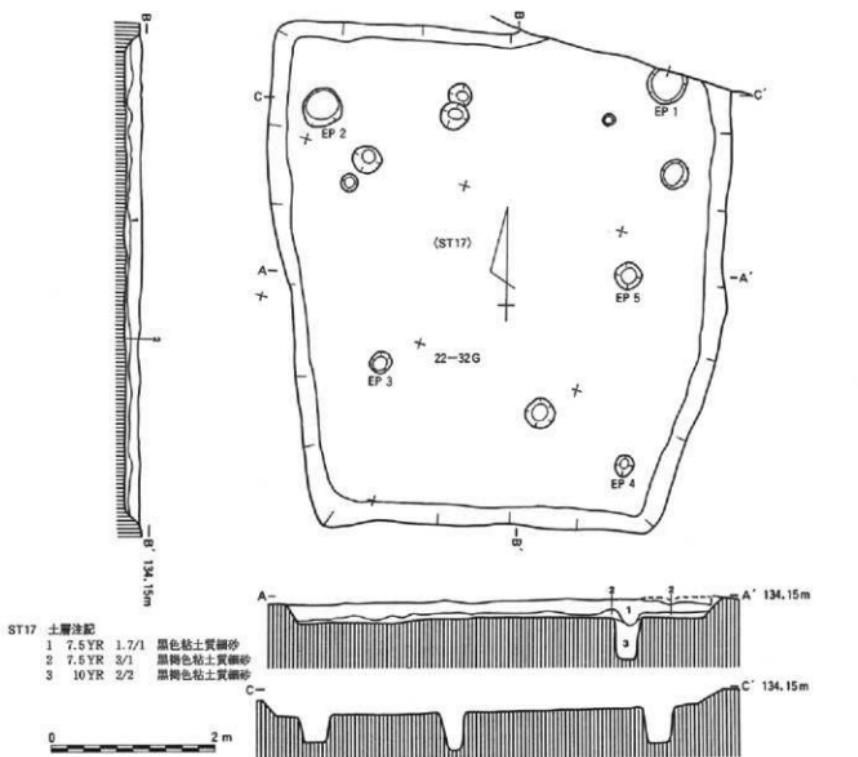
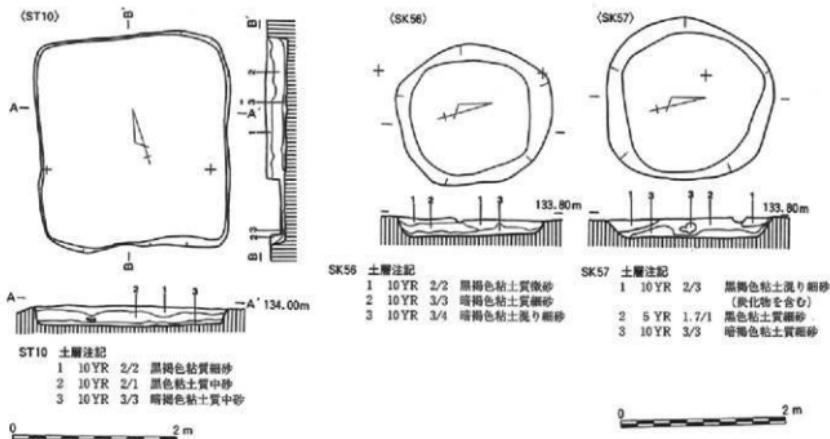
第10図 ST15・16住居跡

表一 3 上部遺構一覧(3)

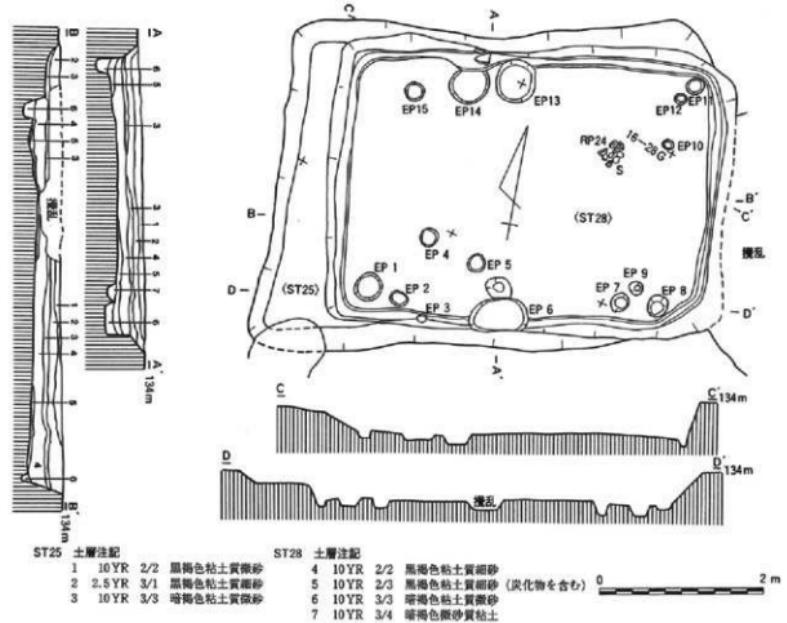
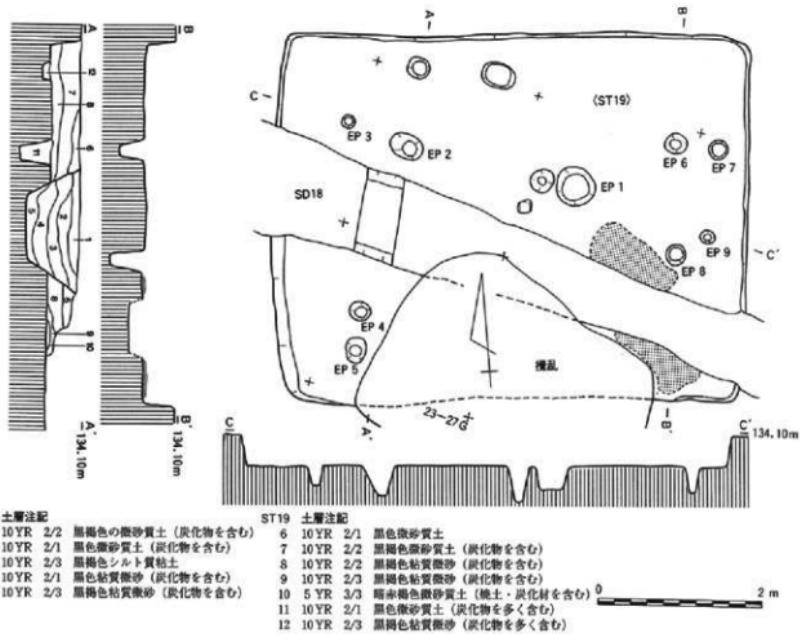
ST26住居跡(第14図、図版14)

形 状	不規則丸形。底面・東西7.95m・南北2.30m。深さ(V層下部から)12~16cm 方位N~50°~W(東西方向)
被 溝	下部のみ全体は不明であるが緩やかである
被 出	被出されない
床	西側は既ねて平らであるが中央部から東側はやや凸がみられる。全体に軟弱であるが、EL60(カマド)周辺はやや硬くなる
柱 穴	6個柱孔(EP 3~6)。全体に不規則に配置され北側に片寄る。径12~48cm。 深さ12~31cm。EP 7は右端穴で黒褐色土中に炭化粒子や焼土粒が多量に含む EL60(住居跡西側の中央寄り)を除く。長径1.57m・短径1.03m。若干の盛り込みを有す。方位N~45°~W。全体に崩落が著しく全体構造は不明
遺 物	EL60附近より多く遺物が出土
特 徴	平安時代リ世紀後半頃

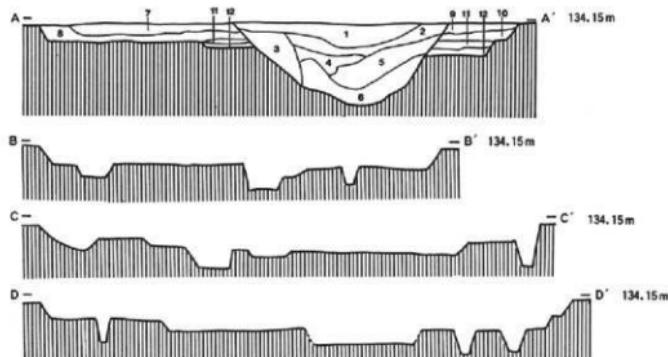
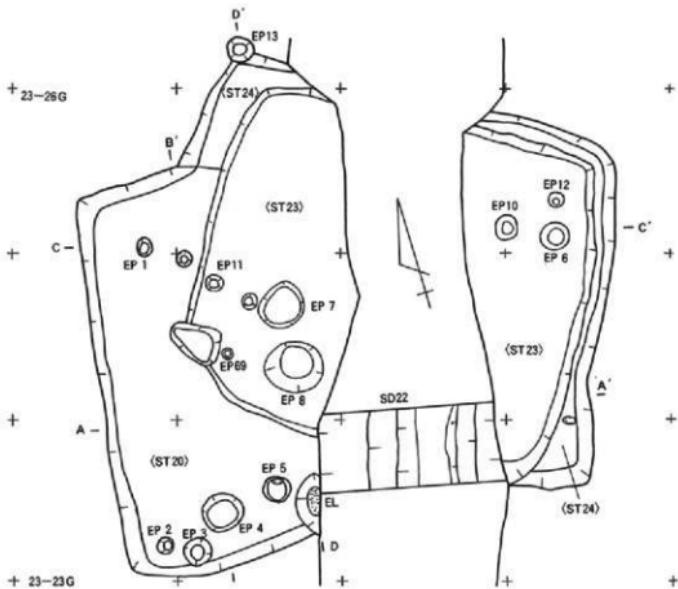
概 要	30~33~29~31cm。柱・柱穴のみで突出する。SD18と重複する。西側一部は少し被覆を受ける。不規則丸形。底面・南北5.20m×東西4.18m。方位N~65°~E 住居跡中央や壁付で部分的に見残り跡になる。カマドは不明
柱 穴	8個柱孔。不規則に配置される
特 徴	時限不明。新旧関係SD18より遅い。



第11図 ST10・17住居跡、56・57土壤



第12図 ST19・25・28住居跡



**ST20 土層注記**

7 10 YR 2/3 黒褐色粘土混り中砂  
8 10 YR 3/2 黒褐色粘土混り中砂

**ST23 土層注記**

9 10 YR 1.7/1 黒色粘土混り中砂  
10 10 YR 2/2 黒褐色粘土混り中砂

**ST24 土層注記**

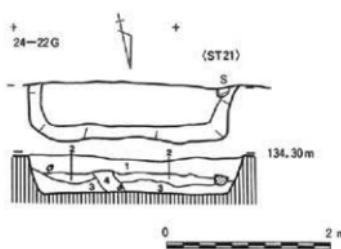
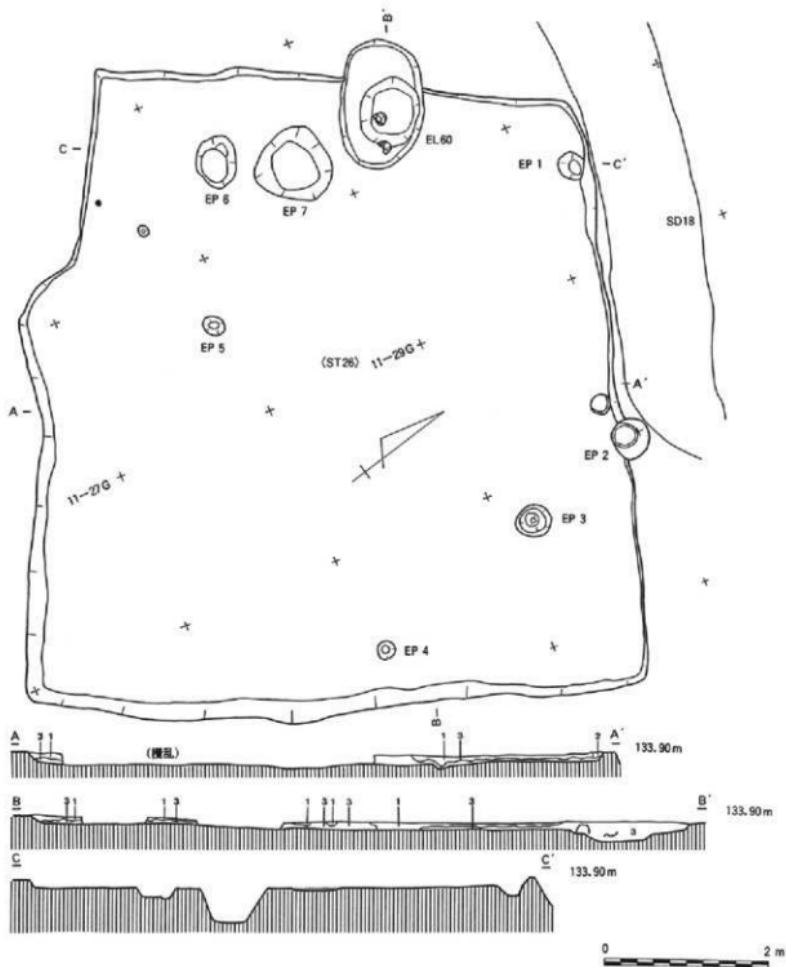
11 10 YR 2/2 黒褐色粘土質細砂  
12 10 YR 3/3 厚褐色粘土質細砂

**SD22 土層注記**

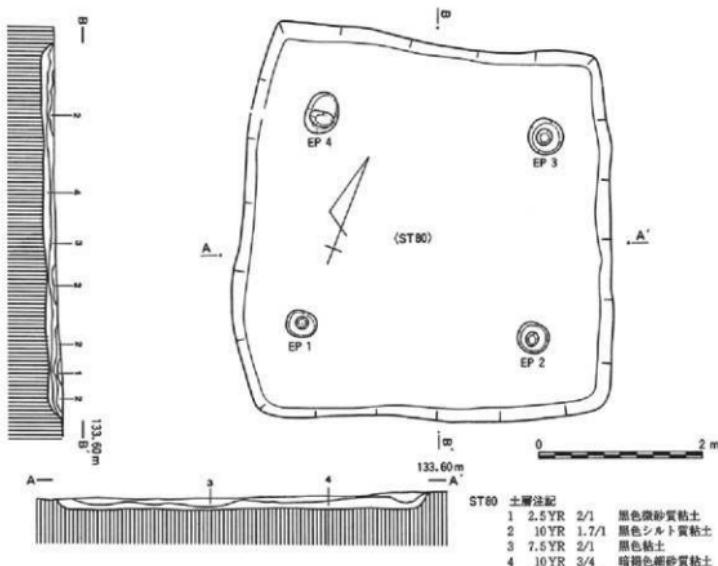
1 10 YR 2/2	黒褐色粘土混り中砂
2 10 YR 2/3	黒褐色粘土質細砂
3 10 YR 2/3	黒褐色粘土質中砂
4 10 YR 2/2	黒褐色粘土質細砂
5 10 YR 2/3	黒褐色粘土質細砂
6 10 YR 2/2	黒褐色粘土混り細砂

0 2 m

第13図 ST20・23・24住居跡



第14図 ST21・26住居跡



第15図 ST80住居跡

表一4 上層遺構一覧(4)

ST30住居跡(第4回)

概 要	30-33-29~31G。床・柱穴のみで検出する。SD18と重複する
形 状	不要民方型、復興・復元更迭4.16×南北3.14m。方位N=60°-E
床・柱穴	床は墨褐色土の粘土ブロックが固まる貼り底。柱穴は4箇で規則的である
カマド	粘土のみの範囲で検出する。全体構造は不明である(EL62)
時 期	時期不明。新田開拓SD18が新しい

ST169住居跡(第3回)

概 要	11-21-30~33G。下層断面の検査検出時に確認。ST15の下部に位置する
形 状	不要民方型。規模・南北4.56×東西4.54m。深さ(段差中から)14~18cm。
床・柱穴	方位N=23°-E(南北方向)
壁	壁やかく斜斜をもつて貼り込む。全体に軟弱である
構造	検出されない
床	全体に粘土があり住居跡中央がやや落ちている。全体に軟弱であるが一部西面の中央部が堅くなる
炉	検出されず不明である。
廐	下層のみ検出され4層に区分される。全体として南東より流入し堆积する
遺 物	遺物の量は少量である
時 期	時期不明。新田開拓ST15-16より古い。

ST169住居跡(第3回)

概 要	11-13-22G。土層断面の検査により確認する。破壊状況
形 状	不明。範囲・南北3.56×東西2.0m。深さ31~42cm
壁	壁は壁紙やかく貼り込む。床は火坑のため焼け赤色に変色している
床・柱穴	カマド
時 期	家跡で一部があるが構造は不明である

SK56土塙(第11回、図版14)

概 要	7-8-29-30G。ST26-SK56と隣接する。V層下部で確認する
形 状	円筒。規模・南北2.56×東西1.06m・深さ16~23cm。断面形はタライ形を示す
壁	壁は壁紙で覆う。全体は軟弱である
床・柱穴	平面で軟弱である
時 期	時期不明。遺物量は極めて少ない

SK57土塙(第11回、図版14)

概 要	7-13-28-32G。V層中層で確認する。ほぼ東西南北に向く複数ある
形 状	断面形はV字形を示す。上層0-60cm・下層31-52cm、深さ堆積面から31~41cm
壁	上部では比較的垂直になる
床・柱穴	壁紙から西側に傾斜する
時 期	平安時代10世紀初め頃? 新田開拓ST13-14-27-19-29より新しくSD22より古い

SD16溝跡(第9-12回、図版14)

概 要	17-18-22G。土層断面の検査により確認する
形 状	不明。範囲・南北2.20m・深さ31cm
壁	壁はほぼ直線に立ち上がる。床は平底で堅くしまる。
柱・柱穴	柱間に位置し角柱などで支柱に拘束。白色粘土を用いて固めている。
時 期	平安時代後半?

SD22溝跡(第3-12回、図版14)

概 要	21-28-32-34G。V層上層で確認する。ほぼ南北に向く複数ある
形 状	新田開拓は断面形状がV字形を示す。上層0-60cm・下層45-60cm、深さ31-65cm
壁	上部は直立で堅くしまる
床・柱穴	北側から南側にかけてやや傾斜する
時 期	平安時代10世紀初め頃? 新田開拓ST20-23-24-SD18より新しい

土している。赤焼土器壺は底径が小さく器高が高いもので、底部の切り離しは糸切り無調整である。土師器壺は底径がやや小さく、内面がヘラミガキのち黒色化処理されている。底部の切り離しは糸切り無調整である。壺はロクロ整形のもので、外面に刷毛目を有するものもある。これらの土器の特徴から、本住居跡の時期は9世紀中葉頃と推定される。ST23住居跡の覆土からは、土師器の壺・壺が少量出土している。土師器壺は底径がやや小さく、内面がヘラミガキのち黒色化処理されている。壺はロクロ整形のもので、外面に刷毛目を有するものもある。これらの土器の特徴から、本住居跡の時期は9世紀中葉頃と推定される。ST24住居跡は遺物が出土していないが、遺構の重複関係からST23住居跡より古く、ST23住居跡より新しい時期と考えられる。ST21住居跡は北壁の一部だけ検出されたものであるが、遺物が微量しか出土しておらず時期は不明である。

ST28住居跡からは北東隅付近を主に、須恵器壺・壺・高台壺・壺、土師器壺（第18図36）が出土している。須恵器壺や高台壺は底径がやや大きくて器高が低いもので、底部の切り離しはヘラ切り無調整である。須恵器壺のつまみ部はやや扁平で、平坦な天井部をもつ。同壺は小片のみで器形はわからないが、外面に格子状の叩き目、内面に青海波文が施されている。土師器壺はロクロ整形のもので、外面に刷毛目を有するものもある。これらの土器の特徴から、本住居跡の時期は8世紀末葉頃と推定される。ST25住居跡は遺物が出土していないが、遺構の重複関係からST28住居跡より古い時期と考えられる。

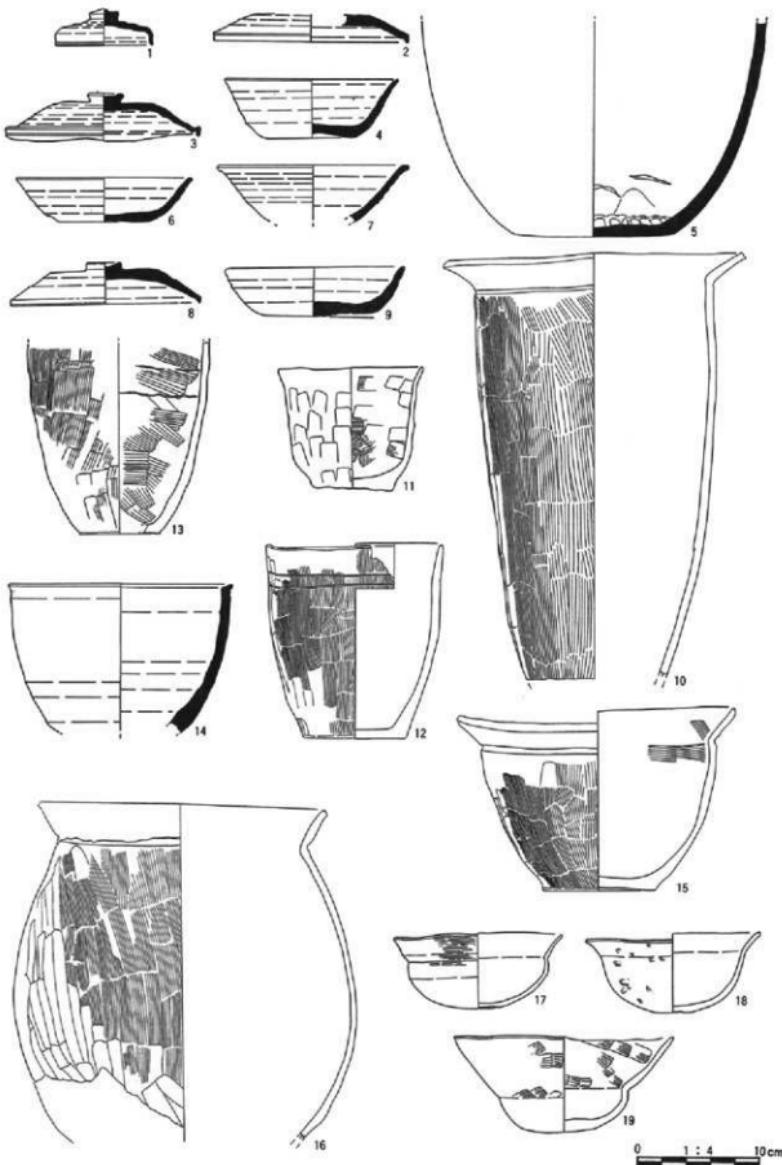
ST26住居跡からはEL60付近を主に、赤焼土器壺（第18図44）、土師器壺が少量出土している。資料が少ないが赤焼土器壺の形態等から、時期は9世紀後半頃と推定される。ST29・30住居跡からは土師器壺1片の出土で時期は不明である。ST80住居跡は遺物が出土していないが、遺構の重複関係からST15・16住居跡より古い時期と考えられる。

ST167住居跡は断面のみの検出であるが、EL168付近から、土師器鉢（第18図40・41）・壺が少量出土している。鉢は頸部がほぼ直立する筒形のもの、壺は内外面に刷毛目を有するもので、資料が少ないが鉢の形態等から、時期は8世紀後半頃と推定される。ST169住居跡も断面のみの検出であるが、遺物が出土しておらず時期は不明である。

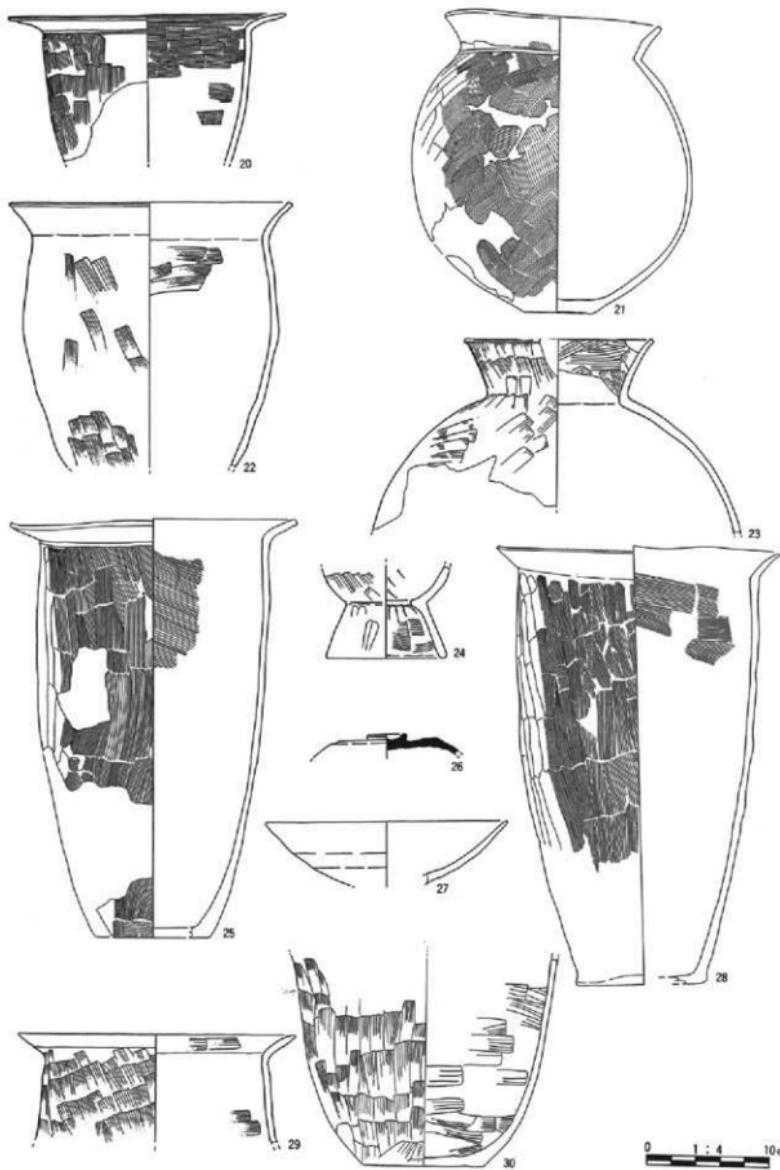
SK56・57土壤は、覆土から土師器壺が微量出土しているだけで時期は不明である。

SD18溝跡からは須恵器壺・高台壺（第18図46）・壺、土師器壺・耳皿・壺・壺（同43）、赤焼土器壺（同44）が出土している。須恵器は底径がやや小さく、底部の切り離しは糸切り無調整である。土師器壺は底径が小さくヘラミガキのち黒色化処理されている平底のもので、底部の切り離しは糸切り無調整である。赤焼土器壺は底径が小さく糸切り離しによるもので、体部の外反が強い。43の壺は古墳時代前期のものの混入であろう。SD22溝跡からは須恵器壺（同45）、土師器壺・鉢・壺、赤焼土器壺・高台壺が出土している。須恵器は底径がやや小さく、底部の切り離しは糸切り無調整である。土師器壺は内黒である。赤焼土器壺と高台壺は底径が小さく糸切りによるもので、体部の外反が強い。これらの土器の特徴から、両溝跡の時期は平安時代10世紀初め頃と推定される。

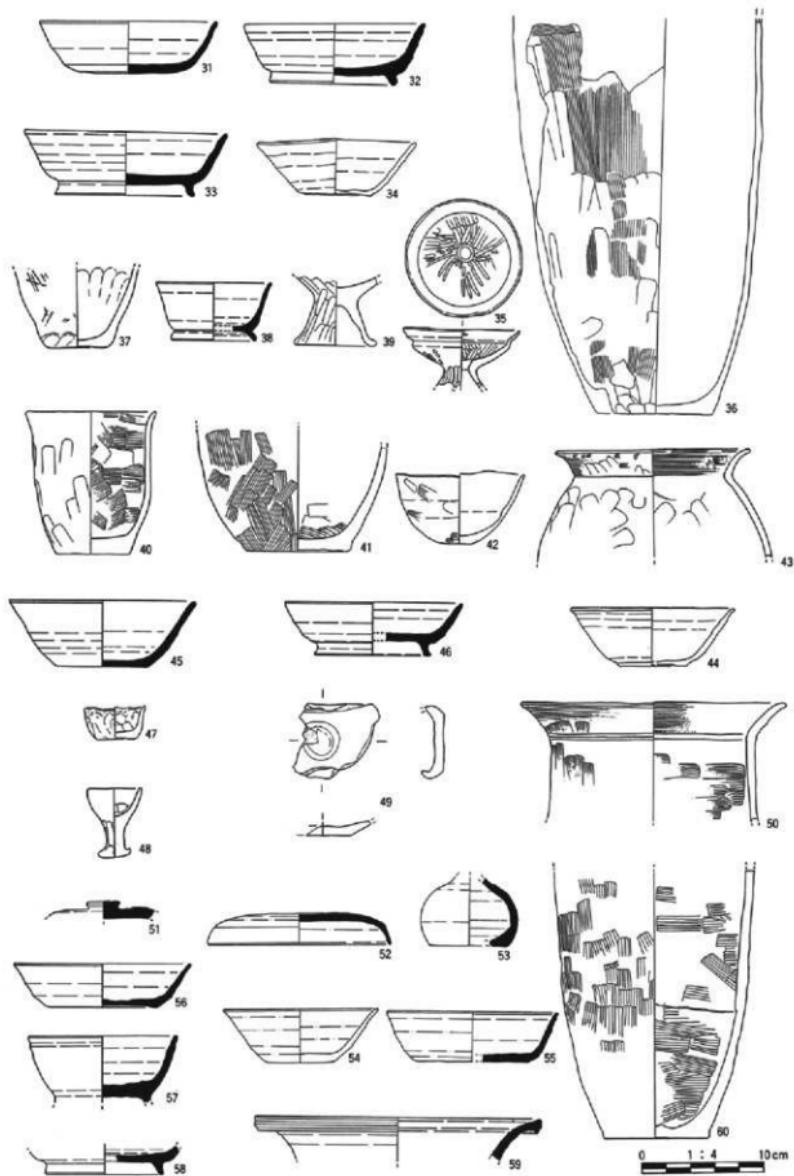
このほか遺物包含層や縄文時代の遺構からも土師器等が出土しているが説明は省略する。



第16図 上層出土土器実測図(1)



第17図 上層出土土器実測図(2)



第18図 上層出土土器実測図(3)

表-5 上層遺物観察表

埠区 番号	遺物 番号	種 別	器 形	計測値 (mm)				底部切端	調 整 技 術	出 土 地 点	備 考	
				口 径	底 径	器 高	器 厚					
第16図	1	須 恵 器	壺	8	-	3	2~5	不 明	ロクロ直	ロクロ直	ST 1~Y	宝珠形つまみ
+	2	須 恵 器	壺	160	-	21	8~4	不 明	ロクロ	ロクロ	ST 1~Y	つまみ唇形脇不明
+	3	須 恵 器	壺	160	-	39	3~6	系切リナデ	ロクロ	ロクロ	ST 1~Y (RP 2)	自然輪、つまみ外面に沈縫
+	4	須 恵 器	壺	142	72	51	4~7	圓軸系切り	ロクロ	ロクロ	ST 1~Y (RP 1)	
+	5	須 恵 器	壺	-	13	175	7.5~9	ヘラ削り	ロクロ直ナデ	ロクロ	ST 1~Y (RP 3)	
+	6	須 恵 器	壺	146	75	35	5~6	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	ST 3~F 1	
+	7	須 恵 器	壺	158	-	45	4~4.5	不 明	ロクロ	ロクロ	ST 3~EL58	
+	8	須 恵 器	壺	156	-	33.5	3.5~8	不 明	ロクロ	ロクロ	ST 7~EL54 (RP 7)	
+	9	須 恵 器	壺	148	90	42	5~7.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	ST 7~EL54 (RP 6)	
+	10	土 鈴	壺	247	-	(349)	6~7.5	-	ハケ目	ハケ目	ハケ目武庫1号	ロクロ整形
+	11	土 鈴	鉢	118	68	100	3~7	不 明	ハケ目	ハケ目	ST 7~EL54 (RP 14)	
+	12	土 鈴	鉢	146	82	158	4~12	木 施 痕	ハケ目	ハケ目	ハケ目武庫2号	カマド支柱?
+	13	土 鈴	鉢	-	65	154	5~9	木 施 痕	ハケ目	ハケ目	ST 11~F 1	
+	14	須 恵 器	壺	182	-	119.5	7~14	ヘラ削り	ロクロ	ロクロ	ST 11~F 2	
+	15	土 鈴	鉢	230	93	148	5~9	木施痕(2枚)	ハケ目	ハケ目	ST 11~Y (RP 8)	
+	16	土 鈴	鉢	237	-	(273)	4~6	-	ハケ目	ハケ目	ST 11~Y (RP 9)	
+	17	土 鈴	壺	138	30	60	2~4	四 底	不 明	ヘラミガキ	ST 12~Y (RP 13)	
+	18	土 鈴	壺	174	30	64	3.5~4.5	四 底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ST 12~Y (RP 12)	
+	19	土 鈴	壺	178	50	78	3~10	ヘラ削り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ST 12~Y (RP 11)	外面に丹能
第17図	20	土 鈴	壺	228	-	(117)	5	-	ハケ目	ハケ目	ST 12~F	
+	21	土 鈴	壺	178	53	240	3~6	四 底	ハケ目	ハケ目	ST 12~Y (RP 10)	
+	22	土 鈴	壺	230	-	215	3~6	-	ハケ目	ハケ目	ST 13~EL59 (RP 30)	
+	23	土 鈴	壺	154	-	(155)	3.5~8	-	ハケ目	ハケ目	ST 12~EP	
+	24	土 鈴	器 台	-	99	53	5~7	-	ハケ目	ハケ目	ST 12~F	
+	25	土 鈴	壺	233	93	342	4~12	不 明	ハケ目	ハケ目	ST 13~EL59 (RP 17)	
+	26	須 恵 器	壺	-	-	-	4~8	圓軸余切り	ロクロ	ロクロ	ST 12~Y	
+	27	土 鈴	高 壺	190	-	50	3~8.5	-	ヘラミガキ(丹能)	ヘラミガキ(丹能)	ST 13~F	
+	28	土 鈴	壺	230	101	357	5~9	木 施 痕	ハケ目	ハケ目	ST 13~EL59 (RP 29)	
+	29	土 鈴	壺	226	-	(85)	5~6	-	ハケ目	ハケ目	ST 14~F	
+	30	土 鈴	壺	-	100	(168)	5~10	-	ハケ目	ハケ目	ST 14~F	
第18図	31	須 恵 器	壺	145	(80)	43	3~6	~圓軸ハラ削り	ロクロ	ロクロ	ST 14~(RP 21)	
+	32	須 恵 器	高 台 壺	148	104	50.5	5~7	ヘラ削り	ロクロ	ロクロ	ST 14~(RP 20)	
+	33	須 恵 器	高 台 壺	165	111	52	3~7	ヘラ削り	ロクロ	ロクロ	ST 14~(RP 19)	
+	34	赤拂土器	壺	132	56	45	3~4	圓軸余切り	ロクロ調整	ロクロ調整	ST 26~EL56 (RP 27)	
+	35	土 鈴	器 台	95	?	?	3~7	-	ヘラミガキ	ヘラ削り	ST 27~Y (RP 23)	
+	36	土 鈴	壺	-	89	(324)	4~6.5	木 桧 施 痕	ハケ目	ハケ目	ST 28~Y	
+	37	土 鈴	鉢	52	63	4~10	削 り	ヘラミガキ	ハケ目	ハケ目	ST 44~F 1	
+	38	須 恵 器	高 台 壺	95	(70)	47	2~6	圓軸余切り	ロクロ	ロクロ	ST 56~F	
+	39	土 鈴	高 壺	67	(56)	4~5	手抜ハラ削り	黒色化粧剥	ヘラ削り	ST 74~Y (RP 152)		
+	40	土 鈴	鉢	105	(60)	115	2.5~7	不 明	ハケ目	ハケ目	ST 167~EL168	
+	41	土 鈴	壺	84	(98)	5~9	木 桧 施 痕	ハケ目	ハケ目	ST 167~EL168		
+	42	土 鈴	壺	105	20	56	2~8	?	ヘラミガキ	ハケ目	ST 27~Y (RP 25)	
+	43	土 鈴	壺	160	-	87	4~5	-	ハラミガキ	ハラミガキ	SD 18~F	
+	44	赤拂土器	壺	134	55	46	3~5	圓軸余切り	ロクロ	ロクロ	SD 18~F	
+	45	須 恵 器	壺	153	75	53	4~6	圓軸余切り	ロクロ	ロクロ	SD 22~F	
+	46	須 恵 器	高 台 壺	144	95	43	3~7	→ ナ テ	ロクロ	ロクロ	SD 18~F	
+	47	土 鈴	ミニチュア (手つくり)	50	32	26	2~5	ヘラ削り	指・ヘラナデ	ヘラナデ	11~22V	
+	48	土 鈴	ミニチュア	44	27	56	2~5	不 明	指 ナ デ	ハケ目	SK 37~F 2	
+	49	赤拂土器	耳 盆	45	18	4~8	圓軸余切り	ロクロ	ロクロ	ST 3~EL53		
+	50	土 鈴	壺	419	-	(94)	4~8	-	ハケ目	ハケ目	ST 8~24F	
+	51	須 恵 器	壺	-	-	14	7~8.5	系切リナデ	ロクロ	ロクロ	29~32, 31~34 III b	
+	52	須 恵 器	壺	(150)	74	25	5	圓軸ヘラ削り	ロクロ	ロクロ	ST 11~Y	
+	53	須 恵 器	壺	(65)	(56)	6	6	圓軸余切り	ロクロ	ロクロ	ST 18~F	
+	54	赤拂土器	壺	127	55	43	3~7	圓軸余切り	ロクロ	ロクロ	ST 20~F	
+	55	須 恵 器	壺	140	90	41	5~7	ヘラ削り	ロクロ	ロクロ	ST 28~F	
+	56	須 恵 器	壺	145	92	35	2.5~5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	29~32, 31~34 III b	
+	57	須 恵 器	高 台 壺	120	76	54.5	3~5.5	圓軸余切り	ロクロ	ロクロ	下水道工事地	
+	58	須 恵 器	高 台 壺	-	95	(23)	4~7	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	16~29 III	
+	59	須 恵 器	壺	(236)	-	33	5~8	-	ロクロ	ロクロ	17~18~31 III	
+	60	土 鈴	壺	-	88	217	7~12	-	ハケ目	ハケ目	29~22III	

## IV 下層の遺構と遺物

### 1 下層の遺構（第19～29図、図版16～40、表6～10）

山形西高敷地内遺跡の下層第IX層からは、遺構として、縄文時代中期の竪穴住居跡48棟と土壙51基、単独の石組複式炉1基、単独の埋設土器23基などが検出されている。遺構が第X層の暗褐色粘土混り中砂土を遺構面としているため、ほとんどの遺構のプランは第X層上面で確認されている。これらの遺構の時期は、出土土器の検討や住居跡内の炉の形態などから、すべて縄文時代中期末葉に属するものと思われる。第4次調査における竪穴住居跡などの遺構は、第II章で述べたように、東西に流れる旧河川の北側にはば沿った形で分布する。竪穴住居跡間の重複が著しく、調査区全域に遺構が密集しているが、いくつかのブロック毎にまとまりも想定される。遺構の記述については簡明を図るために、上層の遺構と同じように表によって竪穴住居跡、土壙の順に説明する（表6～10参照）。ただし、重複している竪穴住居跡については、ブロック毎に挿図の記載や記述をおこなっているため、住居跡の番号が不規則な並びになっているのでご容赦いただきたい。

参考のため、次に主たる遺構の重複関係を旧→新の順に示しておく。

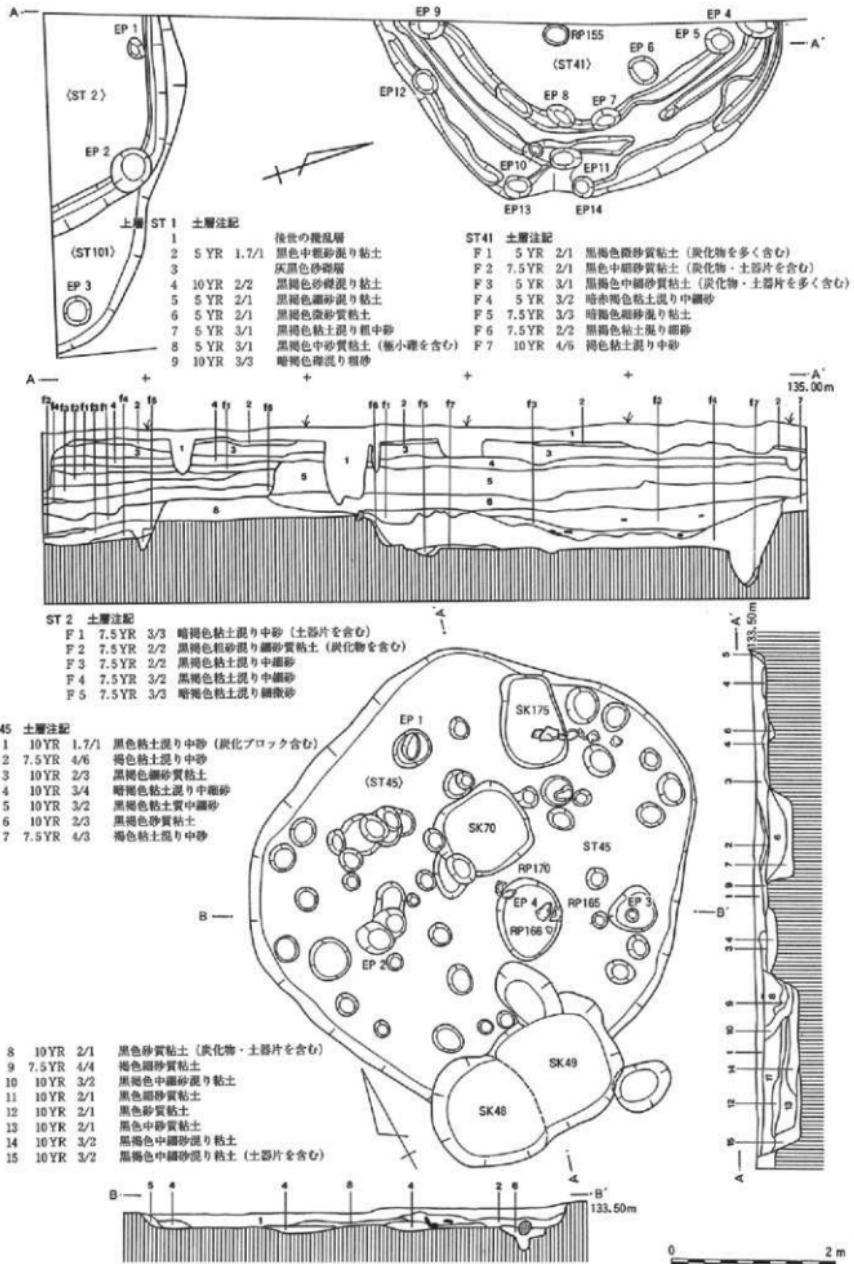
- (1) ST101→ST2
- (2) ST34→ST33→ST31→ST32
- (3) ST156→ST36→ST35
- (4) ST72→ST50
- (5) ST74→ST93→SK166
- (6) ST105→ST42→ST77
- (7) ST105→ST43
- (8) ST125→ST126→ST87
- (9) ST165→ST98→ST44→ST100→ST104
- (10) ST95→ST86→ST46←ST98・105
- (11) ST81→ST82→ST84
- (12) ST103→ST47→ST116
- (13) ST89→ST75→ST76←ST81

山形西高敷地内遺跡の下層からは、縄文時代中期末葉の遺物が整理箱にして約100箱分出土している。大半が竪穴住居跡や土壙の遺構内出土のものであるが、遺構以外の包含層（第IX層）からも縄文時代中期に属する遺物が発見されている。

下層の住居跡の時期は遺物の節で後述するように、すべて縄文時代中期末葉大木10式期に属するものであるが、そのなかでも若干の時期差が認められる。各住居跡の一覧表の時期の項目には、時期が判別できるものについて「I期（古段階）」、「II期（中段階）」、「III期（新段階）」の三区分を追加した。その根拠については第V章の「1 縄文時代中期末葉の土器変遷」と「2 縄文時代中期末葉の遺構変遷」の節で述べる。

表-6 下層住居跡一覧(1)

ST 2住居跡（第19回、図版19）									ST 33住居跡（第20回、図版20・21）								
概 要	30・31・8・9 G <sub>1</sub> 住居跡(平安時代)の下層にあるため、上部は削平される 新規上面部で断面を確認	形 状	形状不明。後壁周縁東西(2.7m)×南北(1.5m)	重複開発	(II) ST101-ST 2 (新)	壁・床	壁面は、ほぼ垂直に掘り込む。床面は平底で軽弱である。	柱	10・11-22-24G	概 要	10・11-22-24G	形 状	不整な形態。規模・東西(4.26m)×南北(4.3m)	重複開発	ST34-ST33-ST31-ST32	壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、平底で軽弱である
重複開発						柱			柱	なし							
壁・床						柱	柱穴	柱穴(4個検出) EP 10・11が主柱穴	柱	柱穴							
柱						柱	柱	柱穴(4個検出) EP 10・11が主柱穴	柱	柱							
柱・穴						柱	柱	柱穴(4個検出) EP 10・11が主柱穴	柱	柱							
柱						柱	柱	柱穴(4個検出) EP 10・11が主柱穴	柱	柱							
柱・物						柱	柱	柱穴(4個検出) EP 10・11が主柱穴	柱	柱							
柱・時						柱	柱	柱穴(4個検出) EP 10・11が主柱穴	柱	柱							
時						柱	柱	柱穴(4個検出) EP 10・11が主柱穴	柱	柱							
時						柱	柱	柱穴(4個検出) EP 10・11が主柱穴	柱	柱							
ST101住居跡（第19回、図版19）									ST 34住居跡（第20回）								
概 要	31・32・8 G <sub>2</sub> ST 2と重複する。確認断面X層上部	形 状	形状不明	重複開発	(III) ST101-ST 2 (新)	壁・床	壁は、緩やかに掘り込み、床面は平底で軽弱である	柱	11-12-22-23G	概 要	11-12-22-23G	形 状	平底型形態。規模・東西(4.75m)×南北(1.86m)	重複開発	ST34-ST33-ST31-ST32	壁・床	壁は、緩やかに掘り込み。床面は、平底で軽弱である
形 状						柱	柱	柱	柱	柱							
柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・床						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・壁						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・物						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・時						柱	柱	柱	柱	柱							
時						柱	柱	柱	柱	柱							
ST 41住居跡（第19回）									ST 38住居跡（第19回、図版23）								
概 要	30・31-10-12 G <sub>2</sub> 底盤面X層上部	形 状	圓丸方柱	重複開発	(III) ST41-ST 2 (新)	壁・床	壁は、緩やかに掘り込み、床面は平底で軽弱である	柱	12-14-23-25G	概 要	12-14-23-25G	形 状	不整な楕丸形形態。規模・ST38a 東西4.00m×南北4.32m	重複開発	楕丸aの配置やEL67?の被覆などからa・b二時期の階層を確定される	壁・床	壁は、緩やかに掘り込み。床面は、凹凸があり軽弱である
形 状						柱	柱	柱	柱	柱							
柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・床						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・物						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・時						柱	柱	柱	柱	柱							
時						柱	柱	柱	柱	柱							
ST 45住居跡（第19回、図版25）									ST 39住居跡（第19回、図版23）								
概 要	30・31-21-27-30 G <sub>2</sub>	形 状	圓丸方柱	重複開発	SK70-ST 45-SK48-SK49	壁・床	壁は、緩丸形面に掘り込む。床面は、凹凸があり軽弱である	柱	13-14-23-25G	概 要	13-14-23-25G	形 状	不整な楕丸形形態。規模・ST38a 東西4.00m×南北4.32m	重複開発	楕丸aの配置やEL67?の被覆などからa・b二時期の階層を確定される	壁・床	壁は、緩やかに掘り込み。床面は、凹凸があり軽弱である
形 状						柱	柱	柱	柱	柱							
柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・床						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・物						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・時						柱	柱	柱	柱	柱							
時						柱	柱	柱	柱	柱							
ST 45住居跡（第19回、図版25）									ST 35住居跡（第21回、図版22）								
概 要	18-21-27-30 G <sub>2</sub>	形 状	圓丸方柱	重複開発	SK70-ST 45-SK48- SK49	壁・床	壁は、緩丸形面に掘り込み。床面は、凹凸があり軽弱である	柱	12-13-28-31G	概 要	12-13-28-31G	形 状	ST35a 不整な楕丸形方形	重複開発	ST35a 不整な楕丸形方形	壁・床	壁は、緩やかに掘り込み。床面は、凹凸があり軽弱である
形 状						柱	柱	柱	柱	柱							
柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・床						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・物						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・時						柱	柱	柱	柱	柱							
時						柱	柱	柱	柱	柱							
ST 31住居跡（第20回、図版20・21）									ST 36住居跡（第21回、図版22）								
概 要	9-16-22-23 G <sub>2</sub> ST 33と重複する。確認断面X層上部	形 状	不整な楕丸形	重複開発	SK70-ST 45-SK48- SK49	壁・床	壁は、緩丸形面に掘り込む。床面は、凹凸があり軽弱である	柱	12-16-28-31G	概 要	12-16-28-31G	形 状	ST35a 不整な楕丸形方形	重複開発	ST35a 不整な楕丸形方形	壁・床	壁は、緩やかに掘り込み。床面は、凹凸があり軽弱である
形 状						柱	柱	柱	柱	柱							
柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・床						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・物						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・時						柱	柱	柱	柱	柱							
時						柱	柱	柱	柱	柱							
ST 31住居跡（第20回、図版20・21）									ST 32住居跡（第20回、図版21）								
概 要	7-9-9-22-24 G <sub>2</sub>	形 状	圓丸の多角形	重複開発	ST34-ST 33-ST 31-ST 32	壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軽弱である	柱	8-11-25-28 G	概 要	8-11-25-28 G	形 状	楕丸の多角形	重複開発	ST35b (底) 楕丸長方形	壁・床	壁は、緩やかに掘り込み。床面は、やや凸凹があり軽弱である
形 状						柱	柱	柱	柱	柱							
柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・床						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・物						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・時						柱	柱	柱	柱	柱							
時						柱	柱	柱	柱	柱							
ST 32住居跡（第20回、図版21）									ST 156住居跡（第21回）								
概 要	7-9-9-22-24 G <sub>2</sub>	形 状	楕丸の多角形	重複開発	RP165-RP152 (31-12)、F 2から済跡 (周12) と残器 (45-42) 出土	壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軽弱である	柱	8-9-26-28 G	概 要	8-9-26-28 G	形 状	楕丸の多角形	重複開発	ST156-ST36-ST35	壁・床	壁は、緩やかに掘り込み。床面は、平底で軽弱である
形 状						柱	柱	柱	柱	柱							
柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・床						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・柱						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・物						柱	柱	柱	柱	柱							
柱・時						柱	柱	柱	柱	柱							
時						柱	柱	柱	柱	柱							



第19図 ST 2・41・45・101住居跡

表-7 下層住居跡一覧(2)

ST39住居跡（第22回・図版31）		ST43住居跡（第23回・図版24・25）	
概 要	29-31-36-38G	概 要	17-19-26-26G
形 状	不整の楕円形。規模・東西3.85m×南北3.90m	形 状	楕円形方型。規模・東西4.3m×南北3.85m
重複關係	ST39→SK161	重複關係	ST43→ST105→ST42→77
壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、やや凹凸があり軟弱	壁	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、やや凹凸があり、硬くしまっている
周 清	なし	周 清	全面にあり。幅30~47cm、深さ14~31cm
鉢	なし	鉢	石器式鉢印EL68（主張方位N=16°～E、全長2.14m、土器痕跡部；1個正位、部端欠損、石頭あり、石組部：立石あり・馬蹄形）、南底部：石組なし）、方形石瓶印EL79
柱 穴	柱穴4個	柱 穴	柱穴6個
遺 物	遺物少量、EPから漆跡片（35-43）、F2から漆跡片（同44）	遺 物	EP68から複数漆器RP184（35-48）-漆跡（同50）、床面から漆跡（49）-漆跡（51）、F3から磨製石斧（46-6）出土
時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段	時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段

ST50住居跡（第22回・図版31）

ST50住居跡（第22回・図版31）		ST77住居跡（第23回・図版24）	
概 要	27-30-34-36G	概 要	14-16-25-27G
形 状	椭円形。規模・東西4.10m×南北3.53m	形 状	不整の楕円長形。規模・東西3.72m×南北3.10m
重複關係	ST72→SK50	重複關係	ST105→ST42→ST77
壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、平坦で硬くしまっている	壁・床	壁は、南側に残存し、ほぼ垂直に掘り込む。床面は、ほぼ平頭で軟弱である
周 清	なし	周 清	全面にあり。幅12~17cm、深さ4~12cm
鉢	石器式印EL78（主張方位N=70°～E、全長1.87m、土器痕跡部；1個正位、部端欠損、石頭あり、石組部：立石あり・馬蹄形）、南底部：石組なし）、方形石瓶印EL79	鉢	なし、SK177が印の痕跡になる可能性もあり
柱 穴	EP 4-6が主柱穴	柱 穴	EP 5-7が主柱穴
遺 物	EL78からRP92（33-30）、EP 6から漆跡C類（同32）、F 1から漆跡（同31）	遺 物	床面を切ってEU78（34-30）が埋設
時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段	時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段

ST72住居跡（第22回・図版31）

ST72住居跡（第22回・図版31）		ST105住居跡（第23回）	
概 要	25-27-24-31G	概 要	16-19-24-25G
形 状	不整の円形。規模・東西4.50m×南北4.95m	形 状	不整の楕円多角形。規模・東西4.80m×南北（5.05m）
重複關係	ST72→SK50	重複關係	ST105→ST45
壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、やや凹凸があり軟弱	壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、ほぼ平頭で軟弱である
周 清	なし	周 清	なし
鉢	なし	鉢	なし
柱 穴	EP 1～3が主柱穴	柱 穴	配石埋植
遺 物	F 8から漆跡B類（33-29）、住居内の灰陶土器EU87（33-28）-EU88（同27）	遺 物	主柱穴（EP12～14）
時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段	時 期	造物量较少出土

ST74住居跡（第22回・図版35）

ST74住居跡（第22回・図版35）		ST86住居跡（第24回・図版35）	
概 要	30-32-29-31G	概 要	16-19-28-30G
形 状	楕円形方型。規模・東西4.43m×南北3.70m	形 状	不要の楕丸長方形。規模・ST36a 建室東西4.80m×南北（4.00m）。ST86b 建室東西（3.80m）×南北（3.20m）
重複關係	ST74→ST93→SK166（佐藤正さんはST93-ST74k の変遷を想定）	重複關係	ST126→ST87
壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、平坦で軟弱	壁	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、やや凹凸があり軟弱
周 清	なし	周 清	住居跡内西側に配石遺跡（SM173）を検出。全長3.15m
鉢	なし	鉢	主柱穴（EP12～14）
柱 穴	2個	柱 穴	造物量较少出土
遺 物	F 9から漆跡（34-36）、F 8から漆跡D類（同33）-C類（同35）、漆跡B類（同38）出土	遺 物	漆跡少出土
時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段	時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段

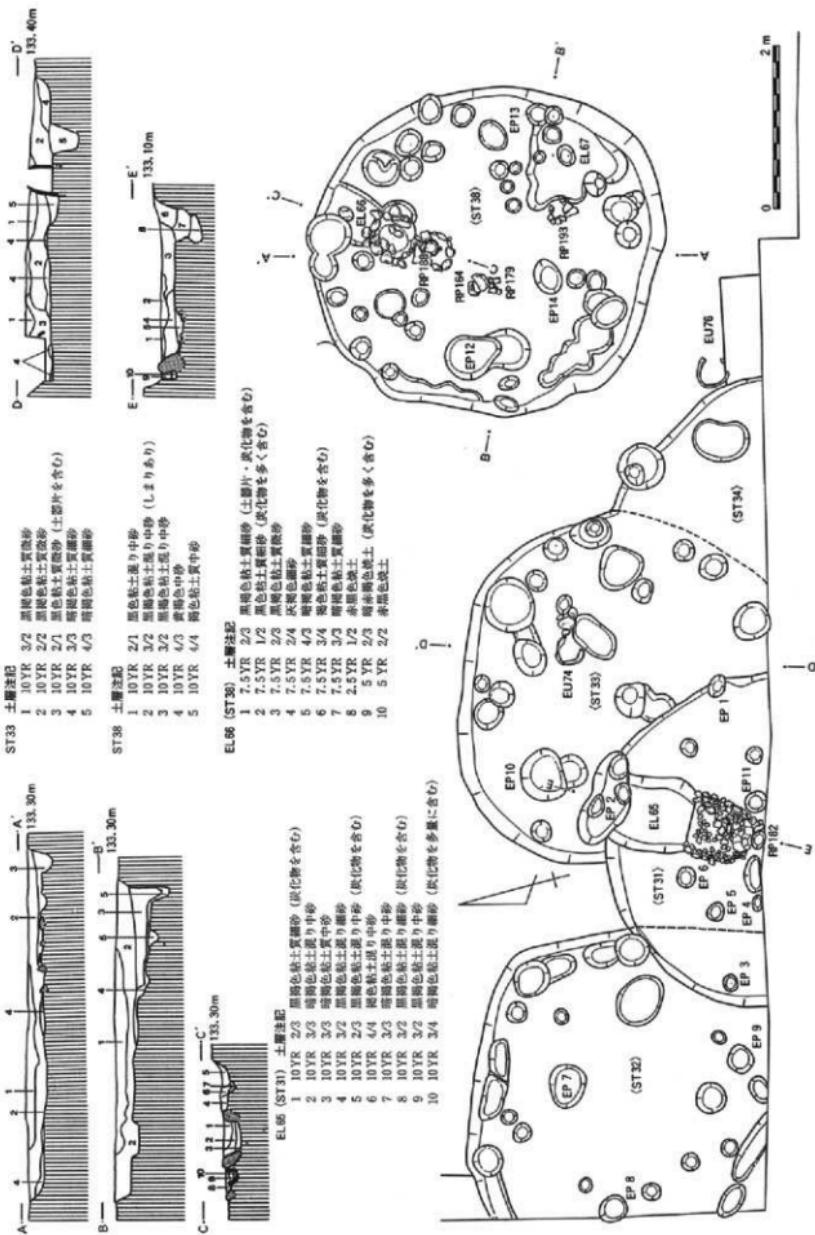
ST93住居跡（第22回・図版35）

ST93住居跡（第22回・図版35）		ST87住居跡（第24回）	
概 要	30-32-29-30G	概 要	14-16-27-30G
形 状	楕円形・東西2.9m×南北2.55m	形 状	不整の楕丸方型。規模・東西（3.8m）×南北（5.96m）
重複關係	ST74→ST93→SK166	重複關係	ST126→ST87
壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、やや硬くしまっている	壁	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、やや凹凸があり軟弱
周 清	なし	周 清	なし
鉢	なし	鉢	なし
柱 穴	EP 9-11が主柱穴	柱 穴	主柱穴（EP10～12）
遺 物	EP 8からRP200（34-38）出土	遺 物	床面から漆跡（36-64）出土
時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段	時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段

ST42住居跡（第23回）

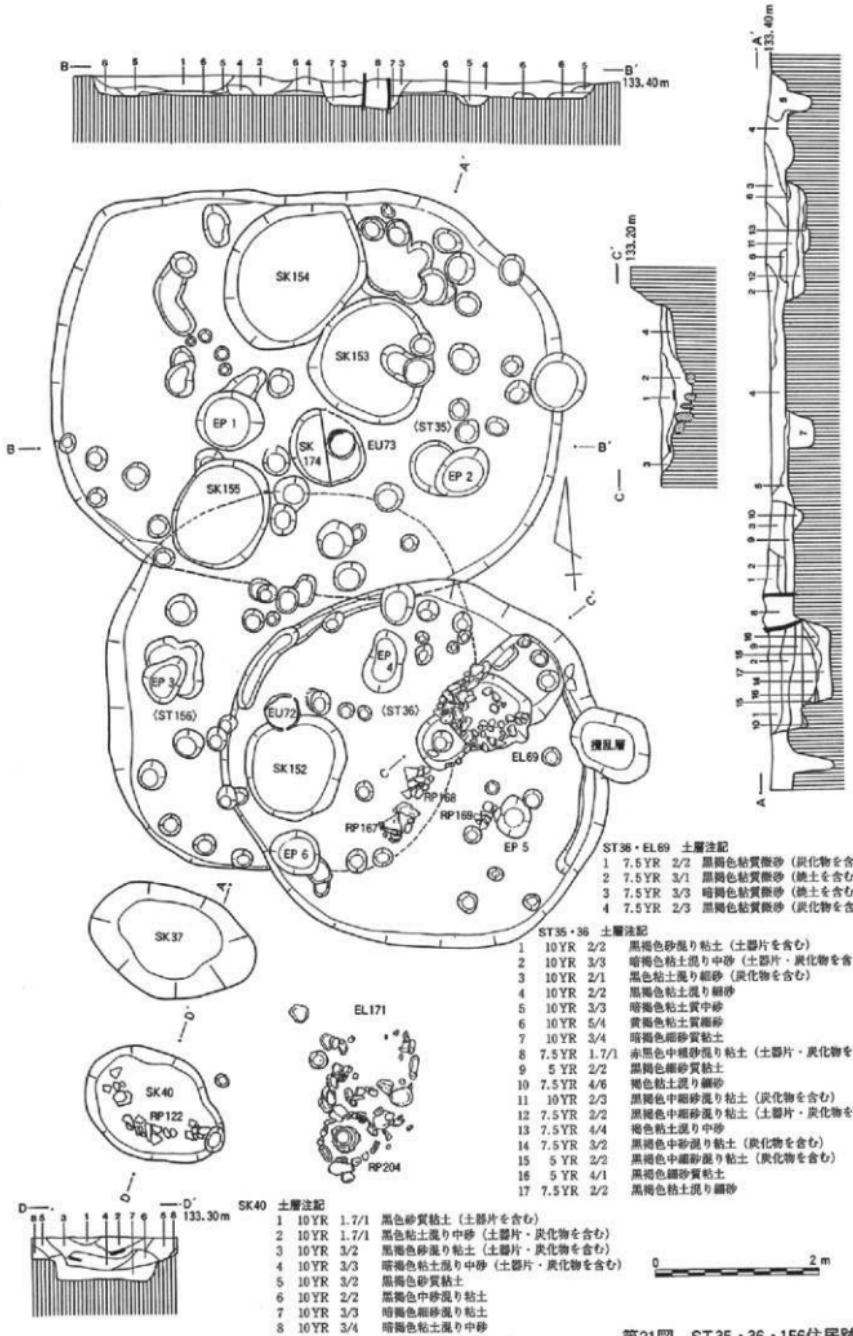
ST42住居跡（第23回）		ST125住居跡（第24回）	
概 要	14-16-25-27G	概 要	15-19-20-32G
形 状	楕丸方型。規模・東西4.62m×5.00m	形 状	楕丸方型。規模・東西（4.10m）×南北（4.40m）
重複關係	ST105→ST42→ST77	重複關係	ST125→ST126→ST87→ST96
壁・床	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、凹凸があり軟弱である	壁	壁は、緩やかに掘り込む。床面は、やや凹凸があり軟弱
周 清	なし	周 清	なし
鉢	SK176が印の痕跡になる可能性もあり	鉢	なし
柱 穴	EP 1～4など	柱 穴	主柱穴（EP 1～4）
遺 物	F 1から漆跡B類（35-47）出土	遺 物	F 1から漆跡片（36-70）出土
時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段	時 期	縄文時代中期、大木10式周墓段

第20図 ST 31~34・38生層



表一八 下層住居跡一覽(3)

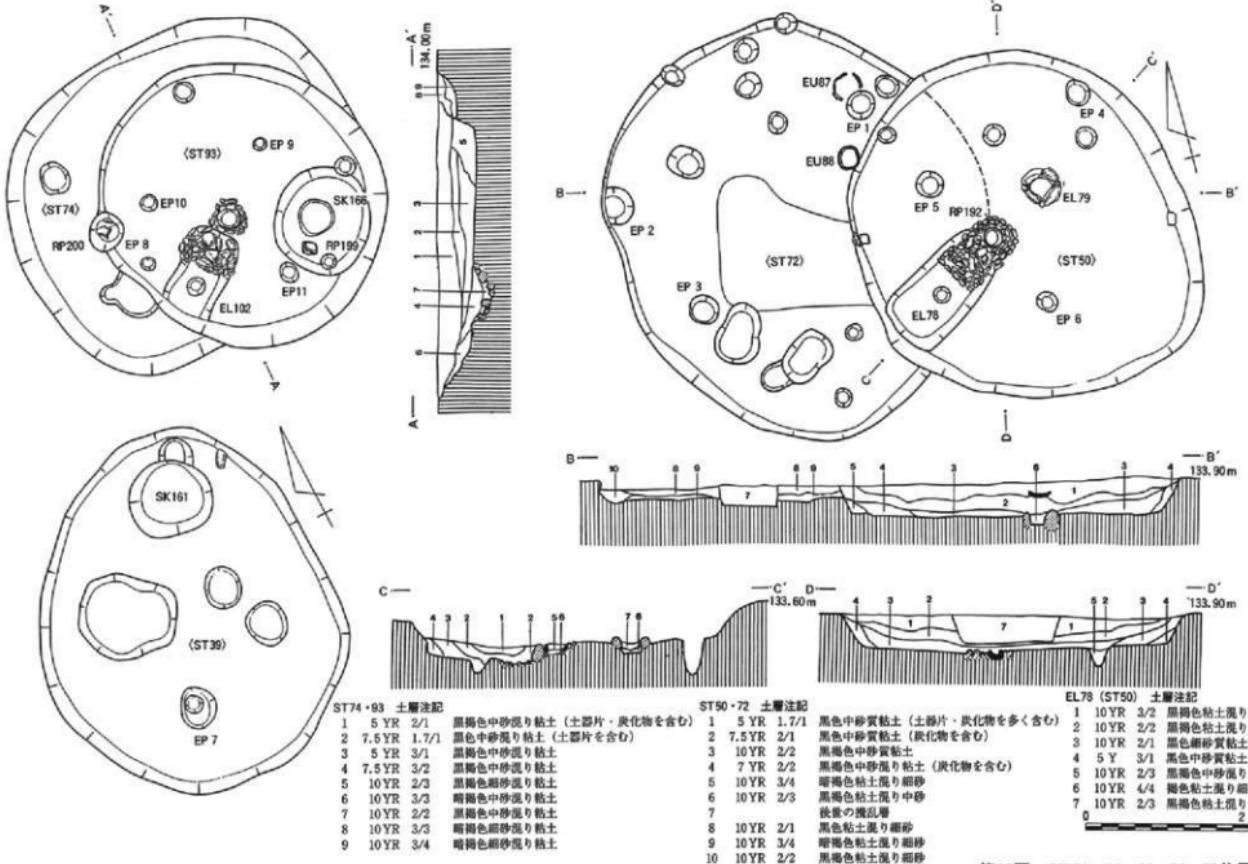
ST126住居跡（第24回）							
概 要	13~16~30~32G	形 状	楕円の多角形。周縁・推定東西（3.50m）×南北（3.60m）	重複開拓	ST126~ST87	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、やや凹凸があり軽弱
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 5~8）	道	床面を掘り込んでEU79（36~66）、F 1から小型鋤跡（岡67）が出土。	時 期	縄文時代中期、大木10式期
ST44住居跡（第25回）							
概 要	20~23~24~25G	形 状	不整の円形。周縁・東西（5.00m）×南北（2.70m）	重複開拓	ST165~ST89~ST44~ST110~ST194	施・床	壁は、ほぼ垂直に盛り込む。床面は、やや凹凸があり軽弱。
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 7~8）	道	床面出土の陶土器片なし。F 2から踏跡下平基（36~75）と亂状石跡（45~260）、F 3から石器（44~4）出土。	時 期	EL108が本住居跡の壁になる可能性あり
ST90住居跡（第25回）							
概 要	21~23~24~25G	形 状	不整の円形。周縁・東西（4.50m）×南北（1.05m）	重複開拓	ST44~ST90~ST165	施・床	壁は、ほぼ垂直に盛り込む。床面は、ほぼ平坦で軽弱である
調査・印	周溝なし、印：未発見	柱・穴	主柱穴EP 4~6	道	床面出土の陶土器片なし。F 2から有孔石器（46~13）が出土。	時 期	縄文時代中期。大木10式期後段以降
ST104住居跡（第25回）							
概 要	20~23~25~28G	形 状	多角形。周縁 ST104a東西（5.50m）×南北（2.45m）。 確定 ST104b東西（2.40m）×南北（4.00m）	重複開拓	ST165~ST90~ST44~ST110（内）	施・床	壁は、ST110Cは設されてない。床面は、ほぼ平緩で、ややくしまっている。 南北西に、一部残存。幅8~26cm、深さ11cm
調査・印	石破痕跡付EL123（主柱方位N~36°~W、全長1.25m、土器埋設部；RP189-G7~78）の平欠頭・石破痕跡・石破部；EL111C：切り離された部分の石破痕跡、南壁部；なし 同上EL111（主柱方位N~26°~W、全長1.74m、土器埋設部；RP188-G79） 下半欠頭・石破あり、石破部；圓形石破、南壁部；なし	柱・穴	主柱穴（EP 9~11）	道	ED15から石器（44~25）、F 8から地形土器（36~73）。踏跡底部（岡72）、圓錐（37~97）、兩面石器（45~61）、有孔石器類（46~14）が出土。	時 期	RP189からEU94（30~96）が出土。
ST110住居跡（第25回・図版26~27~28）							
概 要	20~23~25~28G	形 状	多角形。周縁・推定ST110a東西（4.75m）×南北（4.50m）。	重複開拓	確定 ST110b東西（4.40m）×南北（4.35m）	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、やくしまっている
調査・印	なし	柱・穴	ST165~ST90~ST44~ST110（内）	道	同上EL122（主柱方位N~49°~E、土器埋設部；正斜、底無欠頭、石破痕跡；一部残存） 同上EL107（主柱方位N~49°~E、全長2.16m、土器埋設部；RP166-G77）。石破あり 石破部；馬蹄形石破、南壁部；石破なし	時 期	EL107から石器（44~30）、EP11から石器（44~12）、F 10から踏跡（37~80~81~83）、北壁部より擦痕から擦痕（岡2~84~85）が出土。
時 期	縄文時代中期、大木10式期後段以降						
S165住居跡（第25回・図版28）							
概 要	20~21~23~24G	形 状	不整の円形。周縁・東西（5.2m）×南北（1.1m）	重複開拓	ST44~ST90~ST165	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、ほぼ平緩で軽弱である
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 1~4）	道	F 2から圓形土器部（39~98~99）、F 3から踏跡（岡100~103）が出土。	時 期	縄文時代中期、大木10式期後段以降
ST165住居跡（第25回・図版28）							
概 要	23~25~26~28G	形 状	不整の楕丸長方形。周縁・東西（5.38m）×南北（3.96m）	重複開拓	ST103~ST47~ST116~ST121	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、やや凹凸があり軽弱
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 1~4）	道	F 2から圓形土器部（39~98~99）、F 3から踏跡（岡100~103）が出土。	時 期	縄文時代中期、大木10式期後段以降
ST46住居跡（第26回・図版29~30）							
概 要	23~25~26~28G	形 状	不整の楕丸長方形。周縁・東西（4.3m）×南北（4.6m）	重複開拓	ST95~ST85~ST46~ST90~165	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、ほぼ平緩で、ややくしまっている
調査・印	なし、印：石破痕跡付EL71（主柱方位N~56°~E、全長1.21m、土器埋設部；RP190）跡・底無欠頭・石破痕跡・石破あり、石破部；円形の石破、前庭部；なし	柱・穴	主柱穴（EP 10~14）	道	EL71からRP190（38~94）、F 2から土質（43~3）、石面（44~5~7）が出土。	時 期	縄文時代中期、大木10式期
ST82住居跡（第26回・図版35）							
概 要	25~27~28~29G	形 状	楕丸の多角形。周縁・推定東西（4.50m）×南北（4.50m）	重複開拓	ST81~ST82~ST34	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、やや凹凸があり、軽弱
調査・印	周溝なし、印：SK92周辺の弧状の跡が壁になる可能性もあり	柱・穴	主柱穴（EP 15~18）	道	床面を掘り込んでEU191（38~93）が発見	時 期	縄文時代中期、大木10式期後段以降
ST84住居跡（第26回・図版35）							
概 要	25~27~28~29G	形 状	平整の円形。周縁・東西（4.97m）×南北（2.514m）	重複開拓	ST81~ST82~ST34	施・床	壁は、ほぼ垂直に盛り込む。床面は、やや凹凸があり、軽弱
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 15~18）	道	床面を掘り込んでEU191（38~93）が発見	時 期	縄文時代中期、大木10式期後段以降
ST85住居跡（第26回・図版29~30）							
概 要	23~25~26~28G	形 状	楕丸形。周縁・東西（4.40m）×南北（4.69m）	重複開拓	ST81~ST82~ST34	施・床	壁は、ほぼ垂直に盛り込む。床面は、やや凹凸があり、軽弱
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 5~9）	道	石破痕跡付EL106（主柱方位N~78°~E、推定全長1.60m、土器埋設部；EU94正斜、底部欠頭・石破なし、石破部；馬蹄形の石破、前庭部；破壊をうけ不明）	時 期	EL106からEU94（30~96）が出土。
ST85住居跡（第26回・図版29~30）							
概 要	23~25~26~28G	形 状	楕丸形。周縁・東西（4.40m）×南北（4.69m）	重複開拓	ST83~ST85~ST46~ST90~165	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、平坦で、ややくしまっている
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 5~9）	道	周溝なし、印：石破痕跡付EL96（主柱方位N~72°~W、推定全長1.70m、土器埋設部；RP191正斜、部位欠頭・石破なし、石破部；馬蹄形の石破、前庭部；破壊をうけ不明）	時 期	EL106からEU94（30~96）が出土。
ST86住居跡（第26回・図版30）							
概 要	23~25~26~28G	形 状	楕丸形。周縁・東西（4.40m）×南北（4.69m）	重複開拓	ST81~ST82~ST34	施・床	壁は、ほぼ垂直に盛り込む。床面は、やや凹凸があり、軽弱
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 5~9）	道	周溝なし、印：石破痕跡付EL96（主柱方位N~72°~W、全長1.7m、土器埋設部；RP191正斜、部位に石破あり、石破部；馬蹄形の石破、前庭部；なし）	時 期	EL106からEU94（30~96）が出土。
ST86住居跡（第26回・図版30）							
概 要	23~25~26~28G	形 状	楕丸形。周縁・東西（4.35m）×南北（4.35m）	重複開拓	ST86~ST85~ST46~ST90~165	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、平坦で、ややくしまっている
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 5~9）	道	周溝なし、印：石破痕跡付EL96（主柱方位N~72°~W、全長1.7m、土器埋設部；RP191正斜、部位に石破あり、石破部；馬蹄形の石破、前庭部；なし）	時 期	EL106からEU94（30~96）が出土。
ST95住居跡（第26回・図版30）							
概 要	24~25~26~28G	形 状	楕丸形。周縁・東西（4.35m）×南北（4.35m）	重複開拓	ST95~ST85~ST46~ST47~ST90~165	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、ほぼ平緩で軽弱
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 5~9）	道	周溝なし、印：石破痕跡付EL97（主柱方位N~72°~W、全長1.7m、土器埋設部；RP191正斜、部位に石破あり、石破部；馬蹄形の石破、前庭部；なし）	時 期	EL106からEU94（30~96）が出土。
ST47住居跡（第27回・図版30）							
概 要	23~25~26~28G	形 状	不整の楕丸長方形。周縁・東西（5.38m）×南北（3.96m）	重複開拓	ST103~ST47~ST116~ST121	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、やや凹凸があり軽弱
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 1~4）	道	床面を掘り込んでEU177（38~95）が発見	時 期	縄文時代中期、大木10式期後段以降
ST47住居跡（第27回・図版30）							
概 要	23~25~26~28G	形 状	不整の楕丸長方形。周縁・東西（5.38m）×南北（3.96m）	重複開拓	ST103~ST47~ST116~ST121	施・床	壁は、緩やかに盛り込む。床面は、やや凹凸があり軽弱
調査・印	なし	柱・穴	主柱穴（EP 1~4）	道	床面を掘り込んでEU177（38~95）が発見	時 期	縄文時代中期、大木10式期後段以降



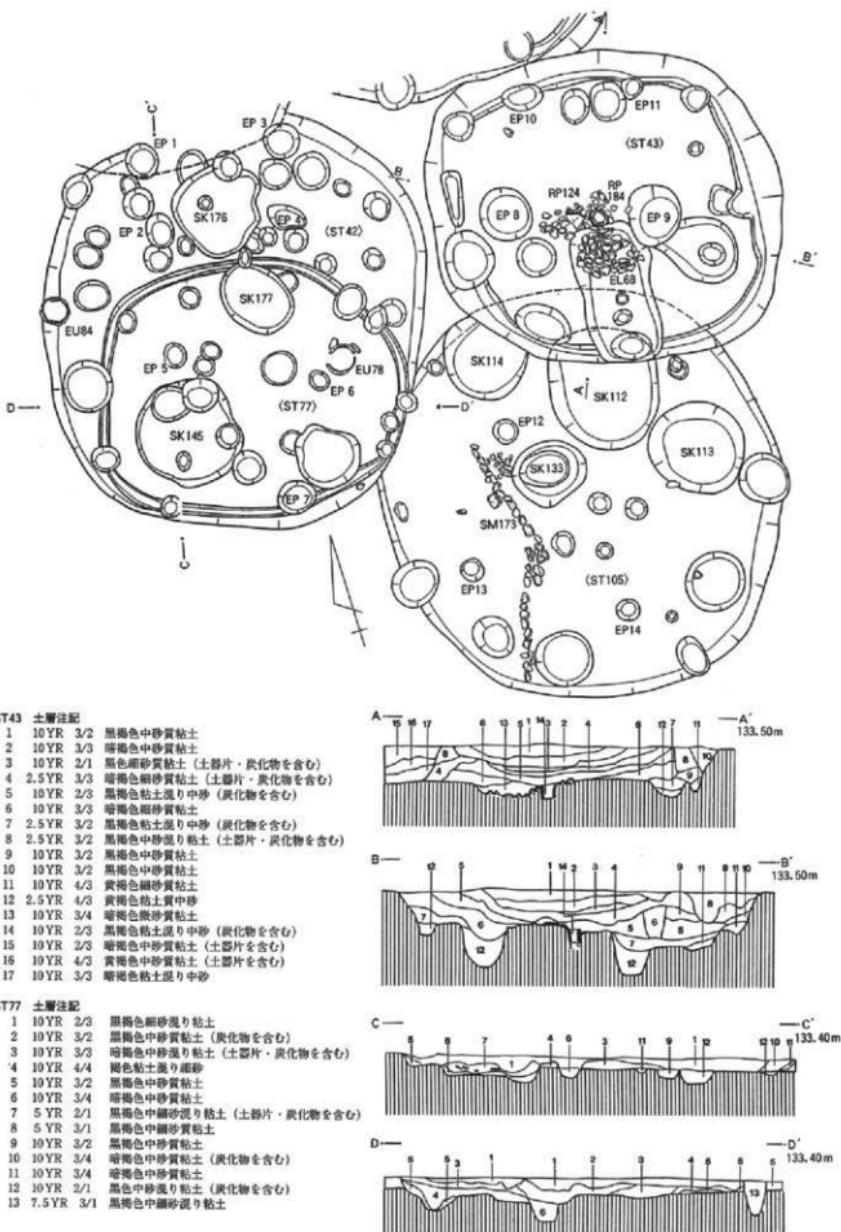
第21図 ST35・36・156住居跡

表一 9 下層住居跡一覧(4)

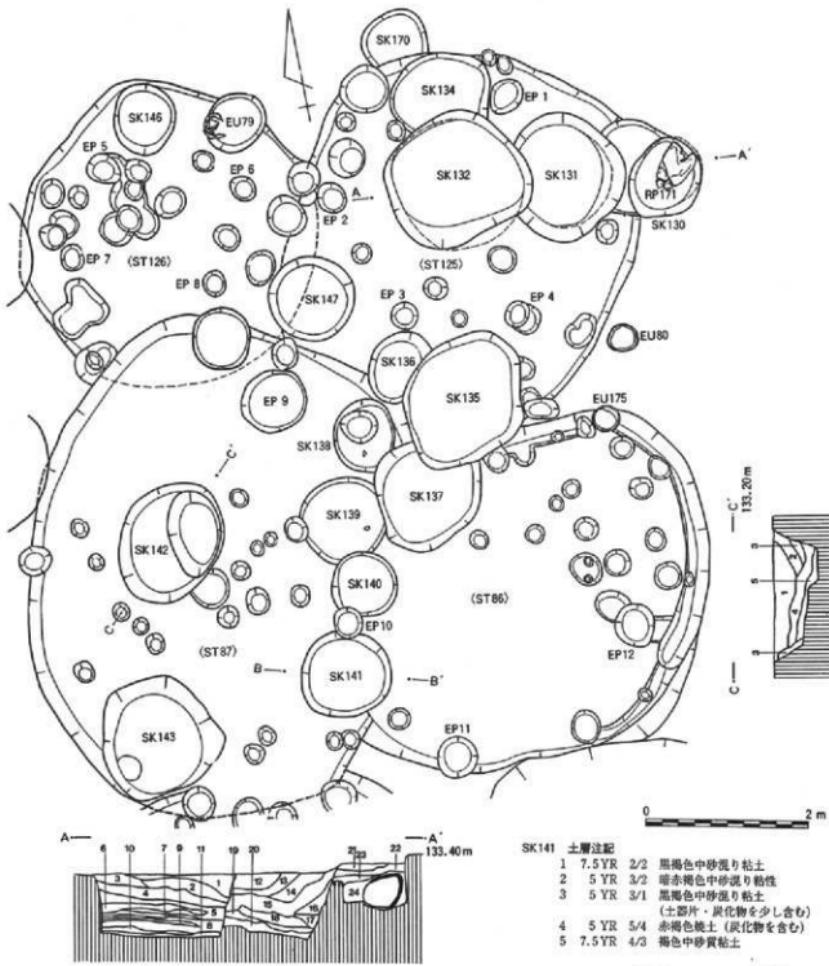
ST103住居跡（第27回）										
概要	24~26~32~34G					ST81住居跡（第28回・図版32・33）				
形状	不整の楕丸形。規模・東西4.20m×南北(3.91m)					概要	27~29~31~32G、複式部が2基あることから住居跡の建替の可能性もあり			
重複階層	ST100~ST147~ST116					形状	楕丸の多角形。規模・東西3.86m×南北4.00m			
壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、ほぼ平坦で軟弱					重複階層	ST73~ST75			
周溝・印	なし					壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、平出で硬くしまっている			
柱・穴	柱穴13個、主柱穴の配置不明					周溝	溝は、縦やかに掘り込む。床面は、平出で硬くしまっている			
遺物	遺物微量出土					柱・穴	柱石組更衣EL107(主柱方位N=28°-W、全長:3.86m、土器埋設部:1個正直・底部欠損・RP194(41~121)・石圓あり。石組部:桟円形の石組、審査部:あり)			
時期	縄文時代中期、大本10式期Ⅱ段階以前					遺物	同上EL115(主柱方位N=85°-W、確定長:1.90m、土器埋設部:1個正直・口縫部欠損・RP195(41~120)・石圓なし、石組部:楕丸形の石組、石底層:石なし)主柱穴(EP 5~10)			
ST116住居跡（第27回）										
概要	22~24~29~31G					柱・穴	柱石組更衣EL107(主柱方位N=28°-W、全長:3.86m、土器埋設部:1個正直・底部欠損・RP194(41~121)・石圓あり。石組部:桟円形の石組、審査部:あり)			
形状	不整の楕丸形。規模・東西3.70m×南北(3.30m)					重複階層	ST73~ST75~ST116			
重複階層	ST100~ST147~ST116					壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、平出で硬くしまっている			
壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、ほぼ平坦で軟弱					周溝・印	溝は、縦やかに掘り込む。床面は、平出で硬くしまっている			
周溝・印	なし					柱・穴	柱穴(EP 5~7)			
柱・穴	主柱穴(EP 5~7)					遺物	遺物微量出土。主柱跡を切るSK121土器から遺跡(29~102)が出土。			
遺物	遺物微量出土					時期	縄文時代中期、大本10式期Ⅱ段階以前			
ST117住居跡（第27回）										
概要	21~22~29~31G					柱・穴	柱石組更衣EL109(主柱方位N=69°-E、全長:2.17m、土器埋設部:1個正直・底部欠損・RP202a(40~105)・石圓あり、石組部:円筒形の石組、前底層:青石片あり)			
形状	不整の楕丸形。規模・東西3.10m×南北(3.05m)					重複階層	ST80~ST75~ST76			
重複階層	北側の外側にピットが3個露出されていることから、壁張の明瞭性もあり					壁・床	南東部のみ残存。壁は、縦やかに掘り込む。床面は、やや硬くしまっている			
壁・床	ST117~SK118~164					周溝・印	不明			
周溝・印	なし					柱・穴	柱石組更衣EL109(主柱方位N=69°-E、全長:2.17m、土器埋設部:1個正直・底部欠損・RP202a(40~105)・石圓あり、石組部:円筒形の石組、前底層:青石片あり)			
柱・穴	主柱穴(EP 8~10)					遺物	同上EL115(主柱方位N=85°-W、確定長:1.90m、土器埋設部:1個正直・上部欠損・石圓は部分的にあり、石組部:青石片あり)			
遺物	遺物少量出土					時期	EL109土器からP202b鉢群(40~107)、F 7から鍍鉄上半器(同107)が出土。			
ST121住居跡（第27回、図版33）										
概要	27~29~28~30G					柱・穴	EL109内からEU162(42~125)が出土。			
形状	楕丸形。規模・東西(4.50m)×南北(3.60m)					重複階層	SK144~ST127~ST128			
重複階層	ST73~75~ST81					壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軟弱			
壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軟弱					周溝・印	周溝:なし、印:なし、柱穴:主柱穴(EP 1~5)			
周溝・印	なし					柱・穴	床面からの土器なし。			
柱・穴	主柱穴(EP 8~10)					遺物	床面からの土器なし。SK144内からEU162(42~125)が出土。			
遺物	遺物少量出土					時期	床面からの土器なし。F 7から鍍鉄上半器(同107)が出土。			
ST73住居跡（第28回、図版33）										
概要	27~29~28~30G					柱・穴	ST127住居跡（第29回）			
形状	楕丸形。規模・東西(4.50m)×南北(3.60m)					重複階層	SK144~ST127~ST128			
重複階層	ST73~75~ST81					壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軟弱			
壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軟弱					周溝・印	周溝:なし、印:なし、柱穴:主柱穴(EP 1~5)			
周溝・印	なし					柱・穴	床面からの土器なし。			
柱・穴	柱穴(EP 1~5)					遺物	床面からの土器なし。SK144内からEU162(42~125)が出土。			
遺物	遺物少量出土					時期	床面からの土器なし。F 7から鍍鉄上半器(同107)が出土。			
ST75住居跡（第28回、図版32・33）										
概要	26~28~30~32G					柱・穴	ST128住居跡（第29回）			
形状	不整の楕丸形。規模・東西(4.50m)×南北(3.60m)					重複階層	SK144~ST127~ST128			
重複階層	ST73~75~ST81					壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軟弱			
壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軟弱					周溝・印	周溝:なし、印:なし、柱穴:主柱穴(EP 1~5)			
周溝・印	なし					柱・穴	床面からの土器なし。			
柱・穴	柱穴(EP 1~5)					遺物	床面からの土器なし。F 2から鍍鉄片(42~123)が出土。			
遺物	遺物少量出土					時期	床面からの土器なし。F 2から鍍鉄片(42~123)が出土。			
ST76住居跡（第29回、図版32・34）										
概要	27~30~31~33G、2種の建替の可能性があり					柱・穴	ST129住居跡（第29回）			
形状	不整の楕丸形。規模・東西(4.50m)×南北(3.60m)					重複階層	SK144~ST127~ST128			
重複階層	ST89~ST75~ST76~ST73~75~ST81					壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軟弱			
壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、平出で軟弱					周溝・印	周溝:なし、印:なし、柱穴:主柱穴(EP 1~5)			
周溝・印	北半分のみある。幅22~32cm、深さ24cm					柱・穴	床面からの土器なし。			
柱・穴	柱穴(EP 1~4)					遺物	遺物微量出土。認定できる土器はなし。			
遺物	床面から石器(44~27) F 2から鍍鉄片(40~105)が出土					時期	床面からの土器なし。F 2から鍍鉄片(42~126)と鍍鉄片(127)が出土。			
ST76住居跡（第29回、図版32・34）										
概要	27~30~31~33G、2種の建替の可能性があり					柱・穴	ST151住居跡（第29・図版36）			
形状	不整の楕丸形。規模・東西(4.43m)×南北(3.60m)					重複階層	SK144~ST127~ST128			
重複階層	ST76b					壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、やや凸凹があり軟弱			
壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、平出で軟弱					周溝・印	周溝:なし、印:なし、柱穴:主柱穴(EP 10~11)			
周溝・印	全面あり。幅24~48cm、深さ4~43cm					柱・穴	床面からの土器なし。			
柱・穴	石組式AE104(主柱方位:不明、全長0.94m、土器埋設部:正位・上下大振・RP198(111)石圓あり、石組部、底面部:不明)					遺物	F 1から鉢片(42~126)と鍍鉄片(127)が出土。			
遺物	同上AE105(主柱方位:不明;全長1.95m、土器埋設部:1個正直・上部大振・RP198(111)石圓あり、石組部、底面部:不明)					時期	ST171I(第21回・図版36)			
ST76住居跡（第29回、図版32・34）										
概要	27~29~31~33G					柱・穴	10~25G、2種の建替の前2.0m、複式部のみの後の住居跡の形状などは不明			
形状	楕丸形。規模・東西(4.43m)×南北(3.60m)					重複階層	石組式AE104(主柱方位N=18°-E、全長:3.66m、土器埋設部:1個正直・上部欠損・RP198(42~130)・石圓あり、石組部:楕丸形の石組、底面部:なし)			
重複階層	ST76b					壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、平出で硬くしまっている			
壁・床	壁は、縦やかに掘り込む。床面は、平出で硬くしまっている					周溝・印	周溝:なし、印:なし、柱穴:主柱穴(EP 10~11)			
周溝・印	全面あり。幅24~48cm、深さ4~43cm					柱・穴	床面からの土器なし。			
柱・穴	主柱穴(EP 5~7)					遺物	F 1から鉢片(42~126)と鍍鉄片(127)が出土。			
遺物	床面から石器(45~40) F 2から鉢片(45~110、41~114~115)が出土					時期	ST171I(第21回・図版36)			



第22図 ST 39・74・93・50・72住居跡



第23図 ST 42・43・77・105住居跡

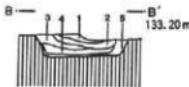


SK141 土層記述

- 1 7.5YR 2/2 黒褐色中砂混り粘土
- 2 5YR 3/2 墓赤褐色中砂混り粘性
- 3 5YR 3/1 黒褐色中砂混り粘土  
(土器片・炭化物を含む)
- 4 5YR 5/4 赤褐色粘土  
(炭化物を含む)
- 5 7.5YR 4/3 黒褐色中砂質粘土

SK142 土層記述

- 1 5 YR 3/2 墓赤褐色粘土混り中砂層 (土器片・炭化物を含む)
- 2 5 YR 2/1 黑褐色中砂混り粘土
- 3 7.5 YR 5/2 黑褐色中砂混り粘土
- 4 5 YR 3/1 黑褐色粘土混り中砂層 (炭化物を多量に含む)
- 5 10 YR 3/3 墓褐色中粗砂混り粘土 (土器片を含む)



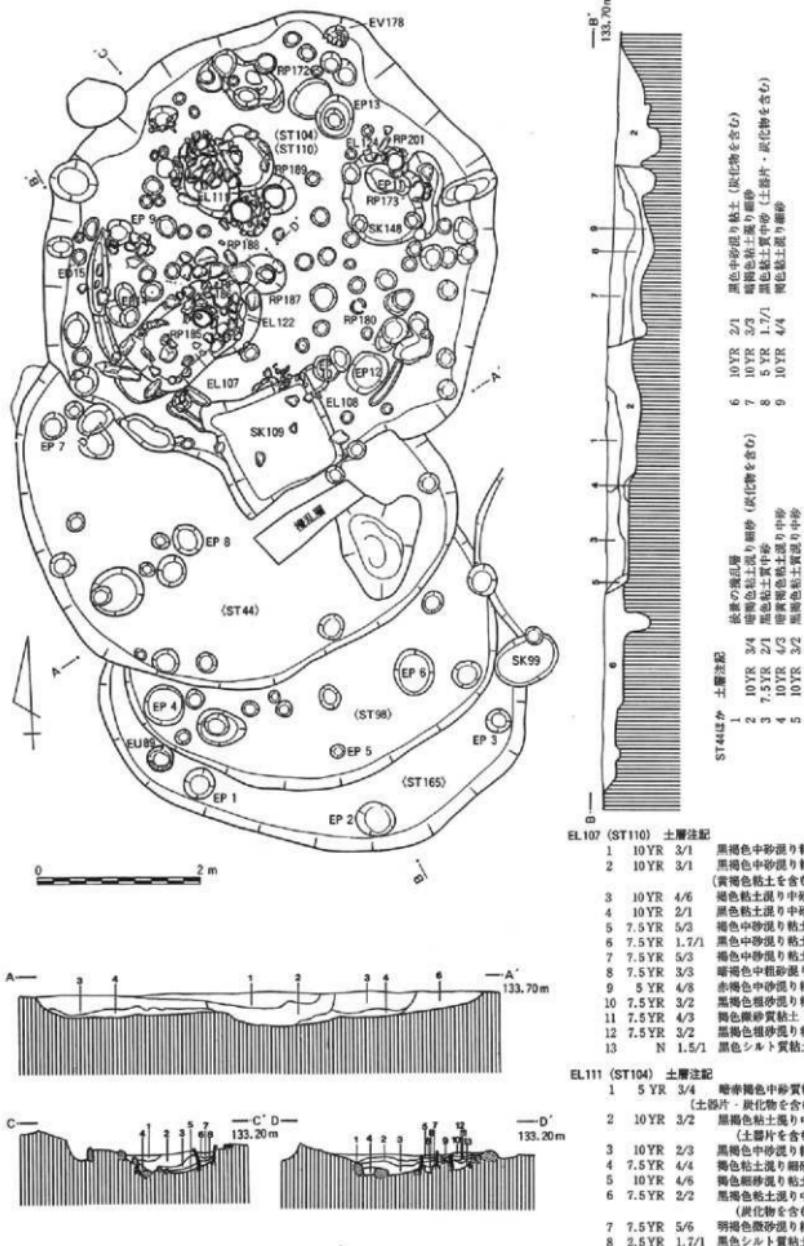
SK130~132 土層記述

- 1 7.5YR 2/3 黒褐色粘土混り中砂層
- 2 5 YR 3/1 黑褐色中砂混り粘土
- 3 5 YR 3/1 黑褐色中砂混り粘土 (土器片・炭化物を含む)
- 4 5 YR 3/2 墓赤褐色中粗砂混り粘土
- 5 10 YR 2/3 黑褐色中砂混り粘土 (土器片・炭化物を含む)
- 6 5 YR 3/1 黑褐色粗砂混り粘土
- 7 7.5YR 4/4 粘土中粗砂
- 8 7.5YR 4/4 粘土粗砂
- 9 5 YR 2/1 黑褐色中粗砂混り微砂
- 10 7.5YR 3/2 黑褐色粗砂混り細砂質粘土
- 11 10 YR 4/6 粘土中粗砂
- 12 5 YR 2/1 黑褐色粗砂混り粘土
- 13 7.5 YR 3/1 黑褐色中砂質粘土
- 14 5 YR 2/1 黑褐色粗砂質粘土
- 15 10 YR 3/3 墓褐色中砂質粘土 (土器片・炭化物を含む)
- 16 10 YR 2/2 黑褐色粗砂質粘土
- 17 7.5 YR 4/4 黄褐色粗砂混り中粗砂 (炭化物を含む)
- 18 10 YR 2/2 黑褐色粗砂混り粘土
- 19 10 YR 2/2 黑褐色粗砂混り粘土 (炭化物を含む)
- 20 10 YR 4/6 黑褐色中砂
- 21 5 YR 2/2 黑褐色中砂質粘土 (土器片・炭化物を含む)
- 22 10 YR 2/2 黑褐色中砂質粘土
- 23 5 YR 3/1 黑褐色粗砂質粘土
- 24 5 YR 2/1 黑褐色粗砂質粘土

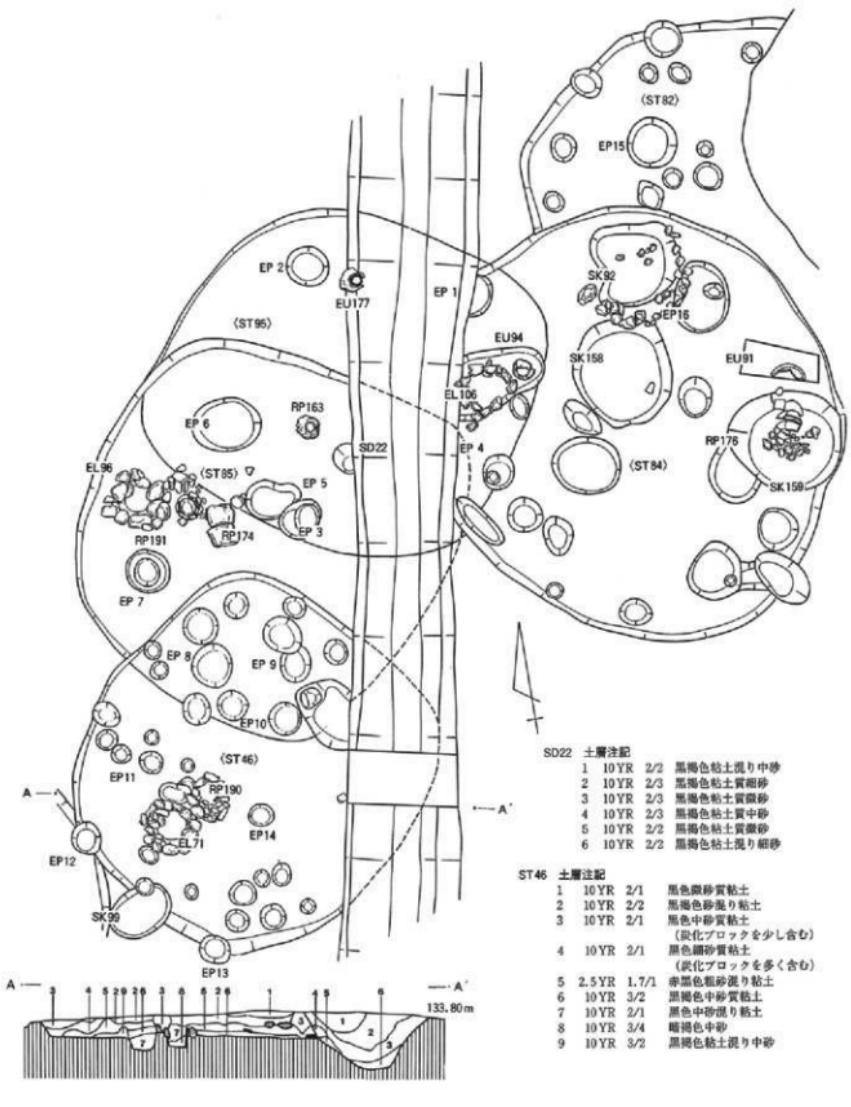
第24図 ST86・87・125・126住居跡

表-10 下層土壤一覧

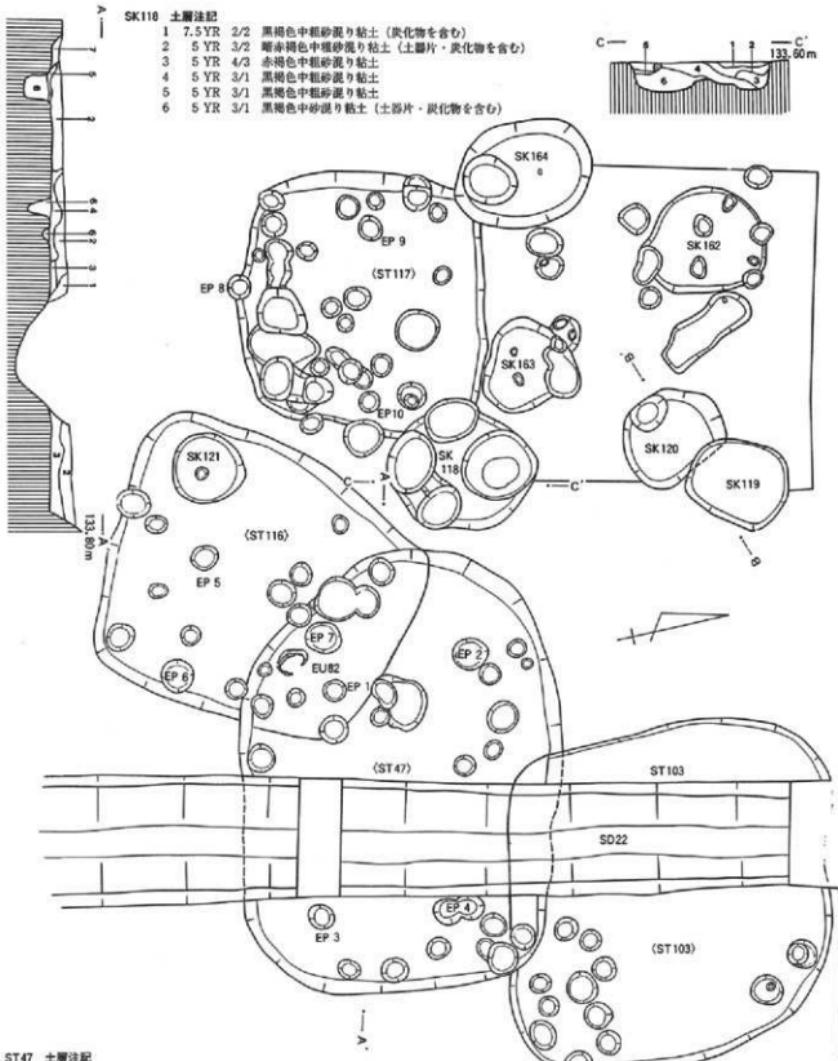
通 程番号	検出地区(X-Y)G	平 面 形	幅幅(EW-NS)cm	深さ(cm)	重 底 間 隔	備 考	辨認番号	採取番号
S K 37	8 - 9 - 11G	精 円 形	205 × 138	53			21	
S K 40	8 - 9 - 25G	精 円 形	186 × 134	21		底面が平底状	21	36
S K 48	24 - 27G	不 整 円 形	(125) × 150	15	ST45 - SK49 → SK48		19	28-36
S K 49	24-25-27-28G	不 整 方 形	(245) × 148	25	ST45 - SK49 → SK48		19	28-36
S K 70	19-20-28-29G	方 形	112 × 113	44	SK70 → ST45		19	
S K 92	26-28-29G	不 整 方 形	100 × 100	40	ST84 - ST82 → SK92		26	
S K 99	23 - 24 - 25G	精 円 形	80 × 58	50	ST46 - ST165 → SK99		26	
S K 100	28-30G	精 円 形	126 × (100)	38	SK100 → STa - b		28	
S K 109	21-22-25-26G	方 形	125 × 125	61	EL108 - SK109	底面が継続	25	36
S K 112	17-18-25-26G	精 円 形	133 × 151	45	SK112 → ST43		23	
S K 113	18-25-26G	円 形	115 × 128	70	SK113-ST105 → SK112	土調出土	23	
S K 114	17-26G	円 形	85 × 111	33	SK114 → ST43 - ST105		23	
S K 118	22-23-31-32G	精 円 形	165 × 144	37	ST117b - SK118 → ST170a	底面が平底状	27	35-38
S K 119	22-23-33G	不 整 方 形	122 × 100	56	SK120 - SK119	底面が平底状	27	35-38
S K 120	22-32-33G	不 整 方 形	116 × 128	24	SK120 - SK119	底面が平底状	27	35-38
S K 121	22-23-30G	円 形	84 × 90	23	SK121 → ST116		27	
S K 130	17-31G	不 整 円 形	85 × 108	55	ST125 - SK130 → SK131	南面から深鉢(RP171) 炭化稻穀土	24	37
S K 131	17-31G	円 形	(145) × 156	75	SK130 - SK131 → SK132	底面が平底状で深 い	24	37-38
S K 132	15-31G	不 整 円 形	168 × 151	75	SK131 - SK132	底面が平底状で深 い	24	37-38
S K 133	17-25G	精 円 形	93 × 80	56	ST105 - SK133		23	
S K 134	16-31-32G	不 整 円 形	137 × (70)	35	SK170 → SK134 → SK132		24	
S K 135	16-17-29-30G	不 整 極 円 形	182 × 147	64	SK136-137 → SK135	深鉢(35-60)出土	24	
S K 136	16-30G	精 円 形	92 × (65)	43	ST125 - SK136 → SK135		24	
S K 137	16-29G	精 円 形	(150) × 135	25	SK139 - SK137 → SK135		24	
S K 138	16-29-30G	円 形	78 × (80)	3	SK138 - SK137		24	
S K 139	15-16-29G	円 形	110 × (93)	11	SK139 - SK140		24	
S K 140	16-28-29G	円 形	80 × 80	17	SK139 - SK140		24	38
S K 141	15-16-28G	円 形	110 × 110	26	SK141 - ST87	底面平底状	24	38
S K 142	14-15-28-29G	精 円 形	158 × 123	55	ST87 → SK142	深鉢(35-60)出土	24	38
S K 143	14-15-27-28G	不 整 円 形	135 × 142	68	ST87 → SK143	底面が平底状で深 い	24	38
S K 144	12-13-25-26G	不 整 方 形	123 × 139	30	ST144 → ST127	無歯土器(EU162)	29	38
S K 145	15-25-26G	不 整 円 形	123 × 130	21	SK145 - ST42a - b ST22		23	
S K 146	14-25-26G	円 形	80 × 80	34	ST126 - SK146		24	
S K 147	15-16-30-31G	円 形	108 × 108	37	ST147 - SK125 - 126	底面が丸底状	24	39
S K 148	22-27G	不 整 極 円 形	100 × 118	17	SK148 → ST104ab-110ab	RP173出土	25	
S K 149	13-14-30-31G	不 整 円 形	178 × 182	50	ST129 - SK149	底面が平底状	29	39
S K 150	13-14-29G	不 整 円 形	175 × 146	60	ST129 - SK150		29	39
S K 152	9-27G	不 整 円 形	151 × 140	44	SK152 - ST136	上層上面からEU72 出土	21	39
S K 153	9-29-30G	不 整 円 形	151 × 140	47	ST135 - SK154 → SK153	底面が輪郭状	21	39
S K 154	8 - 9 - 30G	不 整 極 円 形	206 × 153	63	SK154 - SK153		21	39
S K 155	8-28-39G	精 円 形	134 × 112	62	ST135a - b - SK155	底面が盤状	21	
S K 157	27-31G	精 円 形	104 × 83	43	SK157 - ST75		28	
S K 158	26-28G	円 形	113 × 132	40	SK158 - SK92		26	
S K 159	27-28G	円 形	137 × 124	49	SK159 - ST84	RP176出土・底面に 輪郭	26	39
S K 161	30-28G	不 整 円 形	100 × 100	31	ST39 → SK161	深鉢(35-45-46)出 土	22	
S K 162	21-32G	不 整 極 円 形	132 × 148	11			27	
S K 163	22-31-32G	不 整 方 形	100 × 115	19	ST117b - SK163 - ST117a	西側から EU81出 土	27	
S K 164	20-31-32G	精 円 形	132 × 175	30	ST117b - SK164 - ST117a		27	
S K 166	32-29-30G	不 整 円 形	126 × 114	22	ST74 → ST93 → SK166	RP196 (34-37)	22	
S K 170	16-32G	不 整 円 形	83 × (58)	20	ST170 - ST125 - SK134		24	
S K 174	9-29G	円 形	75 × 100	37	ST350a - b - SK174	EU73(33-25)出土	21	



第25図 ST44・98・104・110・165住居跡



第26図 ST46・82・84・85・95住居跡



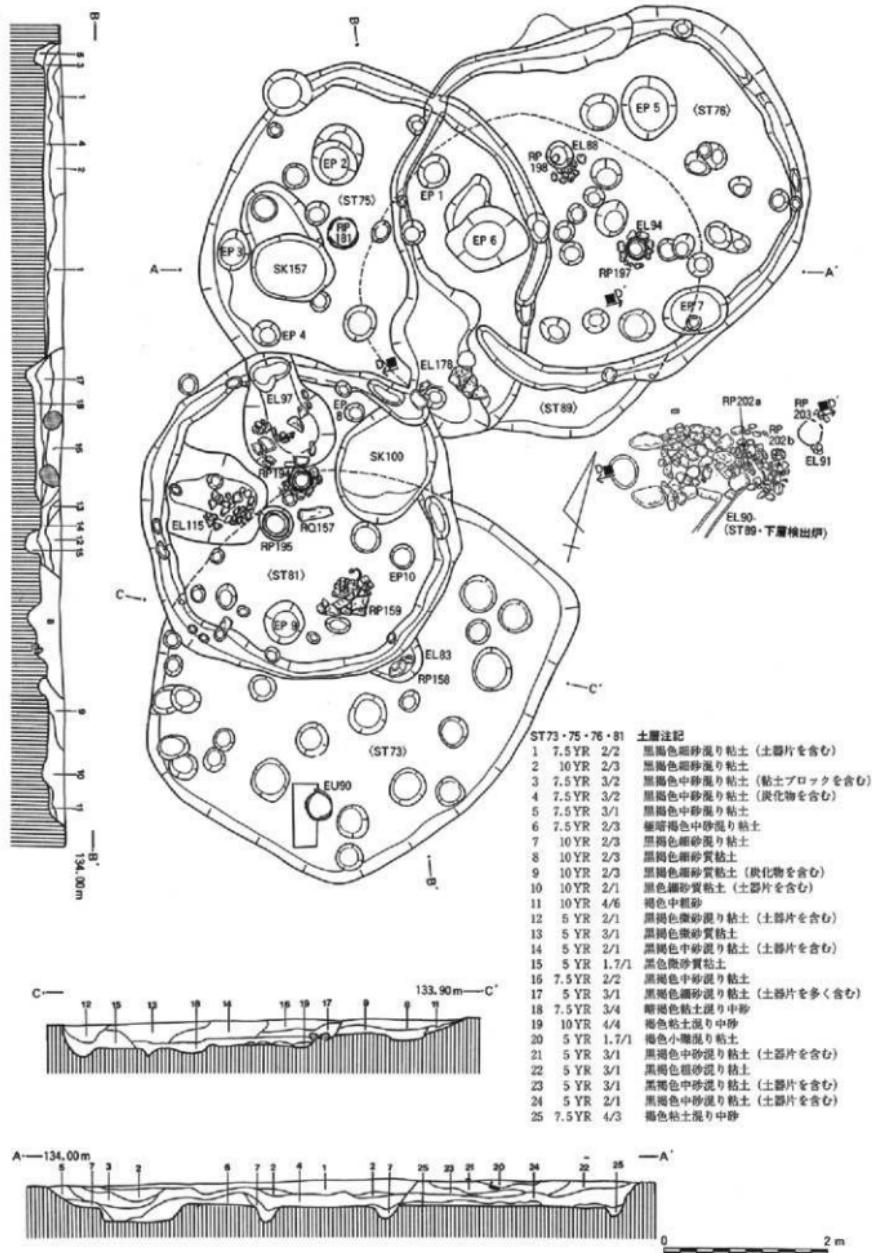
**ST47 土層注記**

- 10 YR 2/1 黒色粘土
- 7.5 YR 3/1 黑褐色中砂混り粘土
- 10 YR 2/2 黑褐色細砂混り粘土
- 10 YR 3/3 明褐色細砂質粘土
- 10 YR 2/3 黑褐色中砂混り粘土
- 10 YR 3/2 黑褐色中砂混り粘土
- 10 YR 2/3 黑褐色粘土混り細砂 (ST116 壁土)

**SK119・120 土層注記**

- 7.5 YR 2/1 黑色粘土混り中砂 (土器片少數含む)
- 7.5 YR 2/1 黑色粘土混り中砂 (土器片含む)
- 5 YR 2/1 黑褐色粘土混り中砂 (土器片含む)
- 5 YR 2/1 黑褐色中砂混り粘土 (炭化物を多く含む)
- 7.5 YR 3/3 墓黒褐色粘土混り中砂
- 5 YR 1.7/1 黑色中砂混り粘土
- 7.5 YR 4/4 黑褐色混り中砂
- 7.5 YR 5/6 明褐色粗砂
- 7.5 YR 2/2 黑褐色粘土混り細砂
- 7.5 YR 2/1 黑色粘土混り中砂
- 5 YR 3/1 黑褐色粘土混り中砂 (炭化物を含む)
- 5 YR 2/1 黑褐色粘土混り中砂

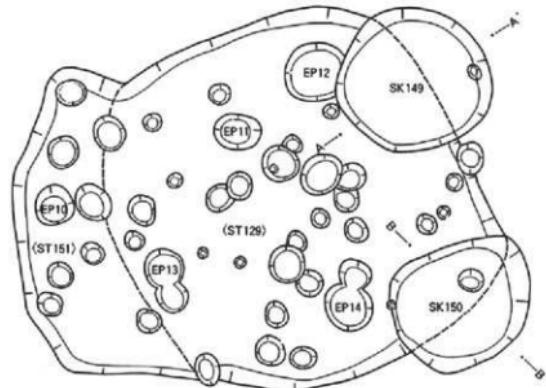
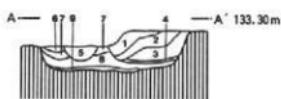
第27図 ST47・103・116・117住居跡



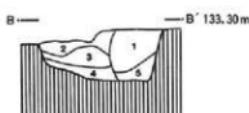
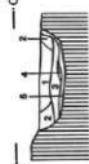
第28図 ST73・75・76・81・89住居跡

SK149 土層注記

- 1 10 YR 2/3 黒褐色粘土混り細砂
- 2 10 YR 8/3 喀褐色粘土混り中細砂
- 3 10 YR 3/2 黒褐色中砂混り粘土
- 4 10 YR 4/3 喀褐色中粗砂混り粘土
- 5 10 YR 3/2 黑褐色粘土混り中粗砂
- 6 10 YR 3/3 喀褐色粘土混り中砂
- 7 10 YR 2/1 黑色中細砂混り粘土
- 8 10 YR 2/3 黑褐色粘土混り中砂
- 9 10 YR 4/5 黑褐色中細砂



- SK144 土層注記
- 1 5 YR 3/1 喀褐色中細砂混り粘土 (土器片・炭化ブロックを含む)
  - 2 7.5 YR 3/3 喀褐色粘土混り中細砂
  - 3 5.5 YR 4/4 喀褐色中細砂混り粘土 (土器片・炭化物を含む)
  - 4 7.5 YR 4/4 喀褐色粘土混り中細砂
  - 5 5 YR 3/2 喀褐色粘土混り中細砂



SK150 土層注記

- 1 7.5 YR 5/6 明褐色中細砂混り粘土 (土器片を含む)
- 2 7.5 YR 2/2 黑褐色中細砂混り粘土 (炭化物を含む)
- 3 7.5 YR 3/2 黑褐色細砂質粘土
- 4 10 YR 2/1 黑色細砂質粘土 (土器片・炭化物を含む)
- 5 7.5 YR 4/2 喀褐色中細砂混り粘土



第29図 ST127・128・129・151住居跡

## 2 下層の遺物（第30～46図、表11～14）

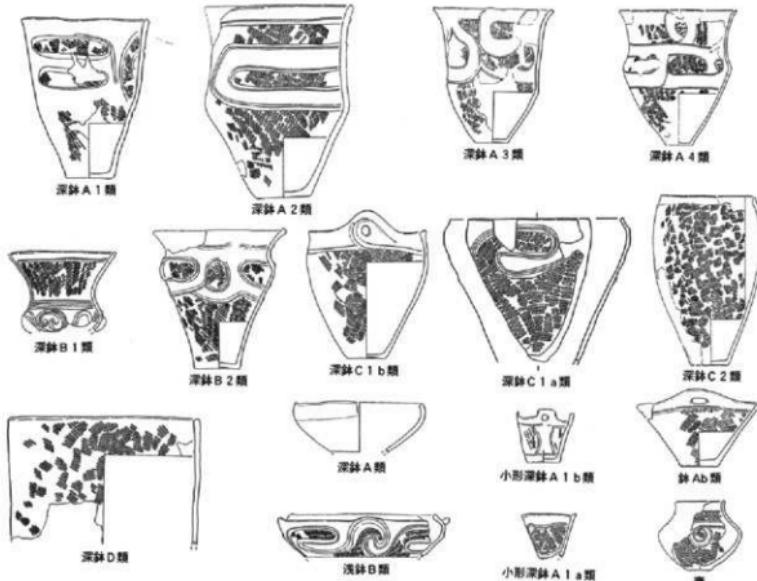
### (1) 縄文時代中期末葉の土器の分類基準（第30図）

各遺構毎の出土状況の説明に入る前に、まず遺物の多くを占める縄文土器について、その分類基準を示しておく。山形西高敷地内遺跡で認められた縄文時代中期の土器の器種には、深鉢形土器・浅鉢形土器・小形深鉢形土器・注口土器・壺形土器などがある。

このうち深鉢形土器にはA～D類の4種類の器形がみられる。A類は胴上部で軽く弯曲し、口縁部が緩やかに外反する器形である。胴上部の弯曲の程度や口縁部の外反の度合いでさらに1～4類に細分される。B類は口縁部が「く」字状に強く外反する器形である。頸部が長く伸びるもの（B1類）と、短く外反するもの（B2類）とがある。C類は口縁部が内弯し、頸部にくびれをもたない器形である。胴部が内弯気味に外傾するもの（C1類）と、胴中位で緩やかにくびれるもの（C2類）とがある。D類は口縁部がほぼ直立する器形である。口縁部は平縁（a）と波状縁（b）とに区別されるが、平縁が多い。

浅鉢形土器にはA・B類の2種類の器形がみられる。A類は口縁部が内弯気味にほぼ直立、ないし外傾する器形である。B類は口縁部が内弯する器形である。小形深鉢土器は口縁部が外弯気味にほぼ直立する器形のみである。

注口土器は注口部の破片しかなく、全体の器形は不明である。しかし注口の形状や類例から浅鉢形土器を基本とする器形が想定できる。壺形土器は口縁部がやや外傾し、胴部下半が円窓を有するものが1点認められた。



第30図 縄文土器器種分類図

## (2) 住居跡出土の遺物

ST 2 住居跡の覆土 F 2・3 層からは、縄文土器の深鉢（第31図1～4）、磨石（第46図9）、EP 2 から搔器（第45図41）などが出土している。床面からは遺物が出土していない。縄文土器は小片のみの出土であるが、円形の貼付文や直線的な平行する磨消縄文帯の土器が出土している。ST101住居跡からはほとんど遺物が出土していない。

ST41住居跡の床面からは浅鉢（第31図5）、EP 6 から磨製石斧（第46図4）などが出土している。浅鉢は口縁部が内弯するB類で、胴部上半に横位の波濤文が描かれている。ST41住居跡は3条の周溝などから2回の立替え（外側への拡張）がなされたことがわかるが、本浅鉢は新しい時期の住居跡に属するものと想定される。

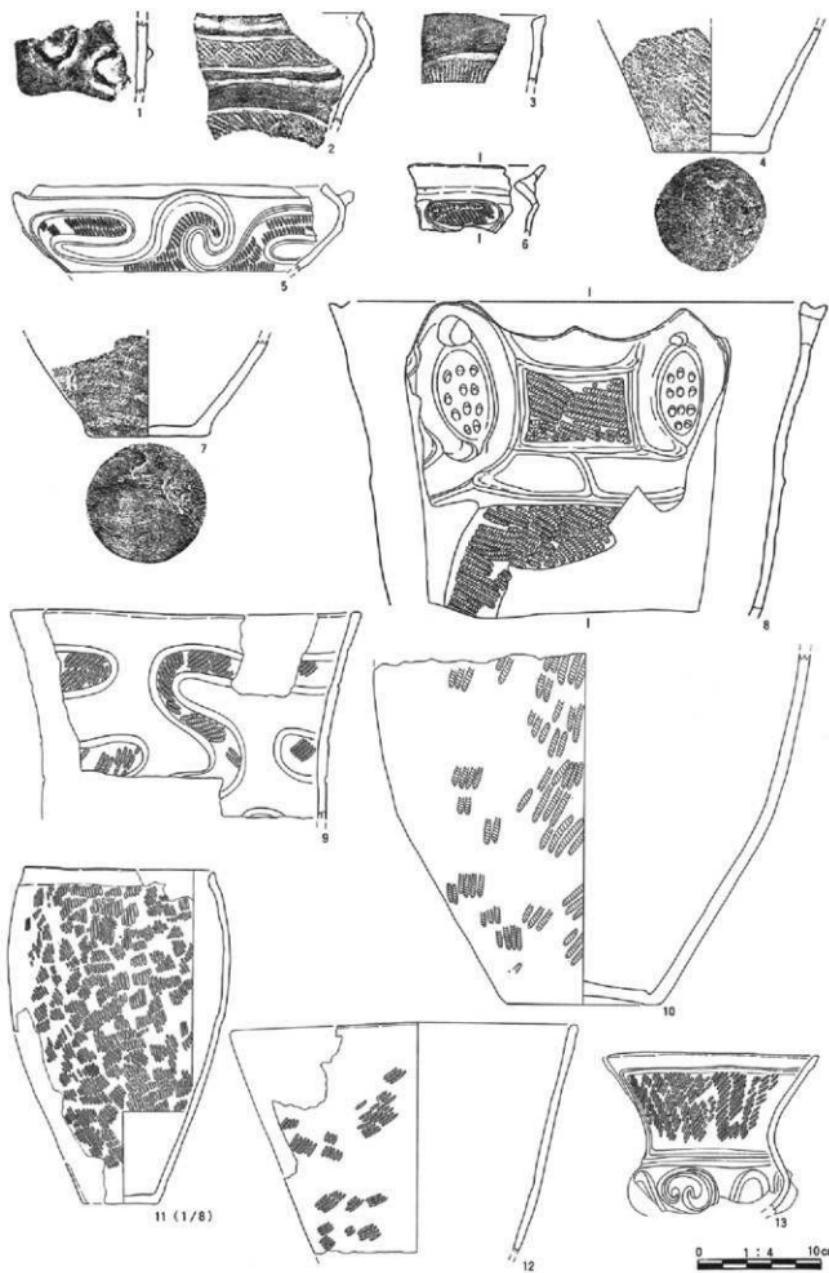
ST45住居跡の床面からは深鉢 A 3類（第31図8）と B 2類（同6）が出土している。6には稜の明確な隆帯による横位の楕円文、8の深鉢は隆帯による円形の区画文の中に連続した刺突文が施されている。ST31～34の4棟の住居跡は各々重複関係を有している。ST34住居跡の東壁外側から外面に縄文のある深鉢（第31図10）と「S」字状文が施される深鉢 A 2類（同9）、ST33住居跡の床面中央から全面に縄文が施される深鉢 C 2類（同11）が出土している。ST31住居跡のEL65からは複式炉の埋設土器に用いられた深鉢（同12）、F 1からは削器（第45図48）、F 2からは深鉢（第31図13）と搔器（第45図42）が出土している。13は深鉢 A 1類で、胴部上半に縱方向の区画文、胴部下半に隆帯による巴文が施されている。ST32住居跡からは図示できる土器は出土していない。

ST38住居跡はEL66から埋設土器（第32図14）、EL67から削器（第45図44）、床面から深鉢下半部（第32図15）と石製円盤（第46図14）、F 3 から深鉢 A 4類（第32図17）と小形深鉢 A類（同19）・磨製石斧（第46図5）・磨石（同17）などが出土している。17は頂部に小突起を有し、胴部上半に稜の明確な隆帯による楕円および方形の区画文、19は沈線による方形の区画文が施されている。なお ST38住居跡の北西から EU75（第32図16）、南西から EU83（同18）が検出されている。

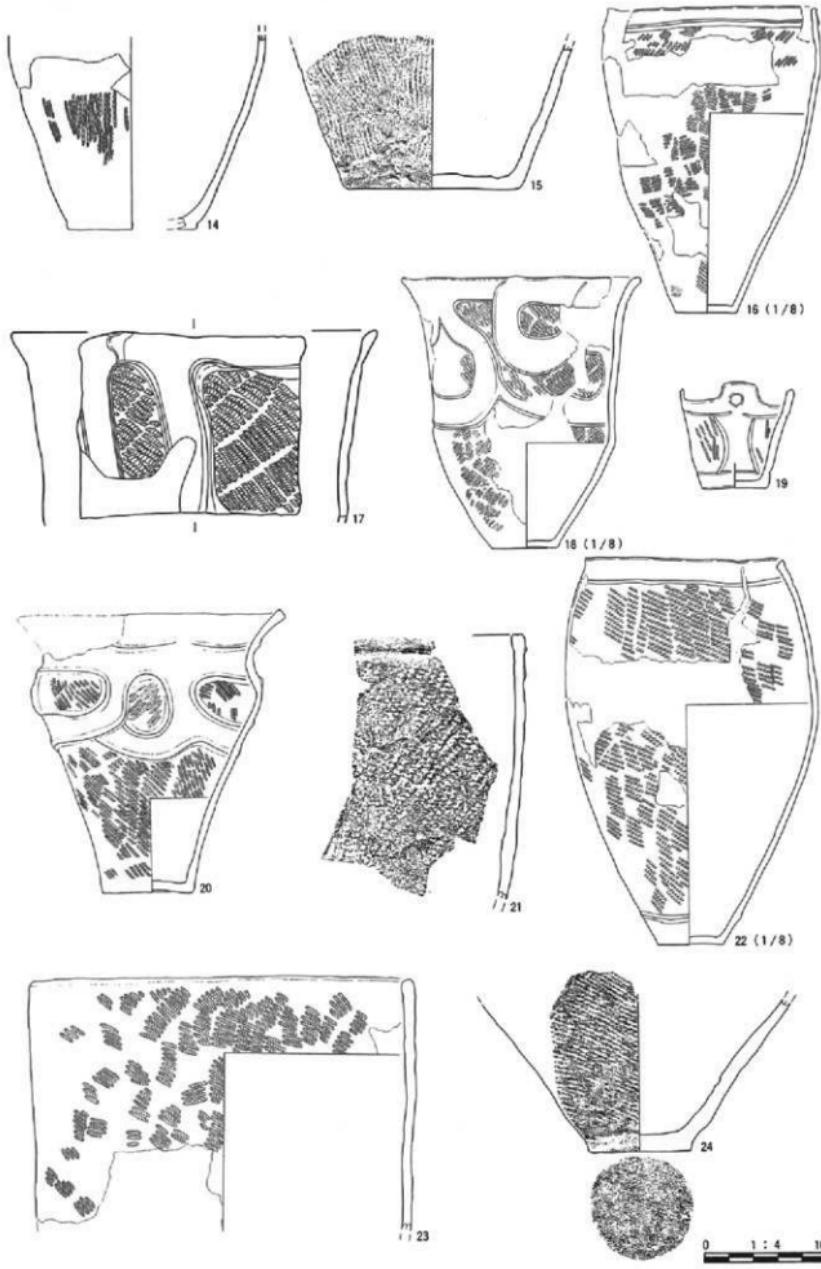
ST35・36・156の3棟の住居跡は各々重複関係を有している。ST156住居跡からは図示できる遺物は出土していない。ST36住居跡の床面からは深鉢 B 2類（第32図20）と C 2類（同21・22）、F 1 から深鉢 D類（同23・24）、石匙（第44図10）・有孔石製品（第46図12）などが出土している。20は胴部上半に後の明確な隆帯による楕円および方形の区画文を有するものである。ST35住居跡中央のSK174内からは撚糸文の深鉢（第33図25）、F 1 から複節縄文の深鉢（同26）が出土している。

ST39住居跡の遺物の量は少ないが、EP 7 から深鉢片（第35図43）、F 2 から深鉢片（同44）が出土している。44は稜の明確な隆帯による楕円ないし方形の区画文を有する深鉢である。なお、ST39住居跡を切って掘り込まれているSK161土壤の覆土からは、隆帯によって区画される直線的な縄文帯をもつ深鉢片（同45・46）が出土している。

ST50とST72住居跡は重複しており、後者が新しい。ST72住居跡の床面からは時期を示すような土器はないが、上層のF 8 から磨消縄文によるC字文をもつ深鉢 B類（第33図



第31図 繩文土器実測図(1)



第32図 繩文土器実測図(2)

29) が出土している。このほか住居跡の北側から埋設土器が2個 (EU88・87一同27・28) 出土している。いずれも全面に縄文が施されている。ST50住居跡はEL78から埋設土器(同30)、EP 6 から深鉢C 1類(同32)、F 1 から深鉢胴部下半(31)が出土している。32は胴部上半から口縁部にかけて単純化した波濤文が描かれている。

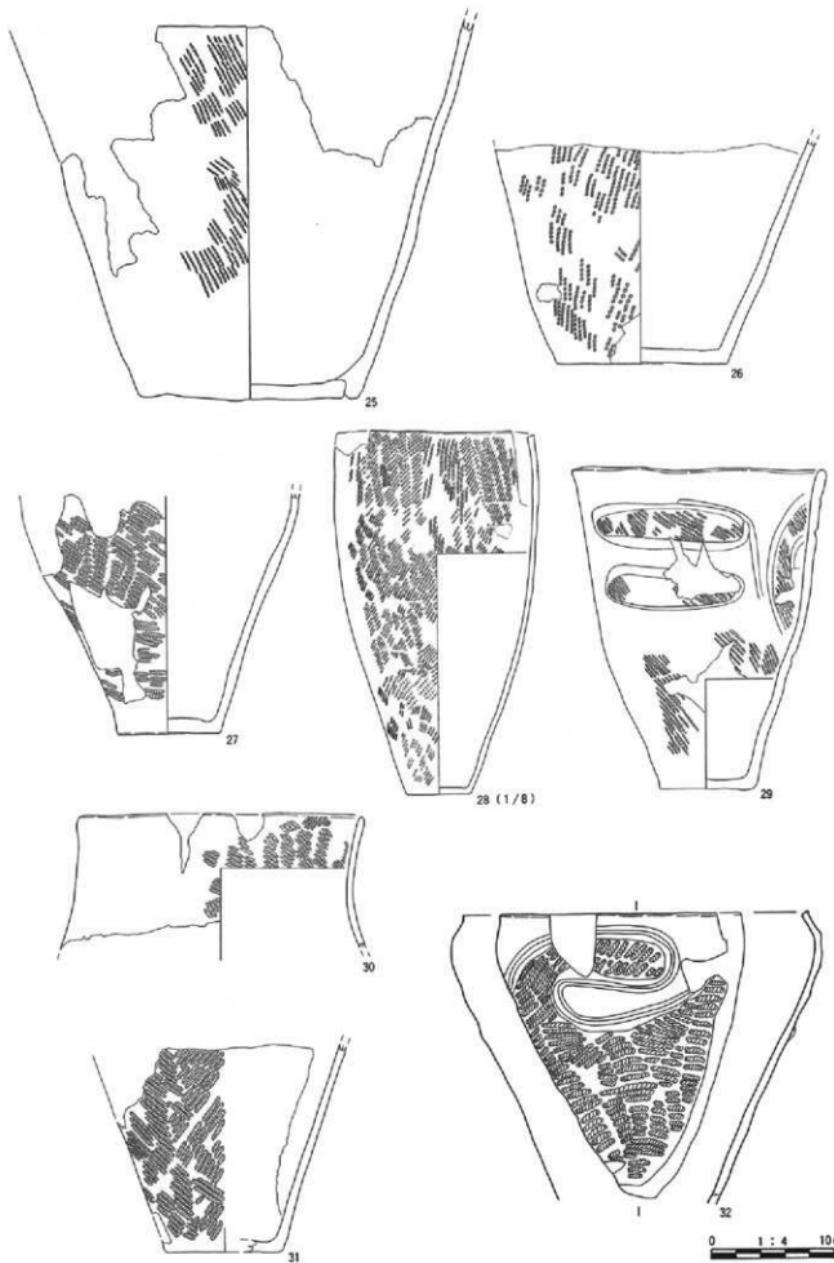
ST74とST93住居跡およびSK166土壤は、ST74→ST93→SK166の新旧関係が考えられる。ST74住居跡のF 9 からは横位波濤文を有する深鉢 (第34図36)、F 8 からは深鉢B類(同33)・隆帯によって区画される楕円文のD類 (35)、無文の浅鉢A類 (34) などが出土している。ST93住居跡のEP 8 内からは雁股文を有する深鉢A 2類 (38) が、SK166土壤の覆土からは鉢A類 (37) が出土している。

ST42・77・105の3棟の住居跡は各々重複関係を有している。ST42住居跡の床面からは図示できる土器はないが、上層のF 1 から深鉢A 4類 (第35図47) が出土している。沈線による橢円および方形の区画文を有するものである。また、ST77住居跡の床面を掘り込んでEU78 (第34図42) が埋設されている。

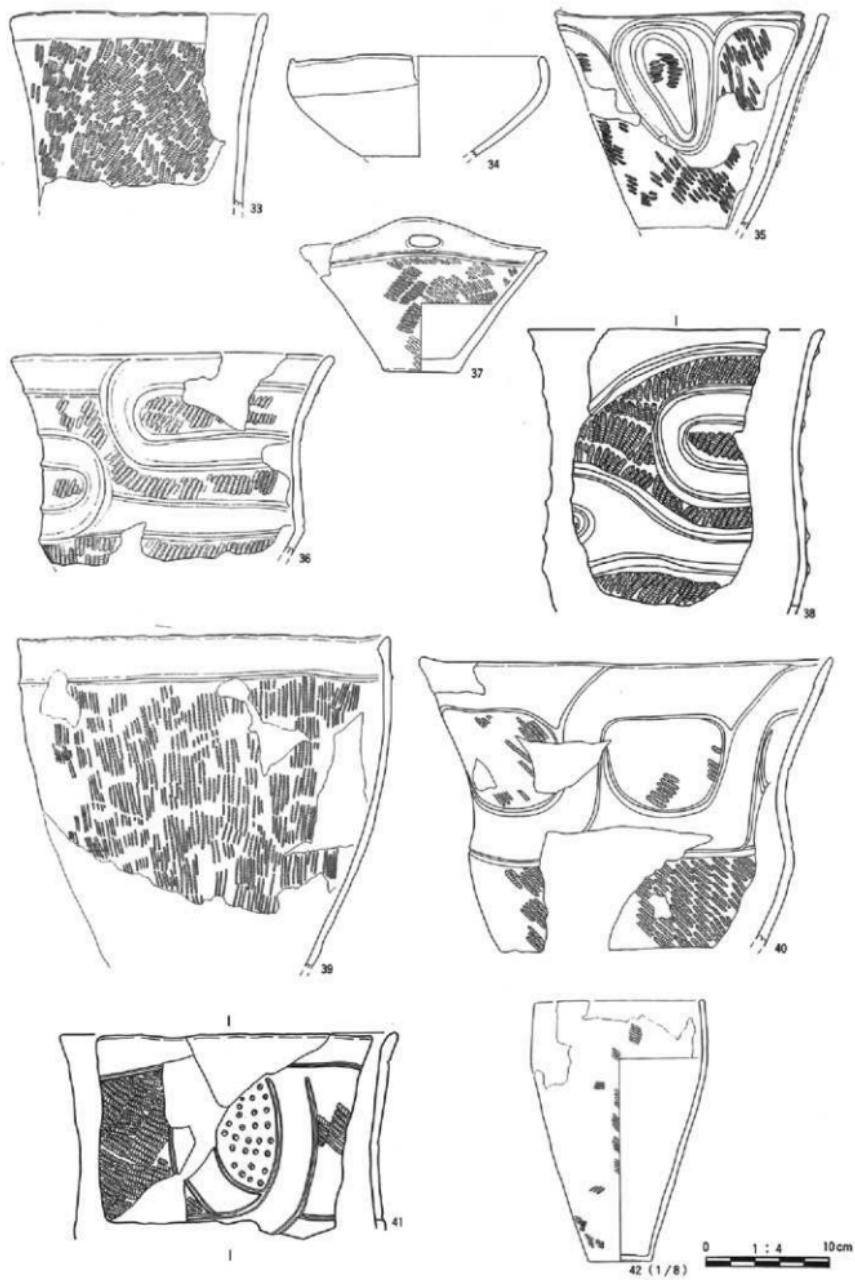
ST43住居跡もST105住居跡と重複しており、ST43住居跡の方が新しい。ST43住居跡は複式炉と床面それに覆土の土器群に興味ある関係が認められる。本住居跡の複式炉EL68の埋設土器 (第35図48) には「U」字状の磨消縄文帯が連続して施されており、炉内の浅鉢 (同50) にも逆「U」字状の磨消縄文がみられる。床面出土の土器には器高の低い深鉢 (49) と「e」字状の文様をもつ浅鉢 (51) がある。F 1・2・4層の土器群 (同53~63) については第V章で改めて述べる。ST43住居跡の時期はEL68の埋設土器などから下層遺構のI期 (大木10式古段階) に比定される。ST105住居跡は時期が確定でき遺物はないが、重複関係から同じ頃と想定される。

ST86・87・125・126の4棟の住居跡は各々重複関係を有している。ST86と87住居跡の前後関係は不明である。ST125住居跡の床面からは図示できる土器はないが、上層のF 1 から柄状把手の付いた深鉢 (第36図65) が出土している。またST125を切るSK130土壤から口縁部に隆帯によって区画された無文帯をもつ深鉢C 2類 (同70)、SK135土壤から深鉢A 2類 (69) が出土している。ST126住居跡の床面を掘り込んでEU79 (66) が埋設されている。磨滅が著しいが全面に縄文が施されたものと思われる。このほかF1から小形深鉢 (67) も出土している。ST86住居跡の床面から全面に縄文が施された深鉢C類 (64)、ST87住居跡を切るSK142土壤から口縁部に沈線によって区画された無文帯をもつ深鉢D類 (68) が出土している。

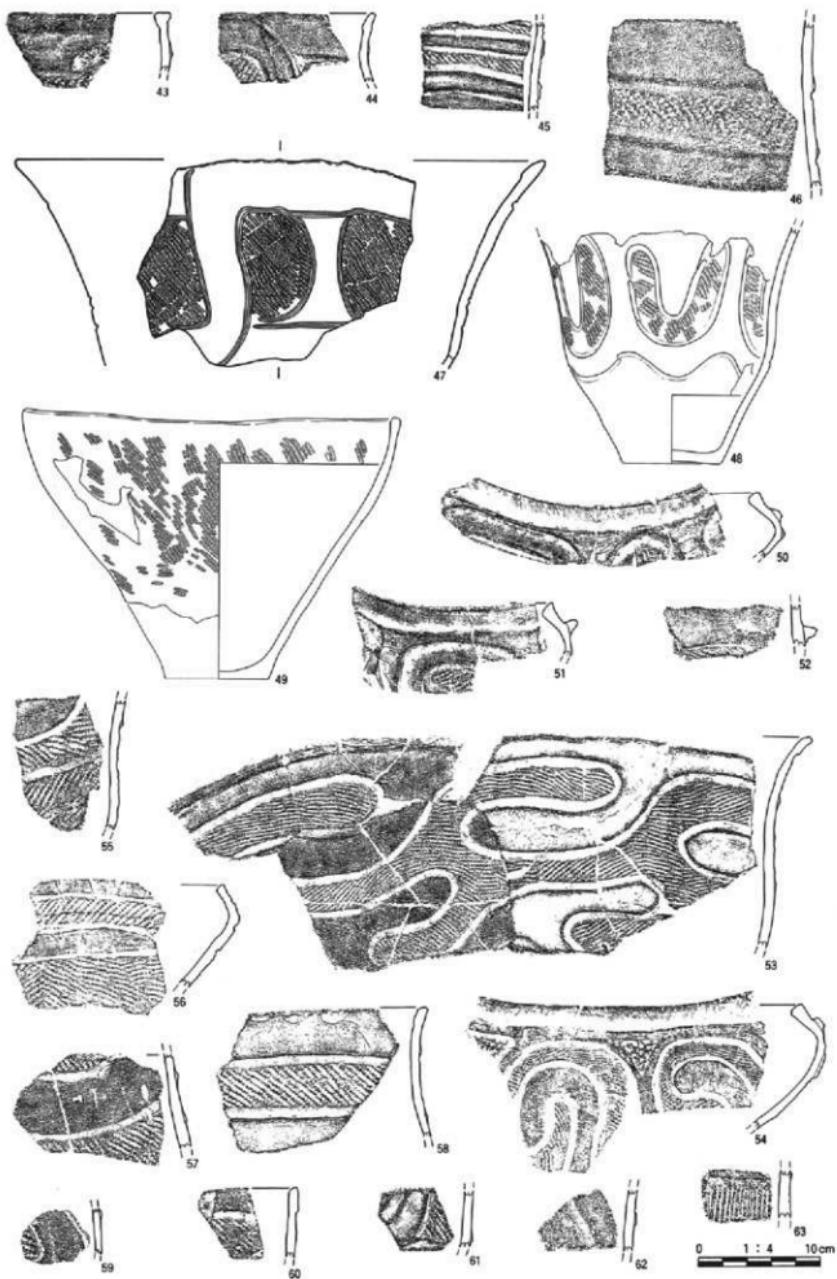
ST44・98・104・110・165の5棟の住居跡は各々重複関係を有している。ST165住居跡の床面からの出土土器はないが、床面を掘り込んで上下が欠損したEU89 (第36図74) が埋設されている。ST98住居跡の床面からの出土土器はないが、F 6 から有孔石製品 (第46図13) が出土している。ST44住居跡の床面からの出土土器はないが、F 2 から全面に縄文が施文された深鉢の胴部下半 (第36図75) と範状石器 (第45図38)、F 3 から石鏃 (第44図4) が出土している。



第33図 繩文土器実測図(3)



第34図 繩文土器実測図(4)



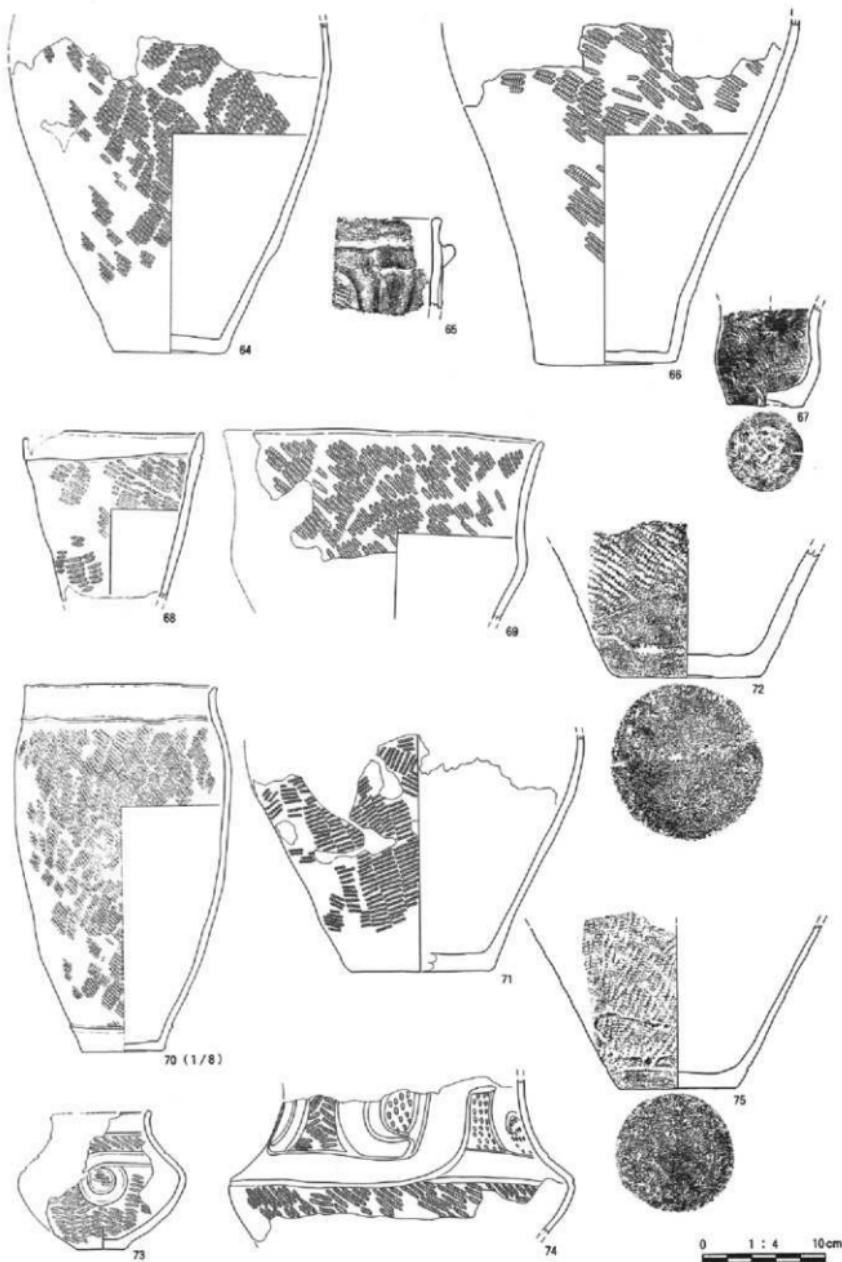
第35図 挿文土器実測図(5)

ST104と110住居跡はほぼ同位置にあり、ST110の壁と石組複式炉EL124・122・107を壊してST104の石組複式炉EL123・111と壁が構築されている。両住居跡とも2～3基の石組複式炉があることなどから、各々2～3時期の立替えが推定される。特に石組複式炉の埋設土器がよく残っており、時期的な変遷がうかがえる。ST110住居跡の炉のうち床面下のEL124の埋設土器（第37図76）は隆帯によって区画された楕円文をさらに隆帯によって二つに分割した特徴ある文様と「L」字文が、新しい方のEL107の埋設土器（同77）は隆帯による二分割の楕円文と波瀾文、ST104住居跡の炉のうち古い方のEL123の埋設土器（78）は隆帯による玉抱き文、新しい方のEL111の埋設土器（79）は縦位の撚糸文が施されている。ST110住居跡のF10出土の土器（80・81・83）も同じ頃のものであろう。また、ST104住居跡の北壁寄りの床面からは沈線による方形の区画文をもつ土器（84）と隆帯による玉抱き文と方形区画文をもつ土器（85）が出土している。石器はEL107から石錐（第44図30）、EP11から石匙（同12）などが出土している。さらにST104住居跡のF8からは玉抱き文を有する壺形土器（第36図73）や有孔で突起をもつ深鉢（第37図86）、土器底部（第36図72）が出土している。石器はED15から石匙（第44図25）、F8から異形石器（第45図61）、有孔石製品（第46図14）などが出土している。ST165・98・44の3棟の住居跡は床面からは文様のある土器が少ない。

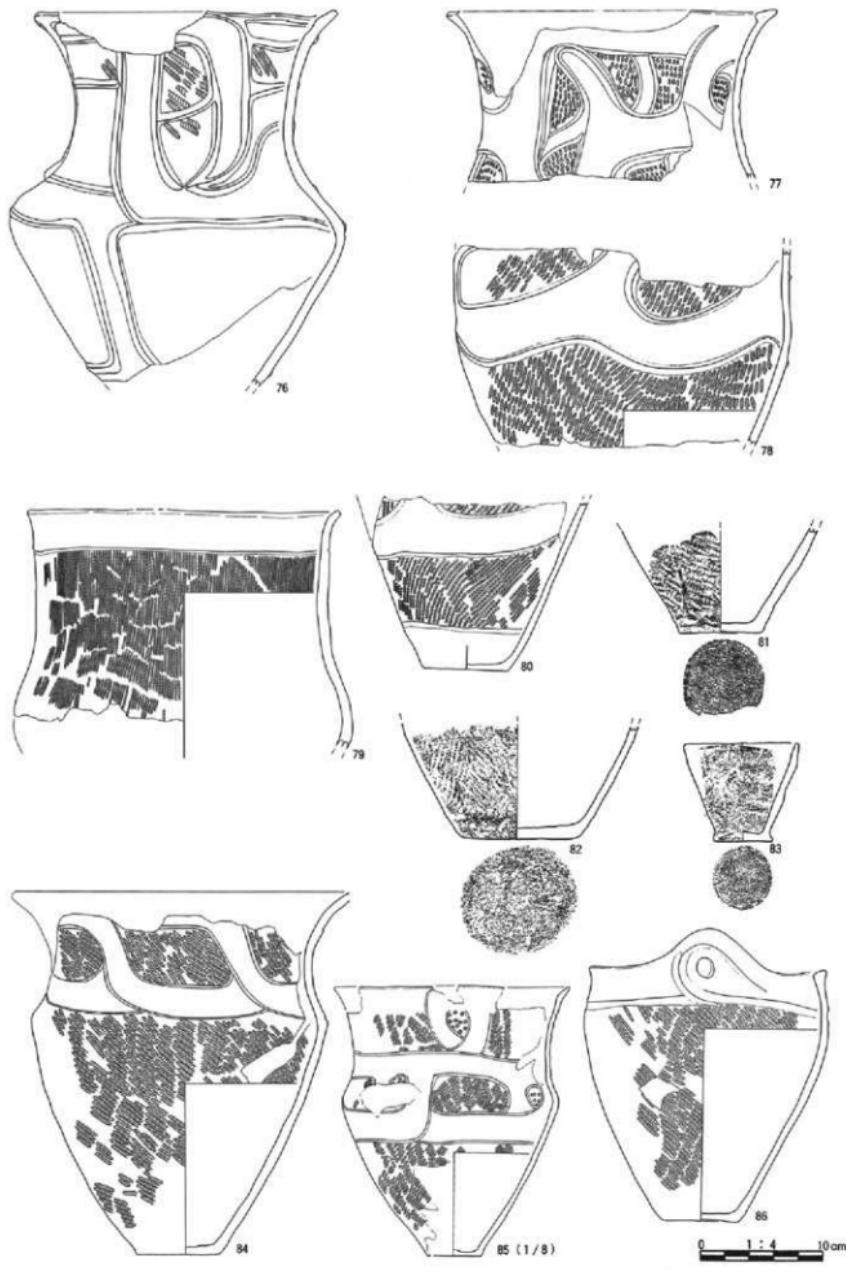
ST46・85・95の3棟の住居跡は各々重複関係を有している。また、ST46住居跡は南西部でST98・165住居跡を切って構築されている。ST85・95住居跡とST84住居跡の重複関係は、間をSD22溝跡に切られているため不明である。ST95住居跡の床面の出土土器はないが、床面を掘り込んで上部が欠損したEU177（第38図95）が埋設されている。ST85住居跡は石組複式炉EL96から全面に刷毛目を有する埋設土器（同88）、床面から縦位の撚糸文が施される深鉢（同87・91）、F2から口縁部に沈線によって区画された無文帶を有する深鉢B2類（同92）や深鉢の胴部下半（89・90）が出土している。ST46住居跡の床面の出土土器はないが、石組複式炉EL71から上下が欠損した埋設土器（同94）、F2から土側の頭部（第43図3）と石錐（第44図5・7）が出土している。ST46・85・95の3棟の住居跡は床面からは文様のある土器が少ない。

ST82・84の住居跡は各々重複関係を有している。また、ST82住居跡は北東部でST81住居跡に切られてている。ST82住居跡の床面からの出土土器はないが、床面を掘り込んでEU97（第38図93）が埋設されている。ST84住居跡は石組複式炉EL106から沈線による玉抱き文を有する埋設土器（第39図96）が出土している。このほかST84住居跡内にSK158・159の二つの土壙があるが、ST84住居跡の床面下から検出されたことから両土壙の方が時期的に古くなる。このうちSK159土壙のF2からによる方形の区画文をもつ小形深鉢A類（同97）が出土している。

ST47・103・116の3棟の住居跡は各々重複関係を有している。ST103住居跡は西側がSD22溝跡に切られていることもあり、時期を決定できる資料は出土していない。ST47住居跡の床面からの出土土器はないが、F2から隆帯による横位の楕円文を有する土器片



第36図 縄文土器実測図(6)



第37図 織文土器実測図(7)

(第39図98・99)、F 3から隆帯による方形の連続区画文を有する深鉢(同100)や深鉢の脇部下半(103)が出土している。ST116住居跡の床面からの出土土器はないが、住居跡の床面を切って構築されているSK121土壤から深鉢(同102)が出土している。

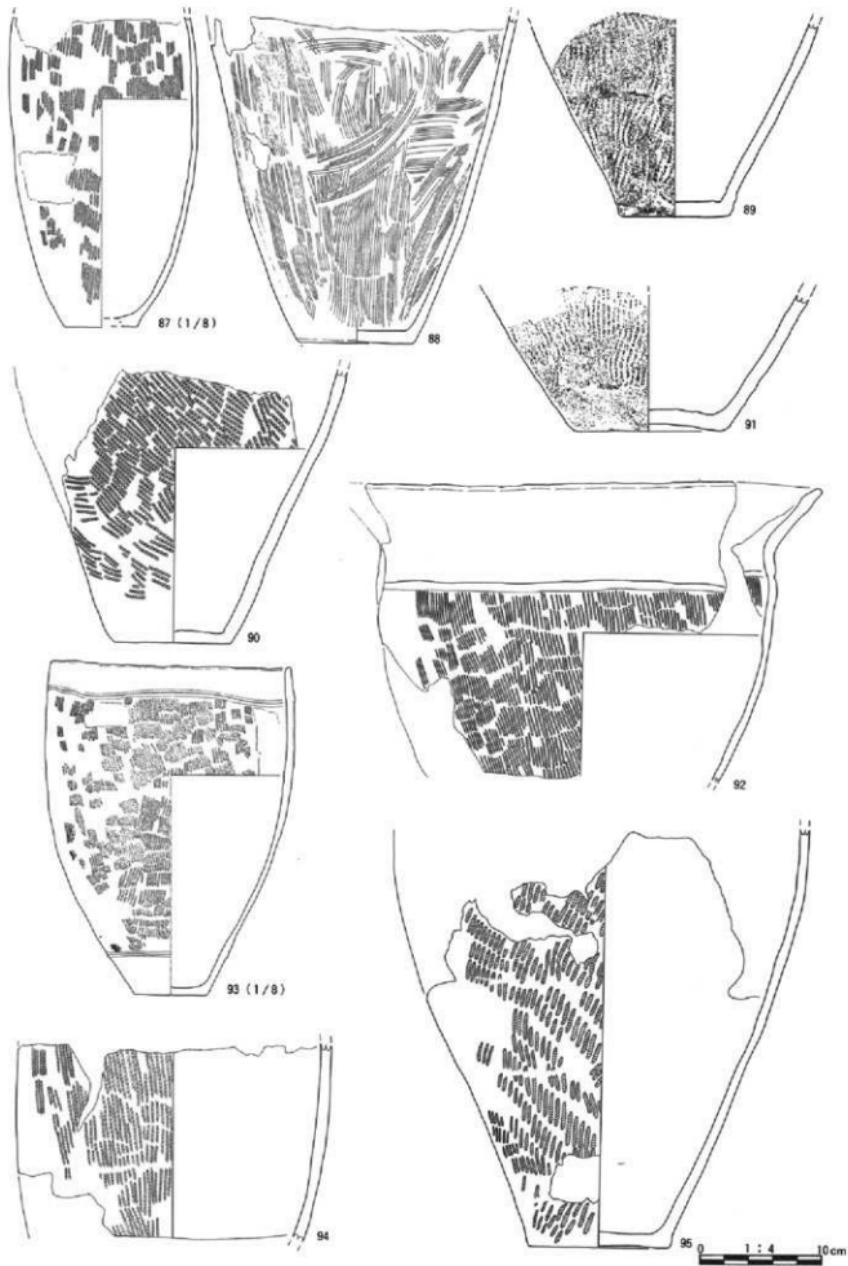
ST116住居跡の西側に位置するST117住居跡は、遺物の出土量が少なく、床面などで時期を明かにできる資料もない。本住居跡の覆土や壁面を切ってSK118・164土壤が構築されているが、両土壤からも良好な資料はなく時期は不明である。

ST73・75・76・81・89の5棟の住居跡は各々重複関係を有している。ST89住居跡では、ST76住居跡の南側周溝の下部から複式炉が2基検出され、西側のEL90からは隆帯による縄文を伴わない二分割梢円文と磨削縄文をもつ方形の区画文を有する埋設土器(第40図105)と隆帯による変形の「S」字状文を有する埋設土器(同107)、東側のEL91からは全面に縄文が施された埋設土器(同106)が出土している。また、F 7から縄文が施される深鉢の上半部(同104)も出土している。これらは全体として大木10式新段階に比定できる。ST75住居跡では床面からの石錐(第44図27)、F 2から隆帯による渦巻文を有する深鉢口縁部(第40図108)が出土している。ST76住居跡では複式炉が2基検出され、西側のEL88からは隆帯による梢円状の区画文と沈線による御目状文を有する埋設土器(同111)、東側のEL94からは隆帯による玉抱き文と方形の区画文を有する埋設土器(同112)が出土している。また床面から搔器(第45図40)、F 24から隆帯による梢円形の並列区画文と玉抱き文を有する深鉢(同110)や沈線による多条の渦巻文をもつ深鉢片(第41図114)、脇部中程に隆帯を有する深鉢下半部(同115)が出土している。

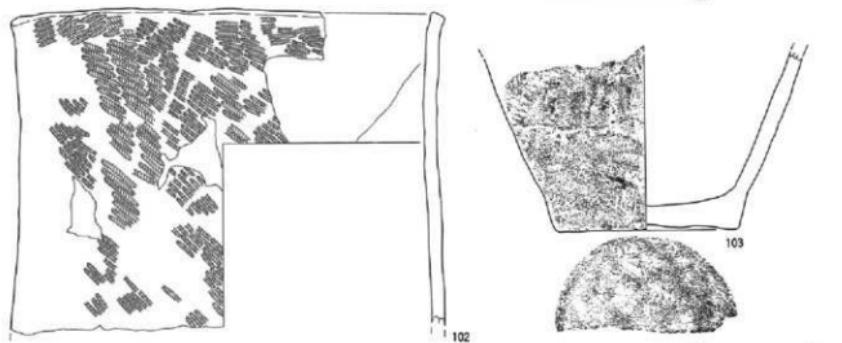
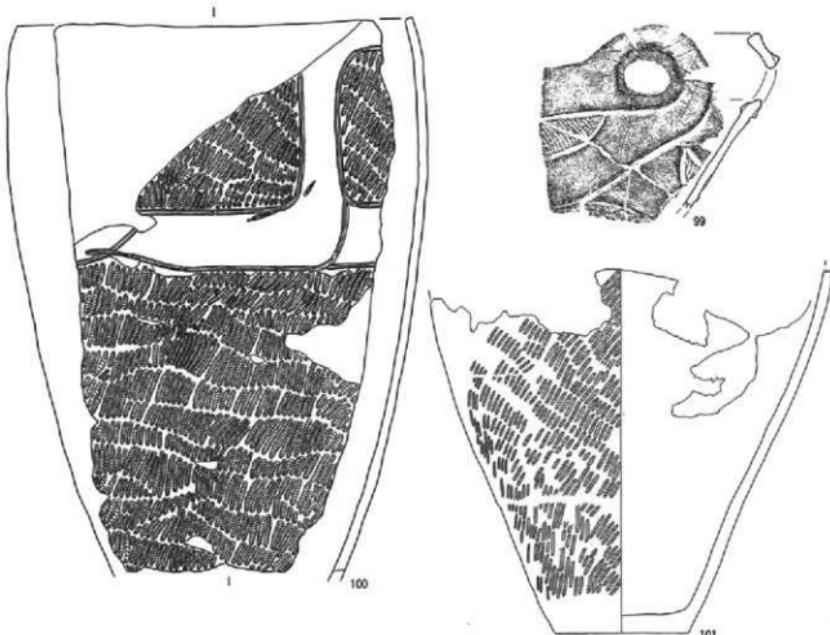
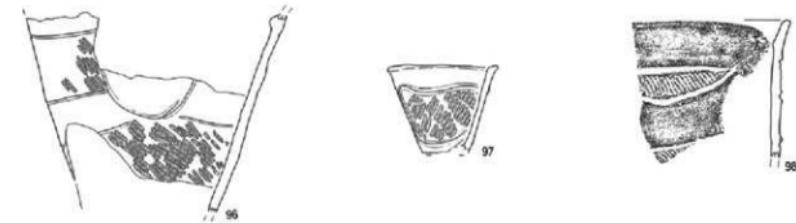
ST73住居跡では、EL83からは隆帯による玉抱き文を有する埋設土器(第41図118)と石皿(第46図18)、床面から隆帯による梢円文を有する深鉢(第41図119)・深鉢底部(同117)、床面を切って構築されているEU90埋設土器(同116)などが出土している。ST81住居跡では複式炉が2基検出され、北側のEL97からは隆帯による「C」字状文と波渦文を有する埋設土器(同121)、南側のEL115からは隆帯による玉抱き文を有する埋設土器(同120)が出土している。またF 17から石錐(第44図6)も出土している。

ST127・128の住居跡は各々重複関係を有している。また、ST127住居跡内にSK144土壤があるが、ST127住居跡の床面下から検出されたことから土壤の方が時期的に古くなる。ST127住居跡の床面からの出土土器はないが、床面下のSK144土壤内にEU162(第42図125)が埋設されている。隆帯による雁股文が脇部上半に施されている深鉢A 2類である。ST128住居跡も床面からの出土土器はないが、F 2から隆帯による玉抱き文を有する深鉢片(第42図123)や縄文を有する深鉢D類(同124)が出土している。

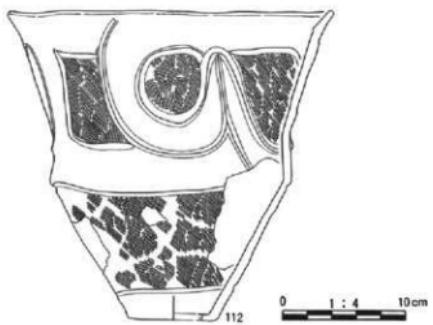
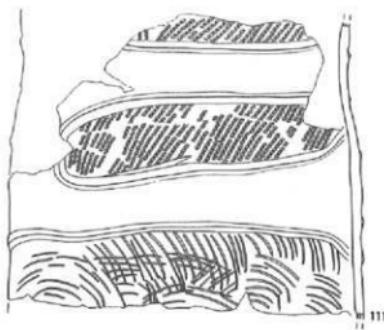
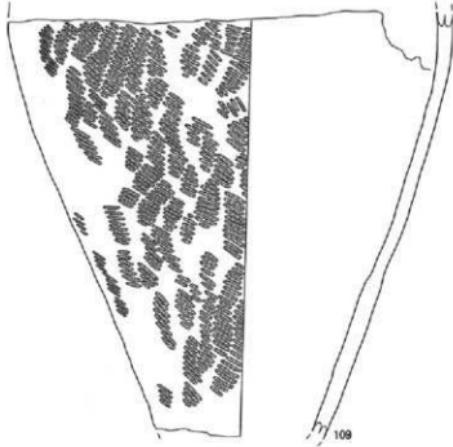
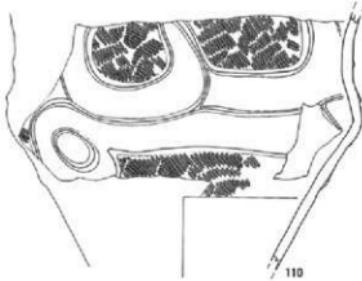
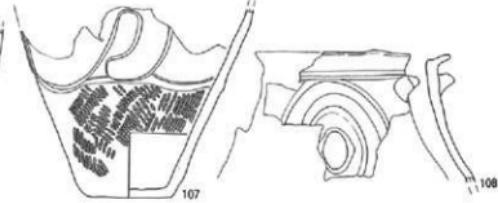
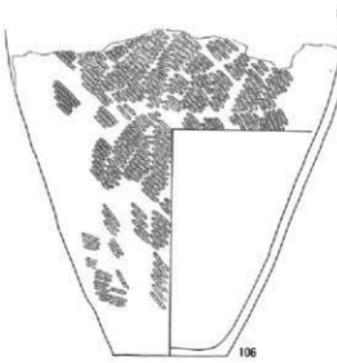
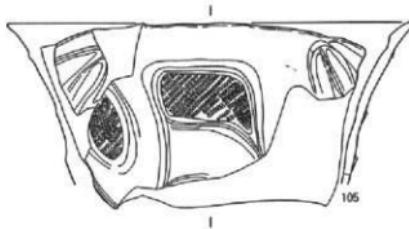
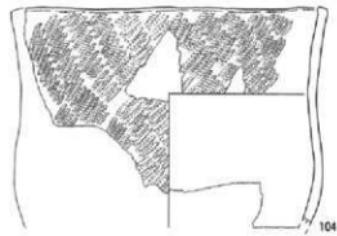
ST129・151の住居跡は重複関係を有しており、ST129が新しい。また、ST129住居跡東壁を切ってSK149・150土壤がある。ST151住居跡の床面からの出土土器はないが、F 1から隆帯による梢円形の区画文の鉢片(第42図126)や玉抱き文を有する深鉢片(同127)が出土している。ST151住居跡からは遺物の出土量が少なく、図示できる資料はない。ST129・151の2棟の住居跡は資料が少ない。



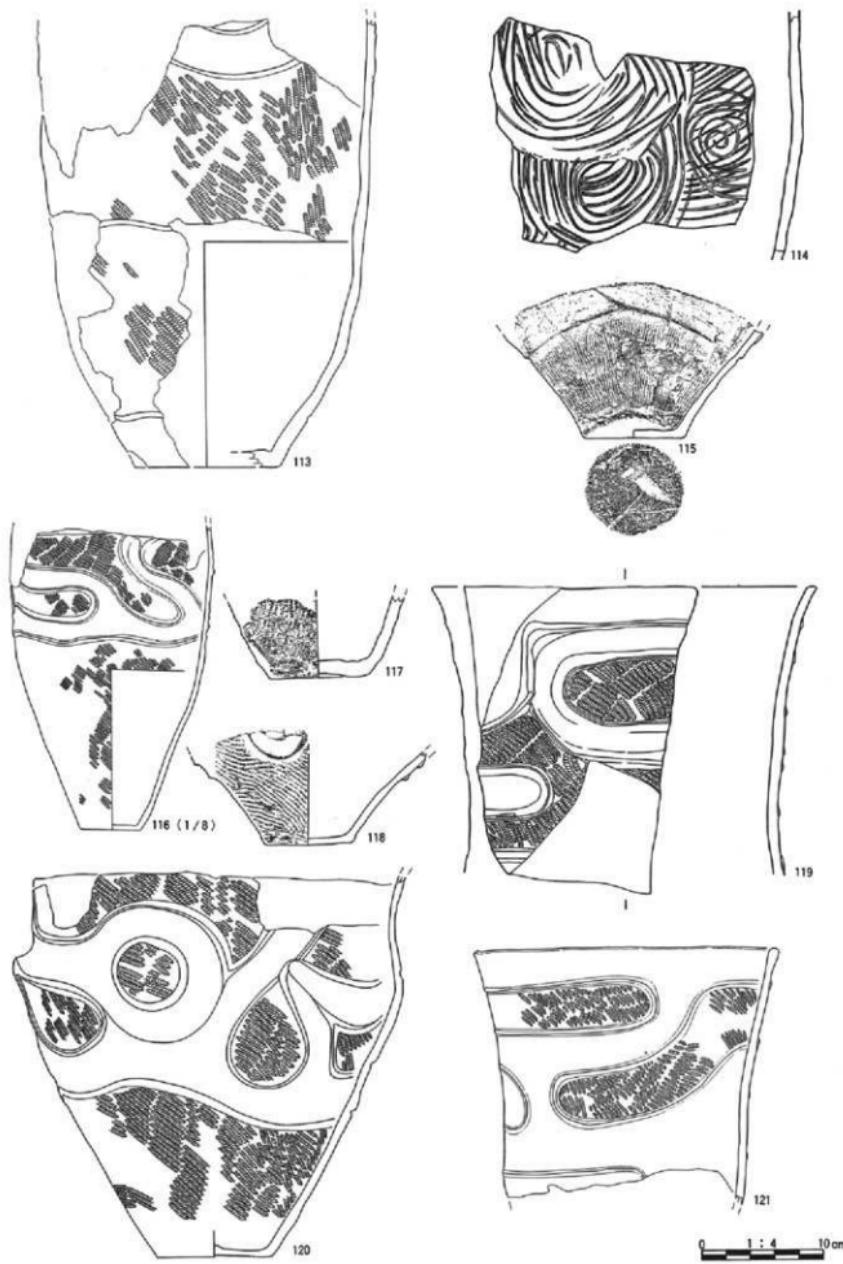
第38図 繩文土器実測図(8)



第39図 繩文土器実測図(9)



第40図 繩文土器実測図10



第41図 織文土器実測図(1)

### (3) 住居跡以外の出土遺物

竪穴住居跡以外の遺構として住居跡に伴わない単独の複式炉と土壙、埋設土器がある。ここでは住居跡の項でふれなかつた遺構の遺物について述べる。

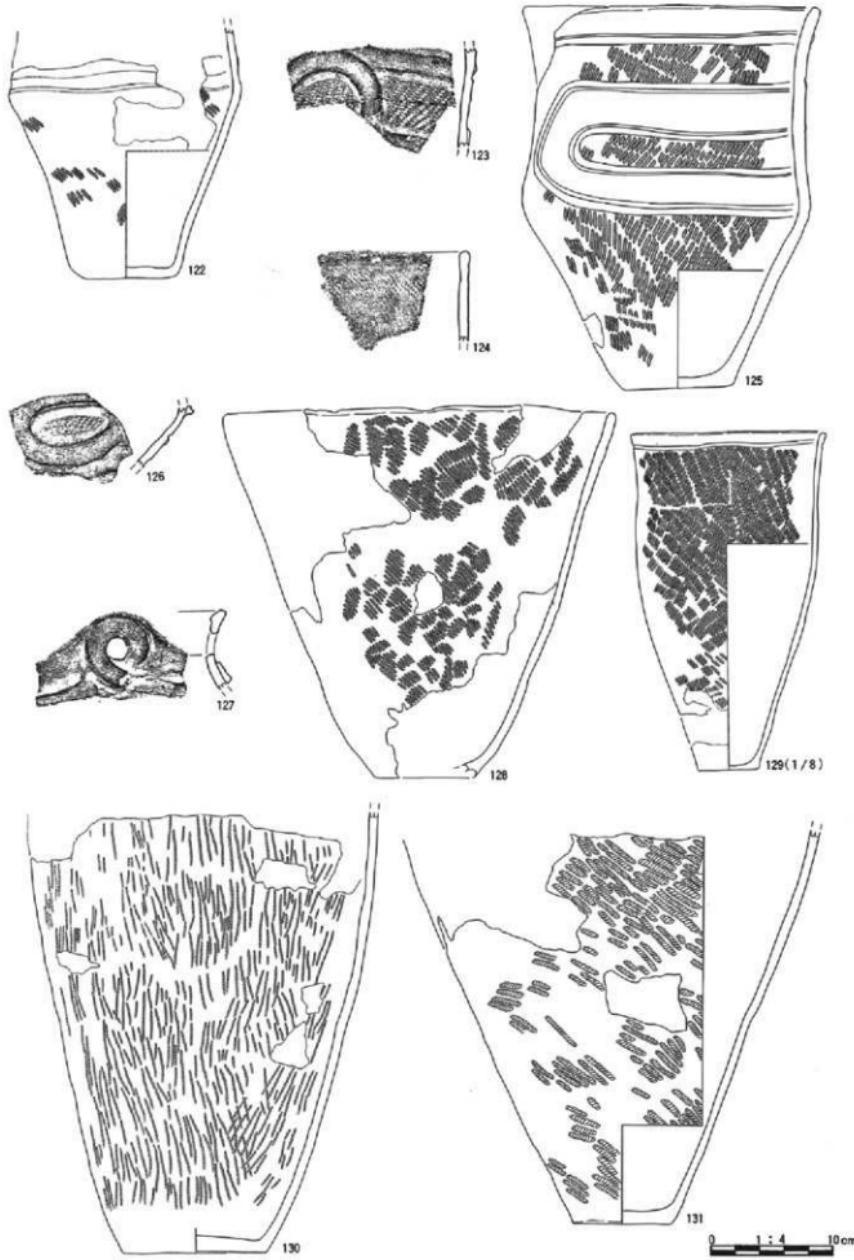
まず、壁や床面など住居跡の輪郭を示すものが確認できなかつため単独の複式炉として登録したEL171炉跡が、ST36住居跡の南側にある。炉跡の土器埋設部から縦位の撫糸文が全面に施される深鉢（第42図130）が出土しているが、詳細な時期は不明である。

単独の土壙は全部で51基検出されている。大きさは1m前後のものと、1.8m前後のものとがあり、平面形は円形ないし梢円形を呈し、隅がやや角張っているものもある。断面の形状は、①底面が丸みをもち深さが浅いもの（SK144・147）、②底面が平らで深さが浅いものの（SK120・141・149）、③壁が斜めに掘込まれ底面が平らで深さがやや深いもの（SK40・49・70・119）、④壁が垂直に掘込まれ底面が平らで深さがあるもの（SK131・132・143・152）、⑤底面が階段状で深さがやや深いもの（SK130・142・144・150・153）、⑥壁が袋状に掘込まれ底面が丸みをもち深さがあるもの（SK109・155）などに分けられる。

住居跡と重複関係をもたない単独の土壙のうち遺物がまとまって出土しているものとしては、SK37土壙のF3から頸部に細い1条の隆帯をもつ深鉢C類（第34図39）、SK40土壙のF3から胴部上半に沈線による方形ないし梢円形の区画文をもつ深鉢（同40・41）が出土している。SK40土壙出土の土器は、大木10式新段階に比定される。

住居跡に伴わない単独の埋設土器は全部で21基検出されている。埋設土器は①深鉢を直接埋設しているものと、②土壙などの大きな堀り方に埋設しているものとの二種類があり、数的には前者が圧倒的に多い。①類の埋設土器は、小さな堀り方の中に深鉢を直立正位に埋設してあるものが多く、底部の穿孔は認められない。①類にはこのほかEU76（第31図9）のように、深鉢の胴部下半を欠いて埋設したものや、EU89（第36図74）のように深鉢の上下を欠いて埋設したものも含まれる。②類の埋設土器は、土壙内に正位に置かれているもの（SK144土壙内EU162）と、土壙内に斜位に置かれているもの（SK130土壙内RP171）とがある。

住居跡と重複関係をもたない単独の埋設土器としては、ST36住居跡の東外から出土したEU76（第31図9・10）、同南西外から出土したEU71（第42図129）、ST50住居跡の北外から出土したEU161（第42図131）、ST76住居跡の南東外から出土したRP156（第41図113）、ST80住居跡の北外から出土したEU86（第36図71）、ST128住居跡の西外から出土したEU85（第42図122）、単独のEU81（第39図101）、EU95（第42図128）がある。ほとんどが地文に縄文ないし撫糸文が施されているだけで詳しい時期は不明であるが、住居跡出土の土器の様相から、時期は縄文時代中期末葉大木10式期に推定される。



第42図 繩文土器実測図2